

521. 2-Sh12ㄅ

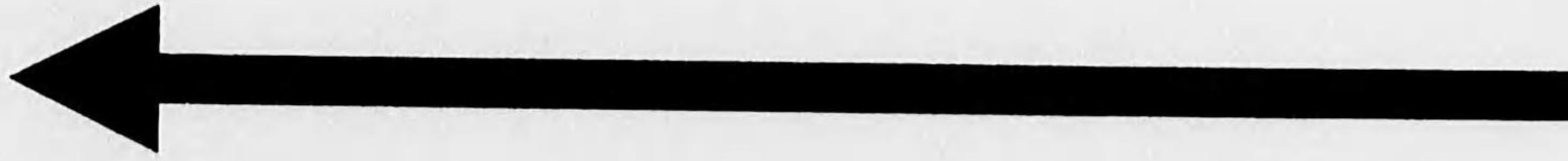


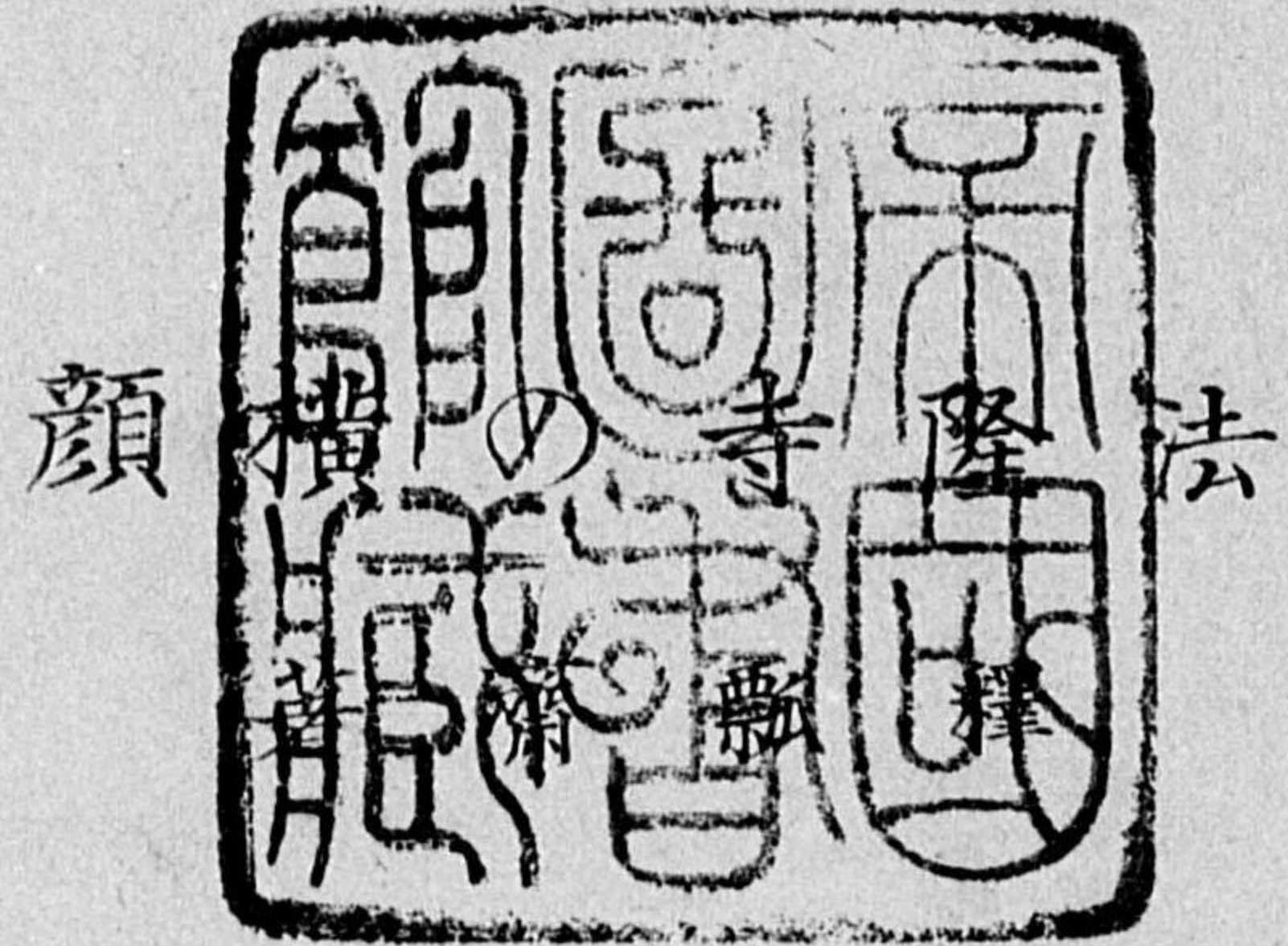
1200500745233

12
12

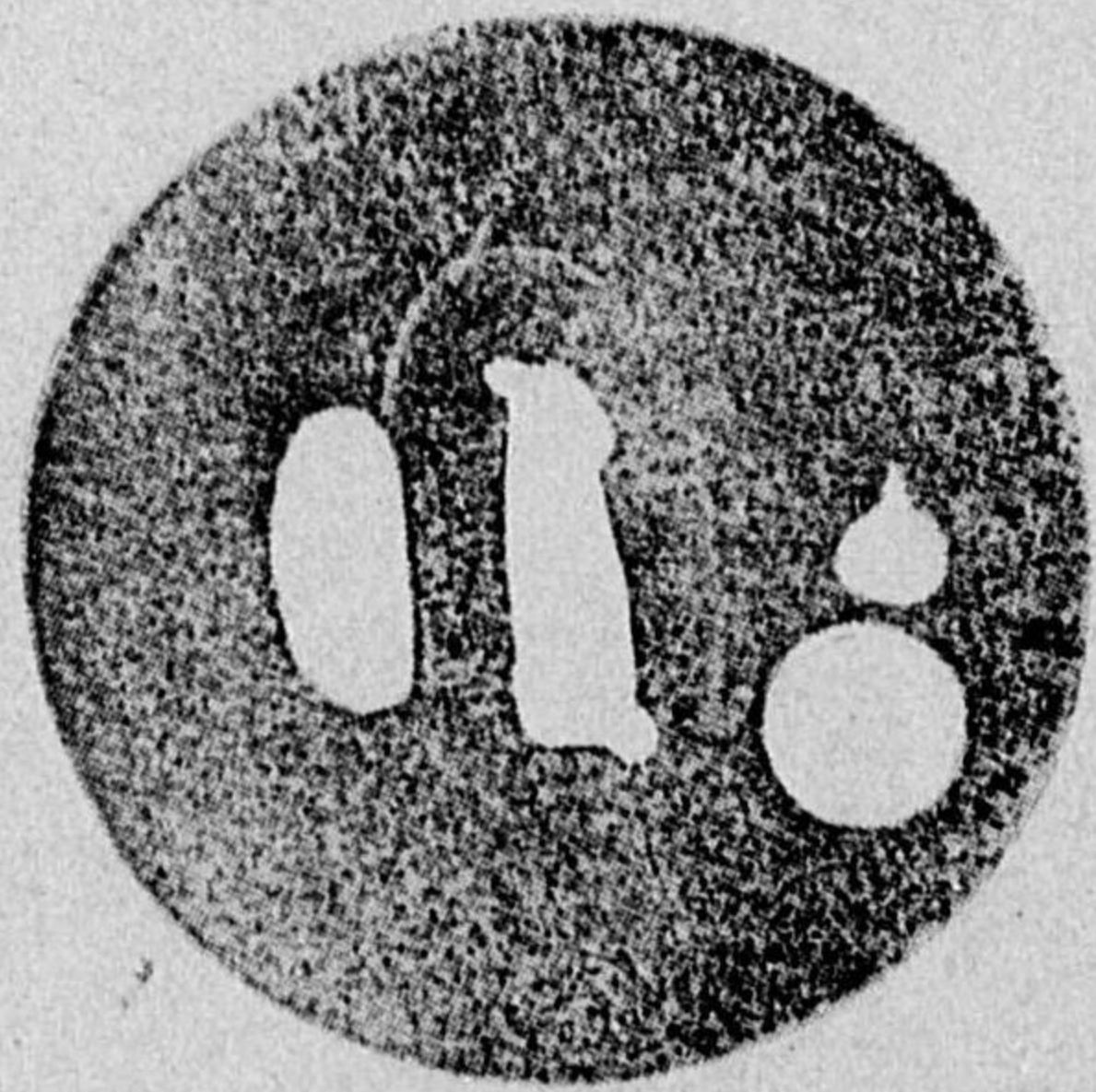


始





521.2
SH12

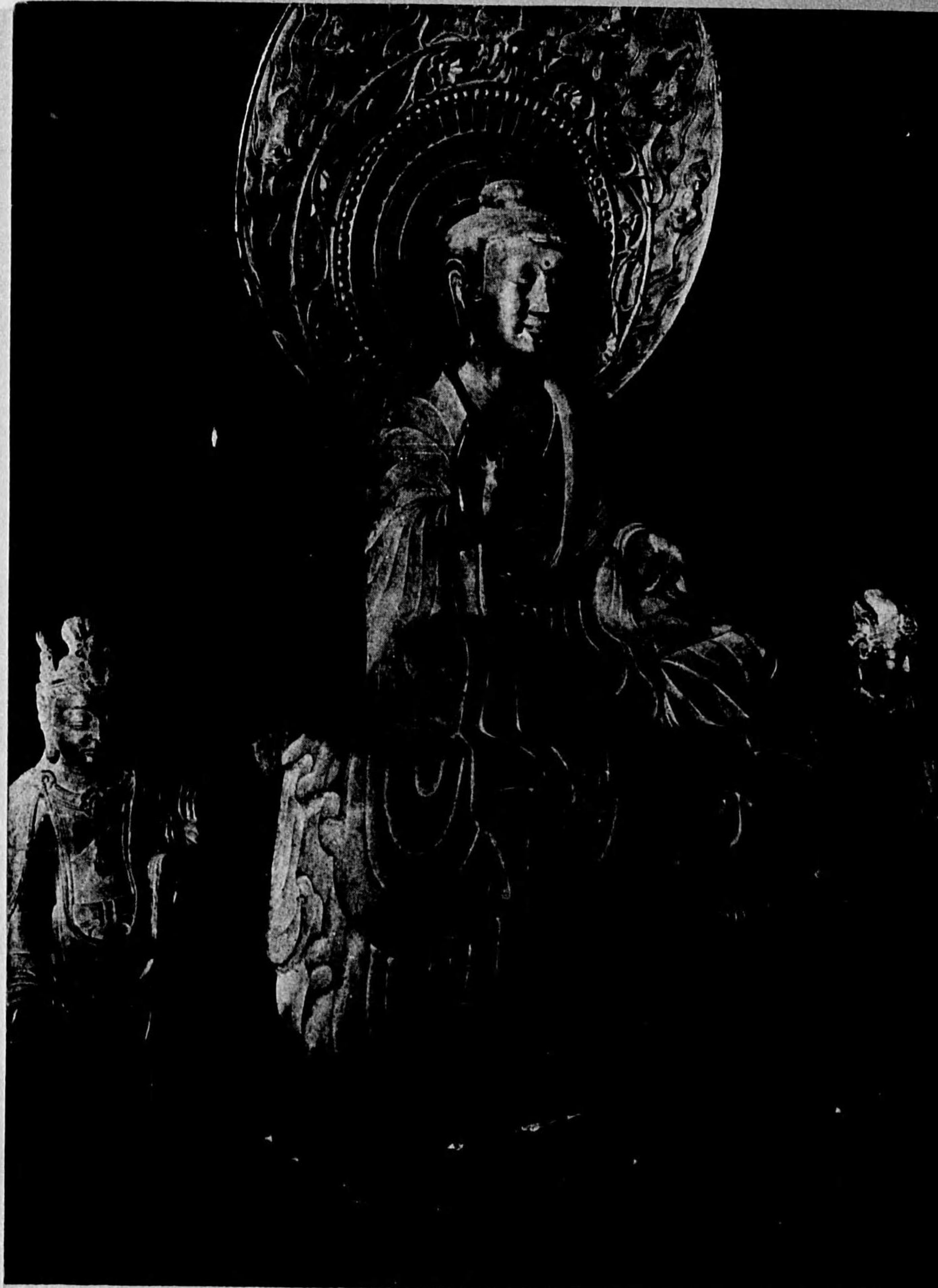


刊部版出舍鶴





野村邸における若草塔址礎石の筆者



法隆寺金堂本尊藥師如來像

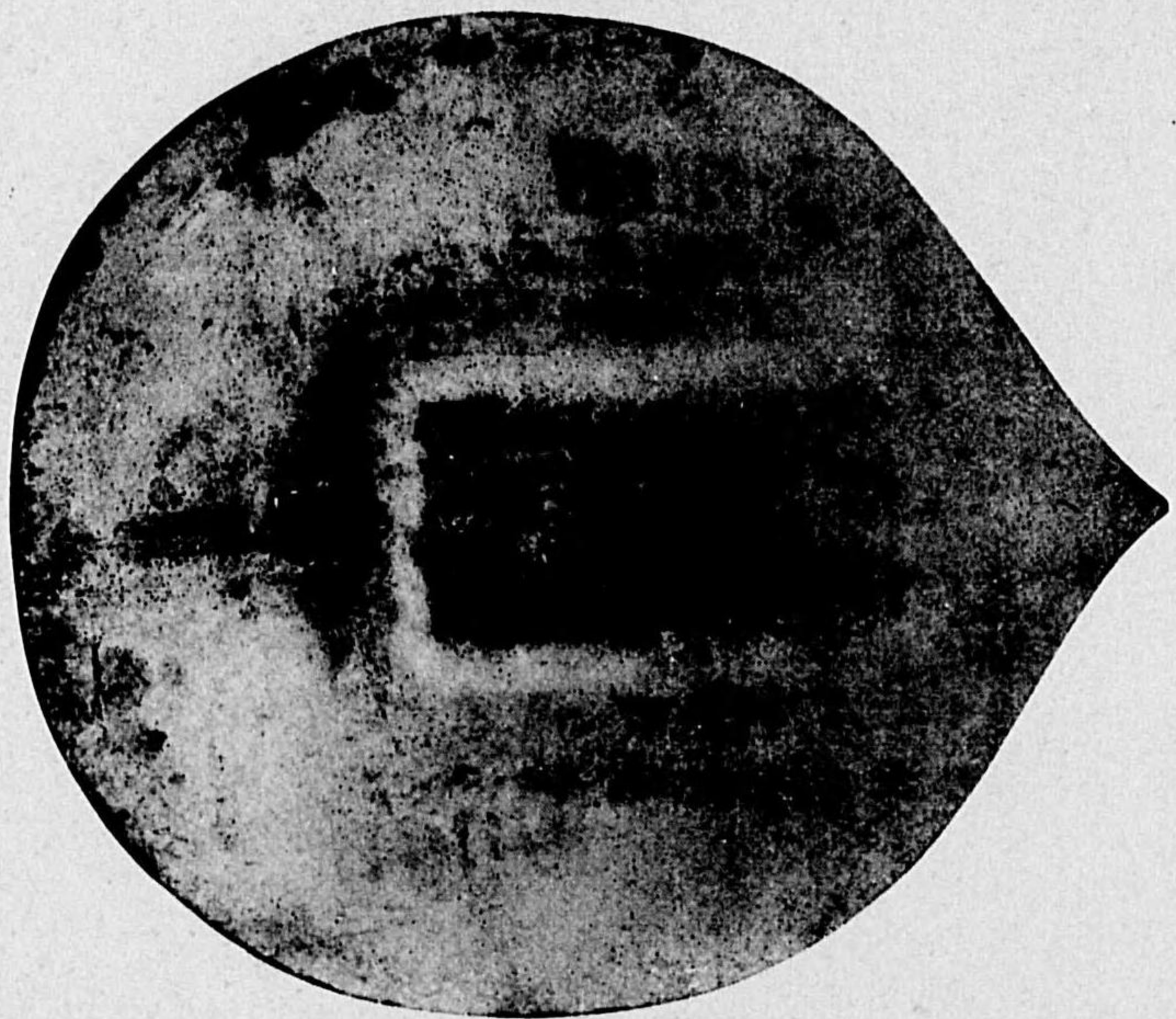


曉の法隆寺

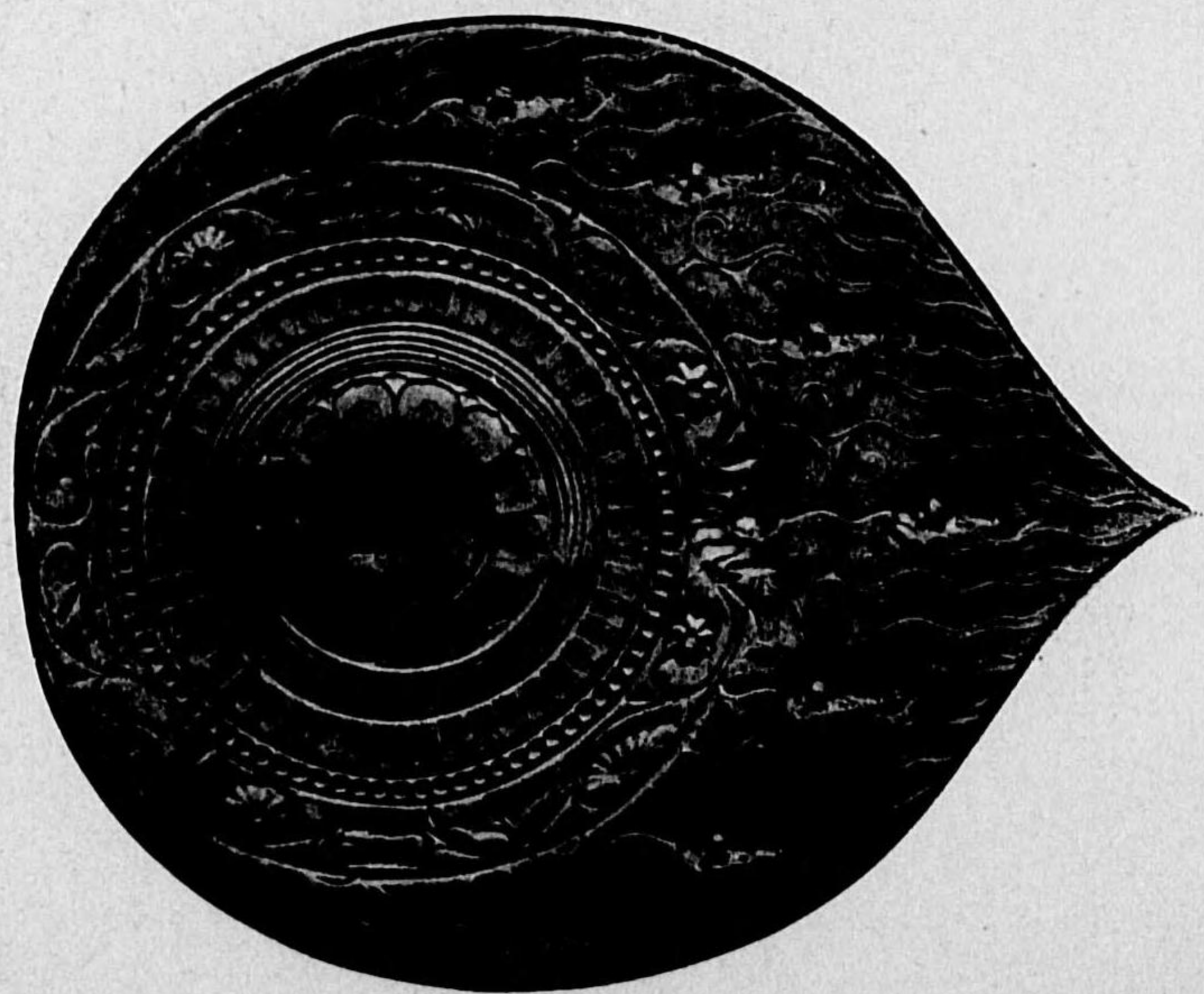
(午前六時撮影)

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲
 次丙午年凶於天皇天皇之大牙而誓願賜我大
 却病太平欲坐故將造寺藥師像作任奉詔狀
 當時崩賜造不堪者以治田大宮治天下天皇大
 皇及東宮聖王天命受賜而歲於丙卯年社奉

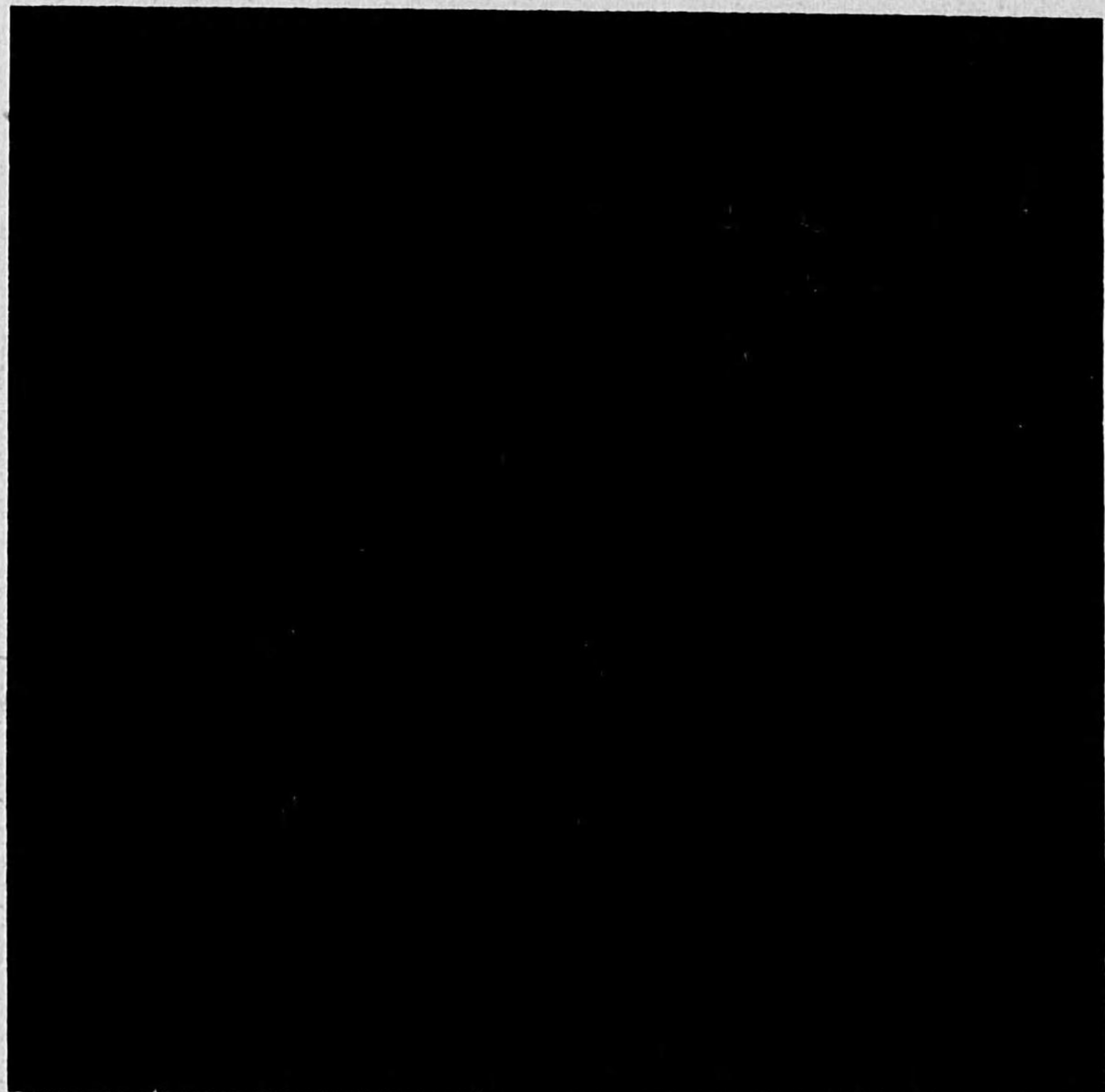
法隆寺金堂本尊藥師來光背銘文



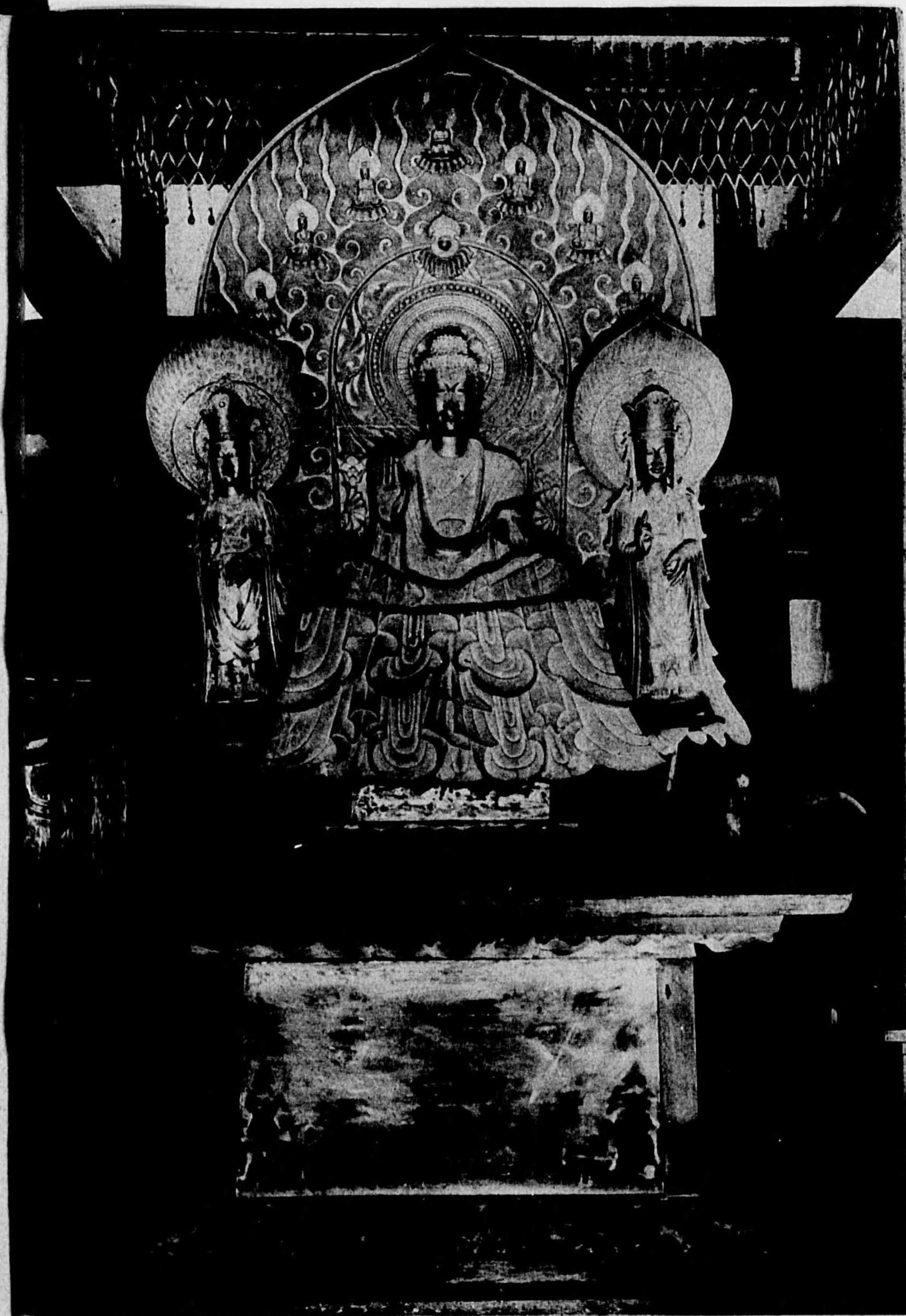
藥師像光背裏面



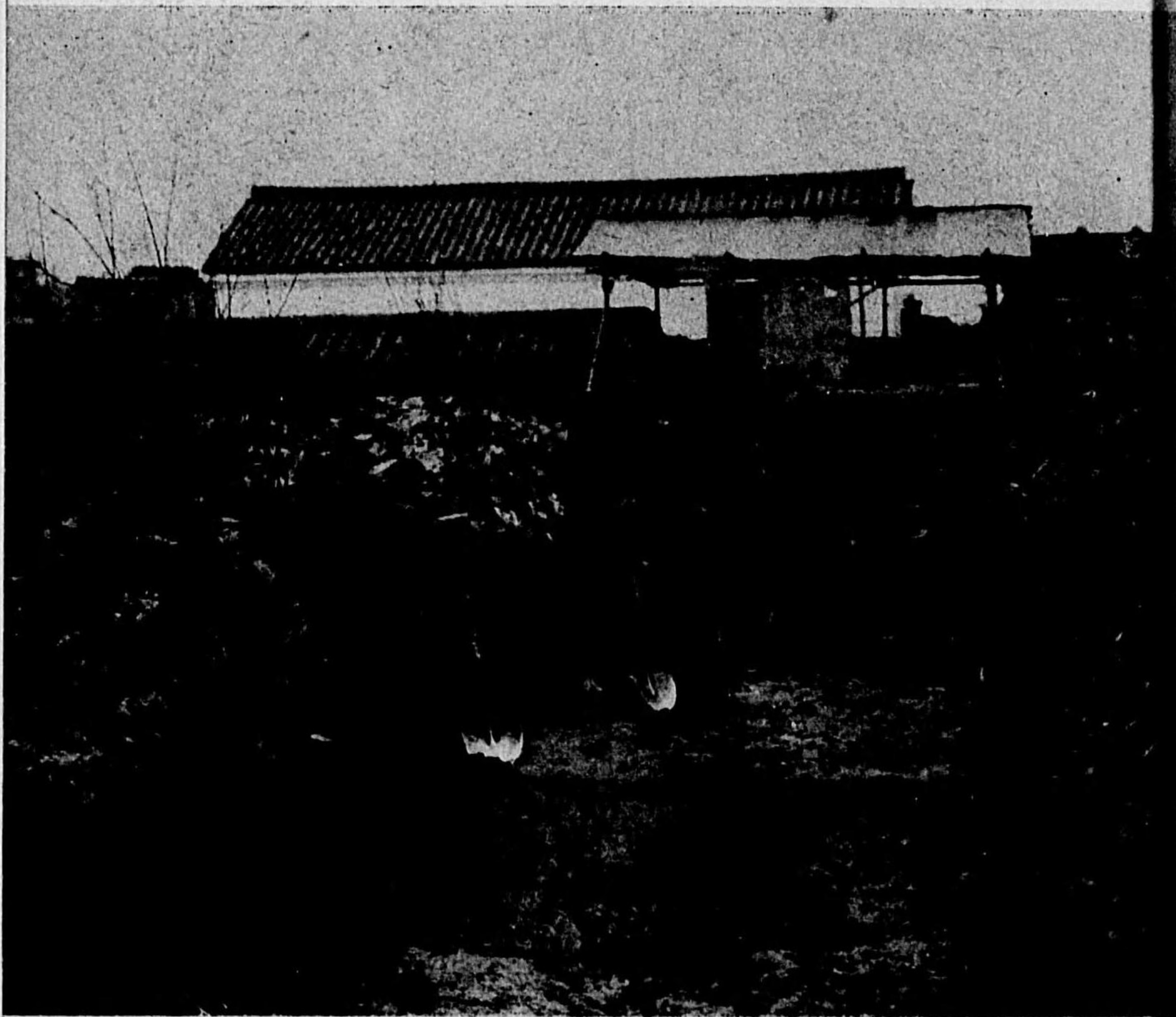
藥師像光背外面



法隆寺本尊三迦釋尊背光銘文



法隆寺金堂本尊三迦釋尊像

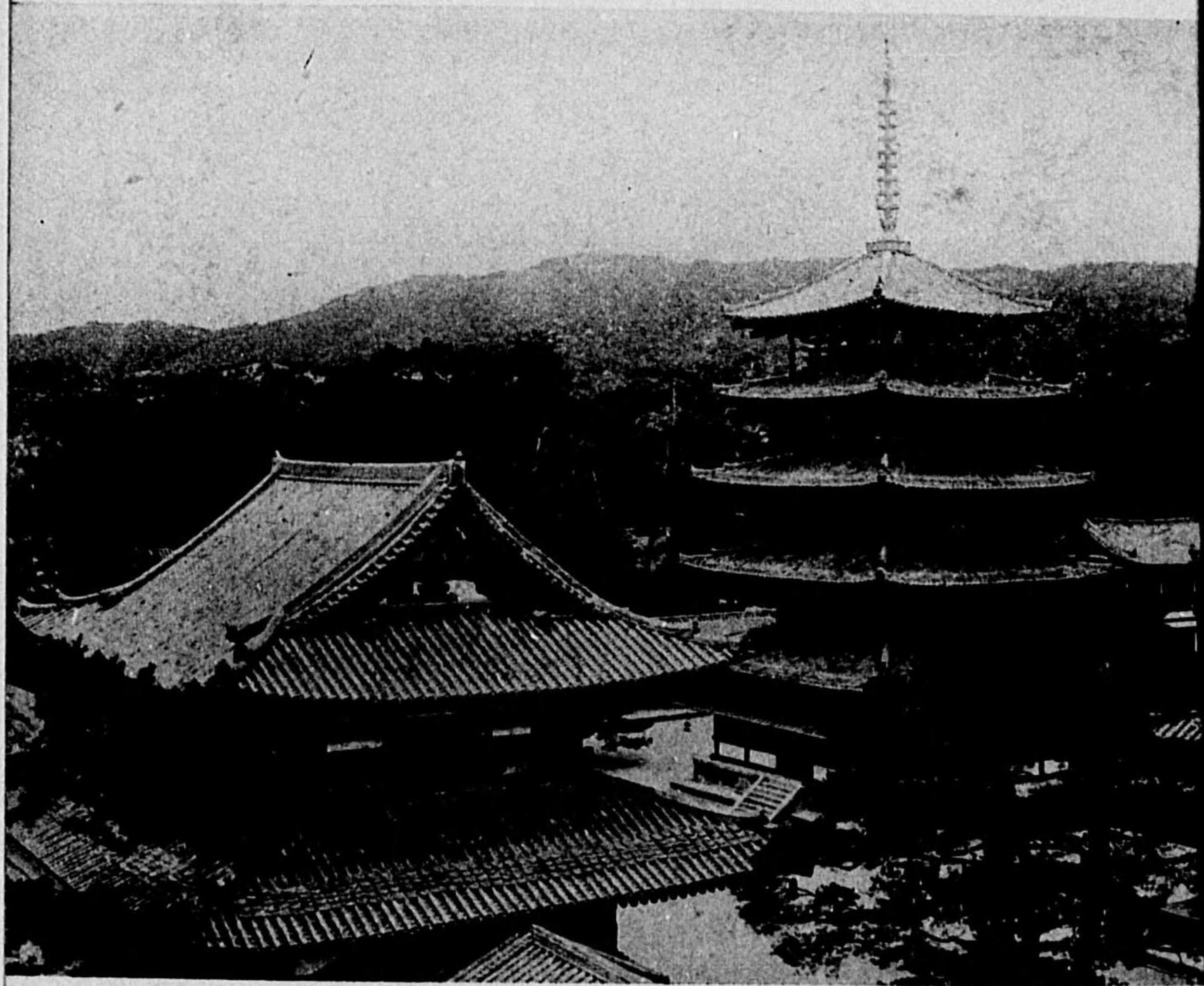


のもしせ影をチンレトの北南りよ裏門管
るみてし土出が尾村文多忍の敷多りよチンレトの底
る大見が礎心くさ小に方前

場現掘發址藍伽草若寺隆法たけ投を題問

礎心塔草若寺隆法たつ歸に置位の元りよ邸付野

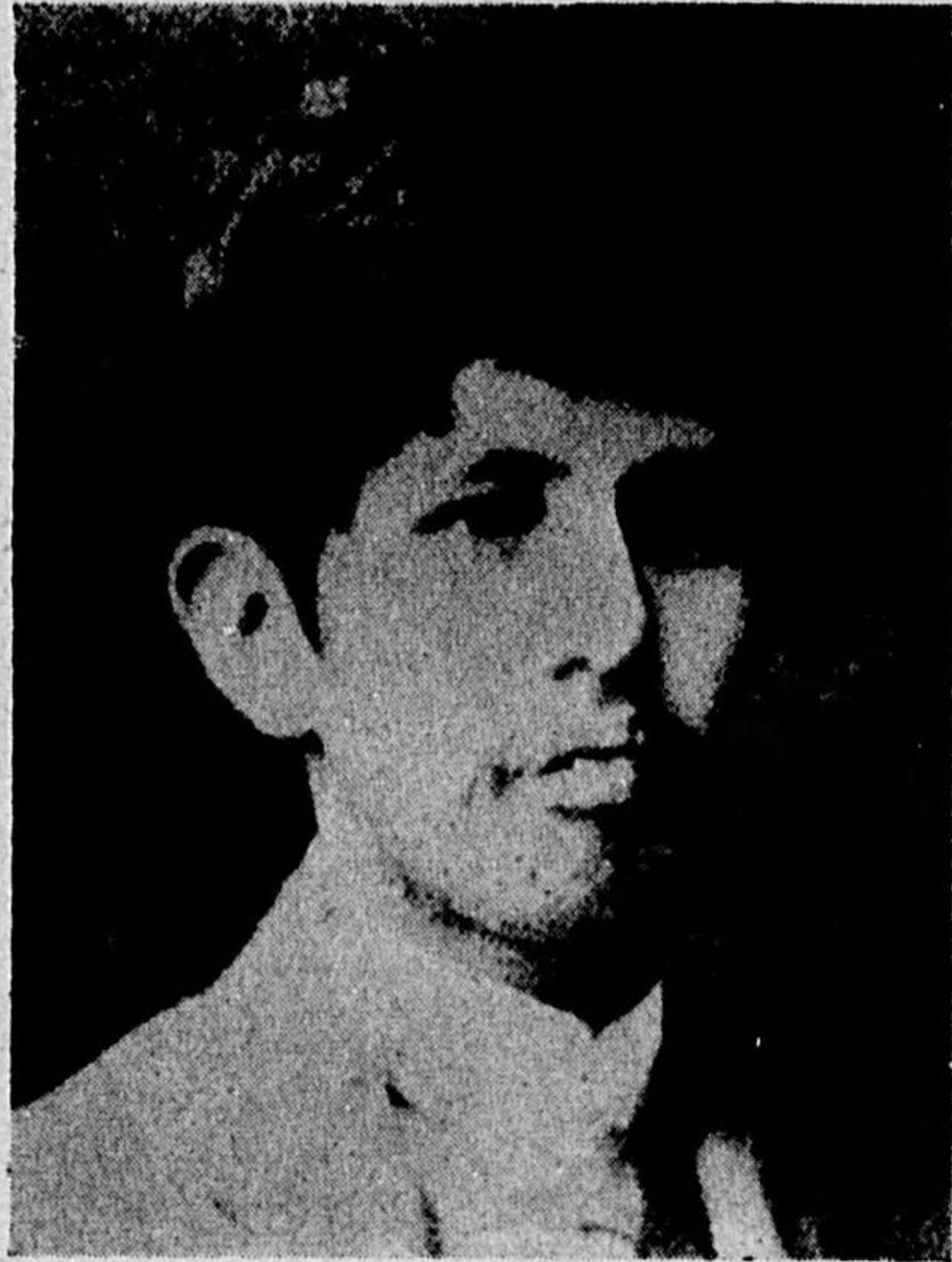




現存の法隆寺伽藍中樞部俯瞰



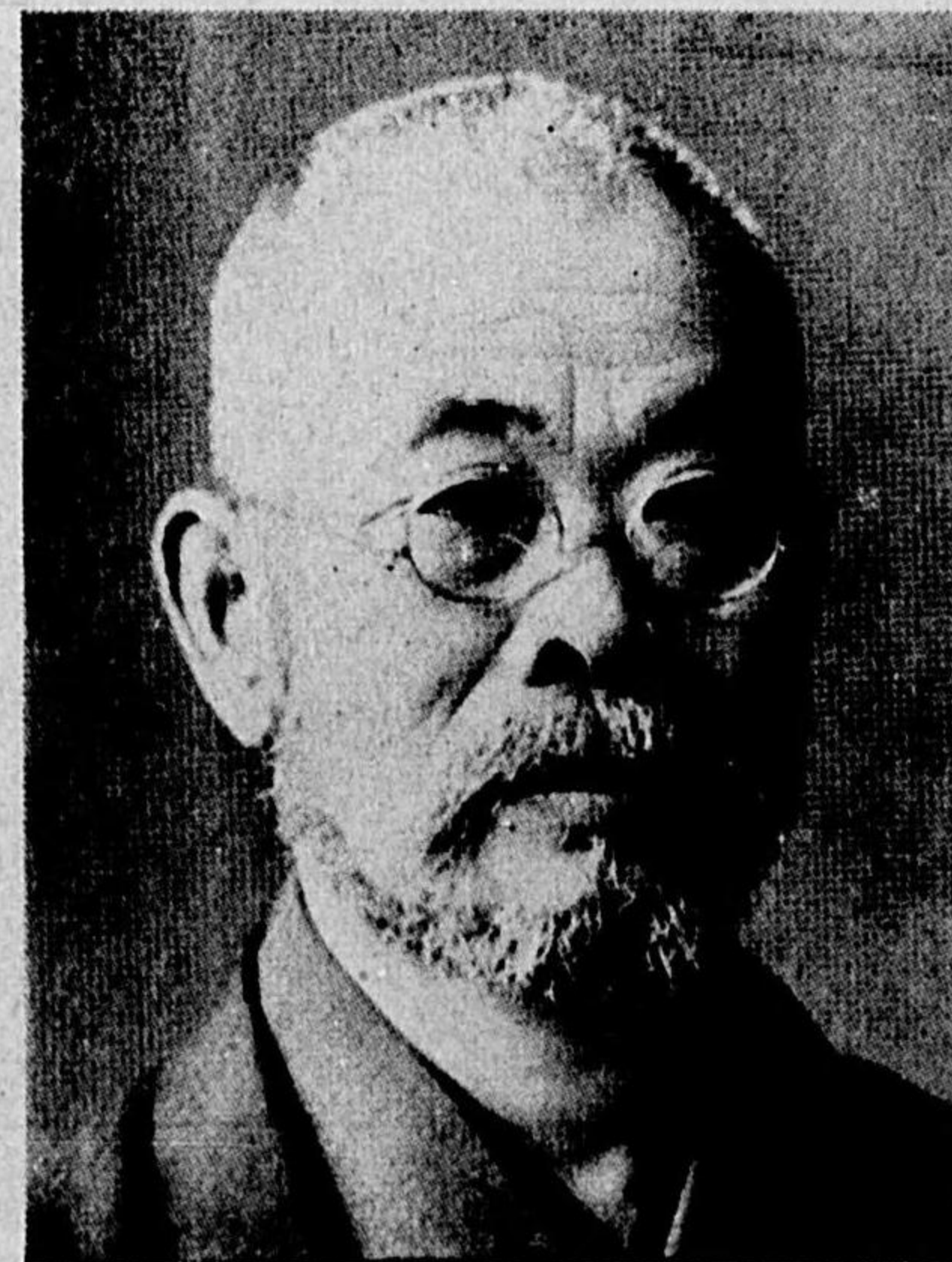
明治十二年頃の法隆寺太子殿附近詳細



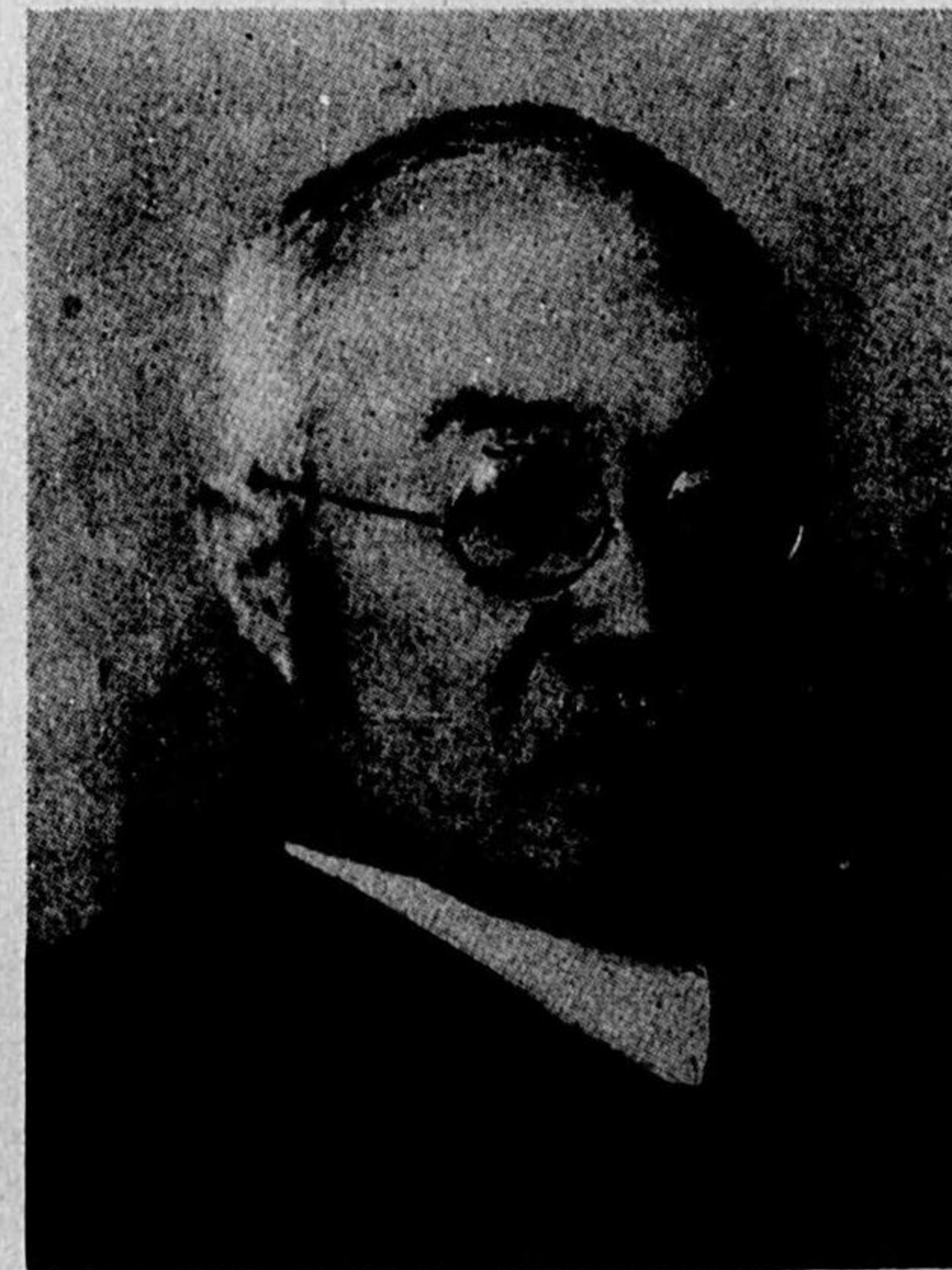
平子鐸嶺氏



北島治房男爵

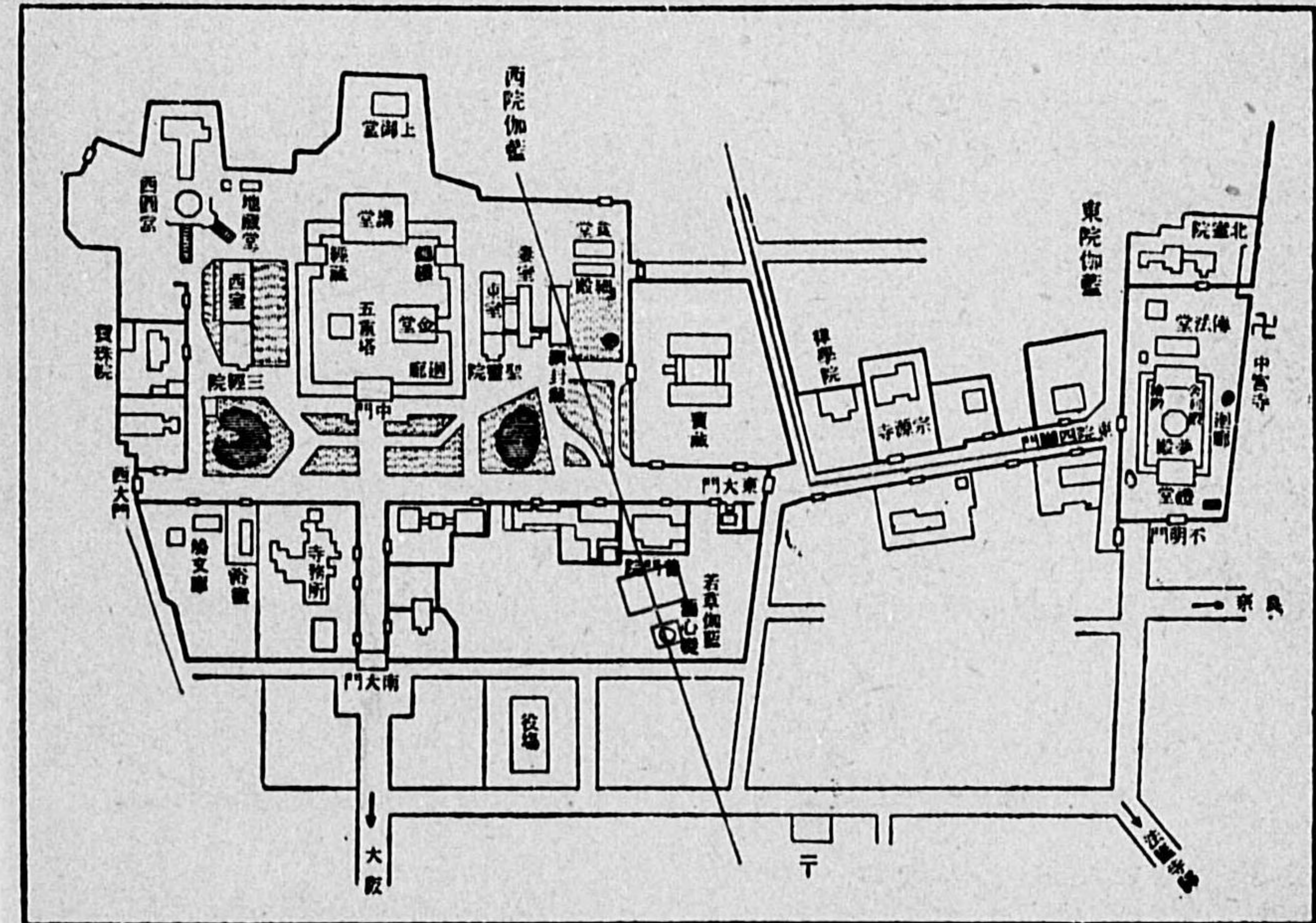


喜田貞吉博士



關野貞博士

法隆寺論争に躍る四ツ顔



現今法隆寺伽藍實測圖と若草伽藍の方位を示す

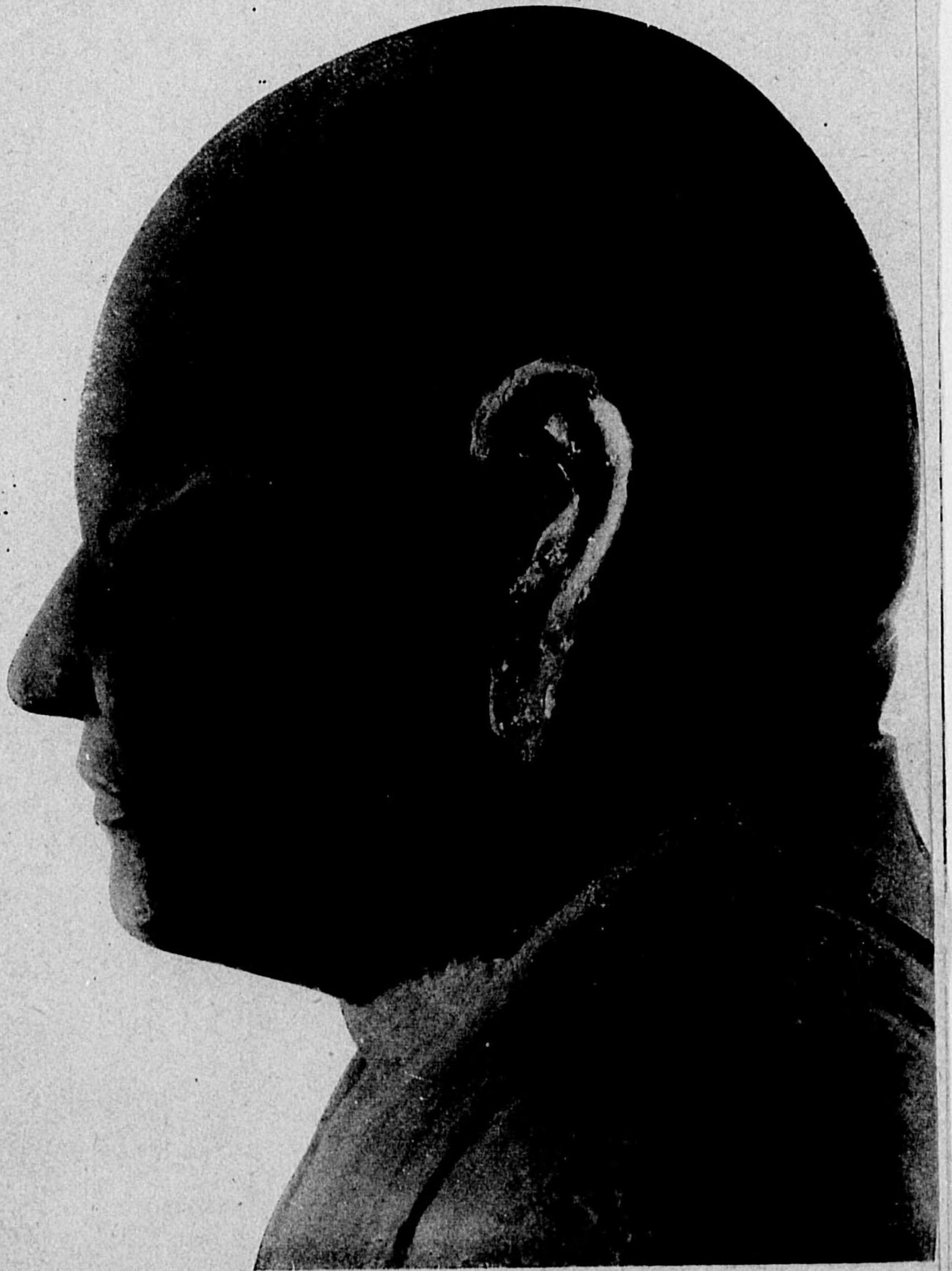
920
226

法隆寺の横顔

釋 弘 齋 著

目次

- 第一編 法隆寺の横顔……………1
- 第二編 法隆寺参拜……………15
- 第三編 改訂法隆寺俗談……………25
- 第四編 法隆寺随想……………105
- 第五編 法隆寺論争文献……………135



法隆寺夢殿再興の恩行人大僧都横顔

法隆寺の横顔

BSB
333

目次

第一章 法隆寺の概観……………1

第二章 法隆寺の歴史……………15

第三章 法隆寺の建築……………35

第四章 法隆寺の彫刻……………55

第五章 法隆寺の絵画……………75

(一)

大毎紙上の足立康氏の談として「再建論に止めをさす」とあつた一文を、讀まうと思ひながらいツイ讀み損ねた。その後、その新聞をよみかへさうと思ひ、いくら探しても自宅にはなし、やむなく村役場へいつて綴込みをさがすが行方不明た。さらに第一第二國民學校の職員室を訊ねたけれども、茲でも日々の新聞紙は包紙にすましく、狙ふところの新聞紙がなく、そこで意を決して大阪府立図書館の綴込みを借覽したが、遂に足立博士の止めをさされた。女がみあたらないつた。かくなる上は是非に及ばず、大毎本社をたづね、調査部の方にお願ひして、ヤットその貼込み帳を借覽して、漸くのことに溜飲をさげさせてもらつた。

それほごまでに苦勞をして、足立博士の一論が拜見したかつたのは、標題におかれた「止めをさす」なる語がいかにも豪壯で、少くとも三十六年にわたる

論争が鼻になつたのかと思はせられたからだ。而もその一文を讀むにいたつて明らかに失望したのは、止めがいつかうに刺されてゐないことであつた。むろんさうした發音は、足立氏がやつたのでなからう。往訪の記者氏が威勢よく、さうした表現手段をとつたのであらうとして、それにしても、その暗示をあたへたのが足立氏であつたとすると、少し大膽な斷案と思はれぬでなかつた。

そんな關心を繋ぐのは當方が別に法隆寺について濃密な知識を所有してゐるからといふのではない。幸ひと還曆をしたおかげに、再建非再建に關する論争と同時に人生を生活したので、この問題に對して格別の興味を繋いでゐるといふに止まる。扱、足立氏の談話を取次いだ記事を讀むに及んで明らかに失望したのは何等、論争に止めをさしたものでなく、その論斷の要旨といへば、ただ昭和十四年十二月から着手した若草塔址の發掘によつて塔婆や金堂基壇を發見した上からは、若草伽藍と現法隆寺の前身たる釋迦堂とが併存してゐたことは明

らかであるといふに止まるものであつた。ただソレだけの説明で、再建論の止めをさしたとは、チト大仰な物のいひ方であると、ツクツクと洪笑せしめられたものである。

(一)

此の頃、法隆寺の新非再建論といへば工博足立康氏の新發見として、その名譽と責任とを一身に負擔してゐらるるやうであるが、事實は斷じて然らず、その源泉は恩師、關野博士が晩年の告白に根據してゐる。まづそのことから語らねばならない。

關野博士がその尺度論を基礎として「法隆寺金堂、塔婆及び中門非再建論」を發表されたのは、明治三十八年二月の建築雜誌三八號を最初とせねばならぬ。これが當面の論敵として現はれたのが喜田貞吉氏、最初は恩師小杉溫邨氏のためを思ふ敵本主義の反對であつたが、遂には徹底的な再建論者になり、再建

論を信仰にまで昂揚したのはあつばれ、見上げた態度ではあつた。かくて兩雄は鎬を削つて論議したこと、私がここに紹介するまでもないこと。遂に問題は問題を産んで論争はいよいよ多岐になり、複雑怪奇の形態にまですすんだ。さうした論争が重ねられる間に兩者の主張に少しづつ動搖を生じたこと、たとへば喜田博士が現法隆寺は前の法隆寺の焼跡に再建されたと説いたことから、やがて再建法隆寺は必ずしも前の遺址にあらずといふに到つたのは、その改論の尤なるもので、研究過程に現はれた一進歩といへよう。同様に關野博士が最初はただ尺度論を固守する結果、文献上の記載のごとき一瞥もあたへず、臥榻の傍いづくんぞ陀人の鼾睡をいれんやといつた態度から、次第に文献に顧眄をあたへ、遂には昭和二年に及んで二寺併存論を発表して學界を驚倒せしめたのは非再建論者にとつては晴天に霹靂的な變節改論であつたといはねばなるまい。何となれば關野博士は、法隆寺火難の事など、非再建論に際しては毛頭も容

るる處でなかつたからだ。その干支一運の計算違ひなると、はたまた錯簡であるかを問はず、非再建論の前面には、苟しくも火難なんてことは、その存在を許さなかつたからだ。それほど堅固な片法華が、忽ち二寺併存説をたてて火難を是認したのは、明らかに改論であり、再建論に對する部分的な屈服であるを疑はない。幸ひ二寺併存説によつて現法隆寺が火難をさけ得たにせよ、若草寺の焼けたことを承認する以上、前の徹底的な火難否認の態度に比べると、あくまで變節に違ひはないのだ。

(三)

火難の徹底的否認から容認へ、何故に關野氏が飛躍されたかは、關野氏が書き残されぬ以上、推定の外はなくなるが、それは若草塔址の發見、または若草塔址考の進化のためと推定してよからうと思ふ。

因みにいふ「日本上代文化の研究」にある石田茂作氏の「若草伽藍址の發掘

について」を讀むと、關野博士は早く礎石の珍らしさについて語られたとあるから、余程前から若草塔址について考慮を拂はれたであらう。さてその塔の礎石は心礎の外に五七箇の礎石がころがつてゐたらしいが、北畠男爵によつて、練堀を崩して残礎が外部へ搬出されたのは、むろん賣却されたのであらう。さらに北畠男が何故に、そんな貴重な塔礎を處分されたか、それは佐伯管長にでも聞かなけりや明瞭でないが、その頃の法隆寺といへば貧乏底抜けであつたし後年にいたり、例の百萬塔一箇を三十圓ばかりで頒布したことさへあるのだから、ソレより以前の財政窮乏が、礎石を賣らせたのだと、考へておくことにしたい。

北畠男爵といへば、世間人の多くは新田、名和といつた名族保存の思召による授爵とこころへてゐるらしいが、事實は然らず、もと此の人は煙草屋鳩平といふ法隆寺門前町の素民であつたが、法隆寺の寺侍である北畠家の養嗣子とな

り、天誅組の旗擧げで一黨に加はり、途中からハミ出たことについては、伴林光平がその遺著において散々苦言をならべてゐるけれども、まんざら變節改論者とは認むべきであるまい。何となればその後、明治維新になつてから司法官として、彼の兒島維謙氏とともに硬骨漢で鳴らしたものだ。法隆寺に閑居してから寺の大番頭をもつて任じ、寺僧でさへ眼中におかなかつたのだから傲岸不屈の親爺ぶりであつたらしい。

男は早く現法隆寺の火難を否認し、焼けたのは聖德太子等身の釋迦像を祀る處の鴈寺で、その鴈寺の塔礎が所謂、若草塔礎であると斷じてゐるから、此の人は現法隆寺の非再建論者としては原始的な存在であるのみならず、二寺併存論の先驅者と認むべきである。近時、家永三郎氏の搜索によつて法隆寺の雷親爺、北畠男の自筆書入れが発見され、男の二寺併存説は文献的な確證として殘されたこと、論争史上の大收穫であつた。

(四)

二寺併存説、現法隆寺非再建説を固執する北島男が、何故にその確認に唯一の證據物件たる若草塔礎を賣却したか。その賣拂沙汰を今日から考へると、遺憾といふよりは亂暴にちかい。これ然しながら當時、男は再建論など眼中におかず、たとへば水木要太郎氏に誘引された喜田博士が、北島男を訪問してまるで小僧のやうに叱られたとあるから、男の眼中再建非再建の論争價值なんか零にちかく、それよりは目前の法隆寺の窮乏が大問題であつたから、扱こそ無用の巨石である塔礎をば、二束三文？の値で賣つたのであらうと筆者は推定してゐる。その若草塔礎は筆者の居村本山村の舊久原邸にあり、その柱坐を削り落して、その上に鐵製の五重塔が置いてあつた。

それが、若草塔礎の研究が喧ましくなるとともに世の中へ出て、今では野村氏の所有地になつてゐる邸園から、經費一萬圓で法隆寺の舊位置へ復舊したのは

昭和十四年十月の頃と思ふ。恐らく法隆寺の窮乏を救ふために身賣りしたのであらう塔礎が、やがて奉賛會へ迷惑をかけて買戻されるなんか、皮肉にできた業運と申すべし。夫のために身を賣つた女房が、やがてその夫のために身請される、そんな譯で一生、女房に頭の上らなかつた某成金氏の話もあり。また敵討の歌舞伎には、そんな一齣がザラにあることなどを思ふ。

それほど若草塔礎に執着がもたれたのは何のためかといへば、これひとへに論争史の副産物とみる外はない。而して恐らく關野博士が二寺併存説を發唱されたのは、心密かに此の塔礎を研究された結果であらう。足立康氏の「論争史」には、關野博士が右塔礎の特異のものであることを示唆されたと書いてあるから、何かの機縁で若草塔礎の等閑に附しがたいことに着想され、その賣却先を訪ねてその特異さを發見し、かつ花崗岩の火難によつたとみるべき龜裂を實見して、その鋭敏なる學的良心から在來のごとく、ただ火難否認の一點張

りで追ひつかぬ。現法隆寺の遺構については飛鳥式そのままの確信を捨てないが一方、これほど巨大なる塔礎が火難に遭うたとしてみれば、若草伽藍の存在を假想し、それが焼けたことにせぬと辻褃があはぬ處から、二寺併存説の發表になつたのだと思ふ。

而も蝦はをどれども柵をいせず、關野博士の二寺併存説は畢竟、北島男の發唱から一步もふみ出たものでなかつた。

(五)

大阪府史蹟調査員の池田谷久吉氏は、法隆寺五重塔下の心礎研究論文中「今日、再建論なんか考へてゐる人は無からう云々」と思ひきつた確信を披瀝してゐらる。これは工學關係の方々の一致した意見とみてよく、實證的知識の集積が、さうした態度になるのは自然であらう。

かくの如く工學關係の方が、さうした態度を採るのには現法隆寺の遺構に根據すればよい、史上の明記については責任がない、とてしまへばそれではいやなもの、均しく日本國民として官撰の歴史の明文を否認しただけでは鹿を逐ふ獵夫、山を見なさすぎる嫌ひあり。てうど關野博士の最初のほどがソレであつた。而も文献派から責められると二寺併存説によつて火難承認の程度におちつく。それは喜田博士が文献一點張りの再建論から唐尺、高麗尺の完數計算にまで發展せぬと納まらなかつたのに同じい。喜田博士においては、その自序傳にいふが如く、數學が得意であつたからソコまでいへるが、普通の國史家ではどうかと思ふことなど、事の序にかいておく。

そこで今日、再建論などを考へてゐるものはなからうとまで極言する實物派の各位は、せめて喜田博士の文献的攻撃に双向ふほど、腕に覺えのあるのが何人ゐらる。ただ關野氏その他の發唱に従ひ、あくまで非再建でブツ通すのは勝手として、その他は一切、知らぬ存せぬでは料簡がせまい。今やかんじんの

御大が二寺併存、火難承認とまで脱殻せられてみると、恢々者流はすべてその方になびき、金挺頭、鱈頭、兜盃頭を若草塔礎につきつけて、詳しくは考へてみるより外ないことになる。あはれいひ甲斐もなき非再建論の方々よな。明治三十三年、早くも北畠男爵が發唱してゐる處の若草塔礎について、せめて一步の研究をすすめてゐたなら、はやく二寺併存を提唱して、いよいよ現法隆寺遺構の火難否認が主張されたものを。關野博士の提唱により俄かに方向を變轉し鬼の首をとつたやうにたち騒がること、下司の智慧の譏りを免がれまい。あへて何人の責任とはいはぬが、非再建論の一群にとつては、斷じて褒められた沙汰ではない。

これをたとへば、平子鐸嶺氏の干支一運異算説のごとき、全く誤算といひきる着想が警拔なんだ。非再建そのことが警拔であることに満足して、百尺竿頭に一步をすすめなかつたのが、非再建論者のために惜しまれてならぬ。

(六)

さしも双方の勁敵が、一步を譲らじと論争した法隆寺問題も、時の力には又向ひがゆるされず、人間の一期、ゆめまぼろしとすぎて關野氏がなくなられ、喜田氏が後を逐はれ、うたた無常が啣たれるをりから、少壯の新人として登壇したのが足立康氏、頭腦明敏、學識深奥、工文學士をかねて、改めて工博たり、殊に學者の貧棒と金持のケチン棒と、社會的な二大痛棒を調和して私費による古文化研究所を設け、曩には藤原宮址の研究發掘を行ひ、さらに關野氏の衣鉢をついで所謂「法隆寺新非再建論」を提唱して大衆の人氣を蒐めつつあり。願はくは工博の上にさらに文博をかさね、學界睥睨の素志を果される日の到來を疑はぬが、満は損をまねくことあり、榮耀に餅の皮をはぐこと、俗諺の戒しめあり。名は必ずしも實の實たり難いこともある世だから、内々の研鑽によつてひたすら聖胎長養の擧にいでられんことを望む。

話頭を轉じて、その新非再建論であるが、今や足立氏は此の新説の唯一の支持者として、時代の脚光を浴びてゐらる。その人の非再建論が何故に、新と銘をうつて俗衆の視聽を蒐めるかといふと、

- 一、現法隆寺は聖德太子等身像を祀る釋迦堂の後身。
- 二、天智朝九年の罹災は用明天皇祈願の若草伽藍であつた。
- 三、だから現法隆寺は非再建である。

といふ三段疊みの卓見ではあるが、その輪廓からいへば二寺併存説の一種で先師關野博士の學統を立證し、さらに北畠男の提唱する處と合致してゐる。ただ小異を求めると

- イ、北畠、關野兩氏が二寺併存といふに對して、足立氏は現法隆寺を釋迦堂の後身、寺といへない廟のやうなものであつたとする點。
- ロ、從つて北畠、關野兩氏が現法隆寺を用明天皇勅願寺、若草伽藍を聖德太

子等身像を祀る鴈寺といふに反し、足立説ではその本尊が入れ代り、若草

伽藍が用明天皇勅願寺で、現法隆寺が聖德太子廟であるといふ。

伽藍と廟の差、本尊が入れ代つたといふ點、ただソレだけが新非再建論の焦點であるのみ。

のみといふのは失禮知らぬが、大たいの輪廓が先人未到のものでない、かへつて先人の説を踏襲したものである以上、のみというたとして腹は立てられない方がお上品にみえる。

さらに昭和二年に奈良の田村吉永氏の發表した「法隆寺移建論」では、本尊の問題と太子のために一字がなければならぬといふ點、さらに若草伽藍を用明勅願寺とし、今の法隆寺を太子寺とする點まで、足立説と一致するから、足立説の新味は、いよいよ縮少すべきものと考へる。

(七)

足立氏は、自著の論争史において、此の新説は現法隆寺を飛鳥時代のものであるとの先入感に囚はれて立論したのではない。從來非再建論者が否認しつづけた火難を認め、一方、文献と實物との再検討を行ひ、それらの資料の指示に従つて新解釋を下したといはれる。火難からいかにして飛鳥式現法隆寺を避難せしめるかが目的でなくて、新解釋が先きになつて、然る後に現法隆寺が避難したのだと説く。學者の良心からはさうあるべきが當然であり、またさうあつての新説であると思ふ。

が足立氏が關野博士の長逝に際して追悼された一文を読むと、同博士が昭和二年、史學會において新説を発表された講演中、特筆すべきは二寺併存説であるとし、これが完成をまたずして長逝されたことを憾みとされてゐる。だから足立氏はソレ以前、二寺にせよ、一寺一廟にせよ、思ひつかれてゐなかつたと考へねばなるまい。さうなると、大體において關野説を踏襲して今日の新非

再建論を提唱したといふてよく、或は關野説は足立説によつて完成したといふてもよからう。ただ關野説が北畠説に、あまり敬意を表せざるが如く、足立説が關野説を踏襲したといはぬ點に、先人尊敬の不足があるやうに思ふ。但、これは私の邪推であるかも知れない。

話は余談ながら京都の畫家に故溪仙畫伯ソツクリの繪を描くのがある。誰がみてもそれが溪仙畫伯の獨創味を學んで、殆んど遺憾なきを思はせる。處で繪の注文者が、その畫伯をたづねて

「溪仙さんソツクリだんな」

とでもいはうものなら、その畫伯はキット客を改め

「ア、さよか、そんなら繪の御注文はお斷り申しますッ」

といふさうだ。その畫伯、かつては廣重擬ひの繪をさかんに描いてゐたから相當の才人なのであらう。私もその溪仙張りには感心してゐる一人ではあるが

此の話をきいてから嫌になつた。酒井抱一が隔世の師として光琳を學んだのと比べて、あまり人格的な差がありすぎるからだ。
 あへて此のことをかかげるのは他意あるにあらず、たとへ北畠説、關野説を踏襲したからとて、足立氏の貫録に關係がないといふことを、いはせてもらへば足りるのだ。

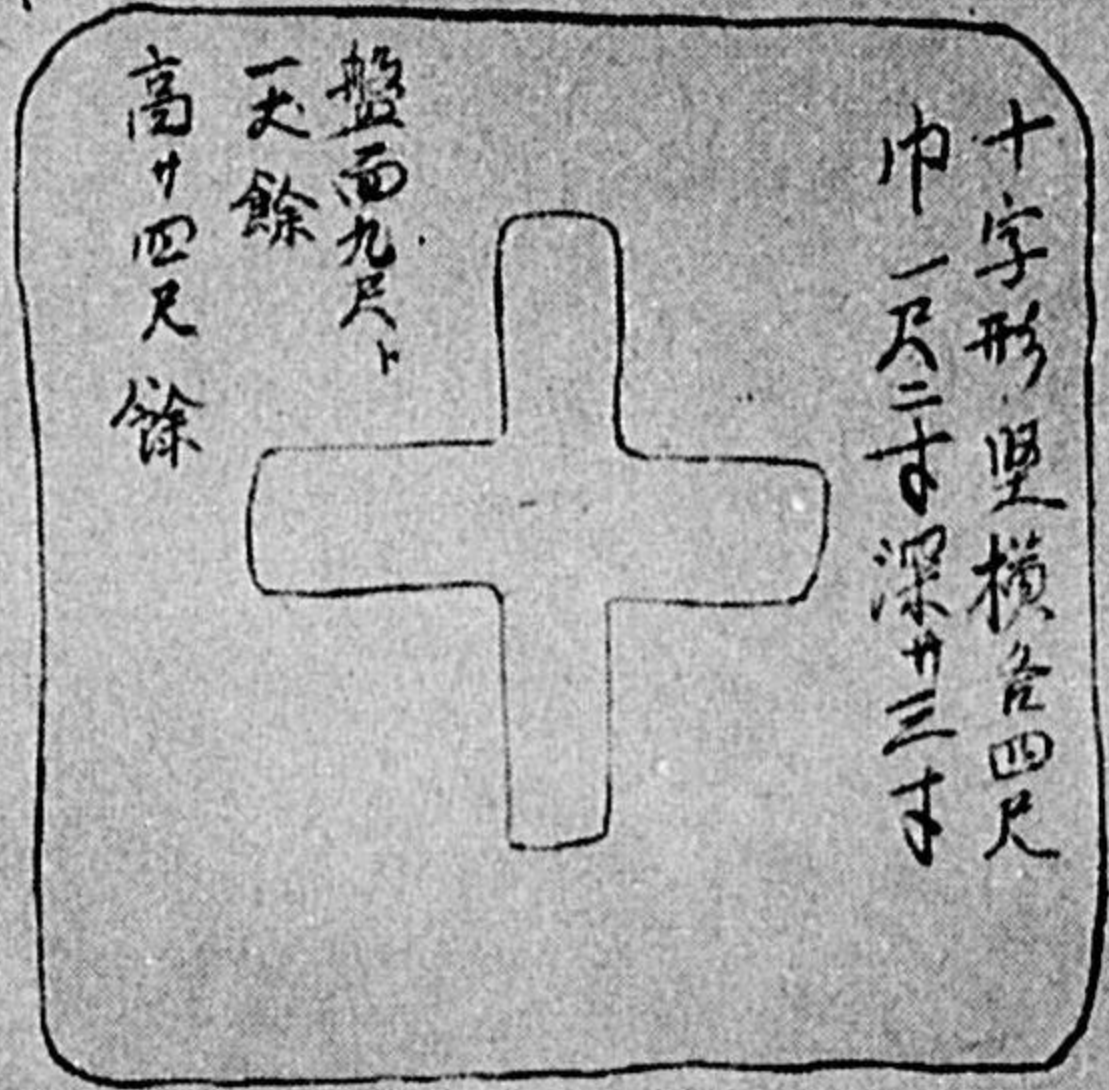
(八)

かくの如く足立氏の新非再建論なるものは、二寺併存から一寺一廟と變化しただけのもので、その巧妙なる立論には素人の筆者ですら感心する。
 善草塔礎の歸還とともに、その附近を發掘して塔婆や金堂基壇が發見されたのは、昭和十四年十二月であつた。何といつても學界の慶事この上もなし。此の調査はいまだ完璧とまでいへないであらうが、發掘瓦には飛鳥時代のものがあるのみならず、さらに百濟のものに近似してゐるとあるから、その點は現法

明治三十九年春 山村良月

法隆寺

反鼻塚礎石取圖

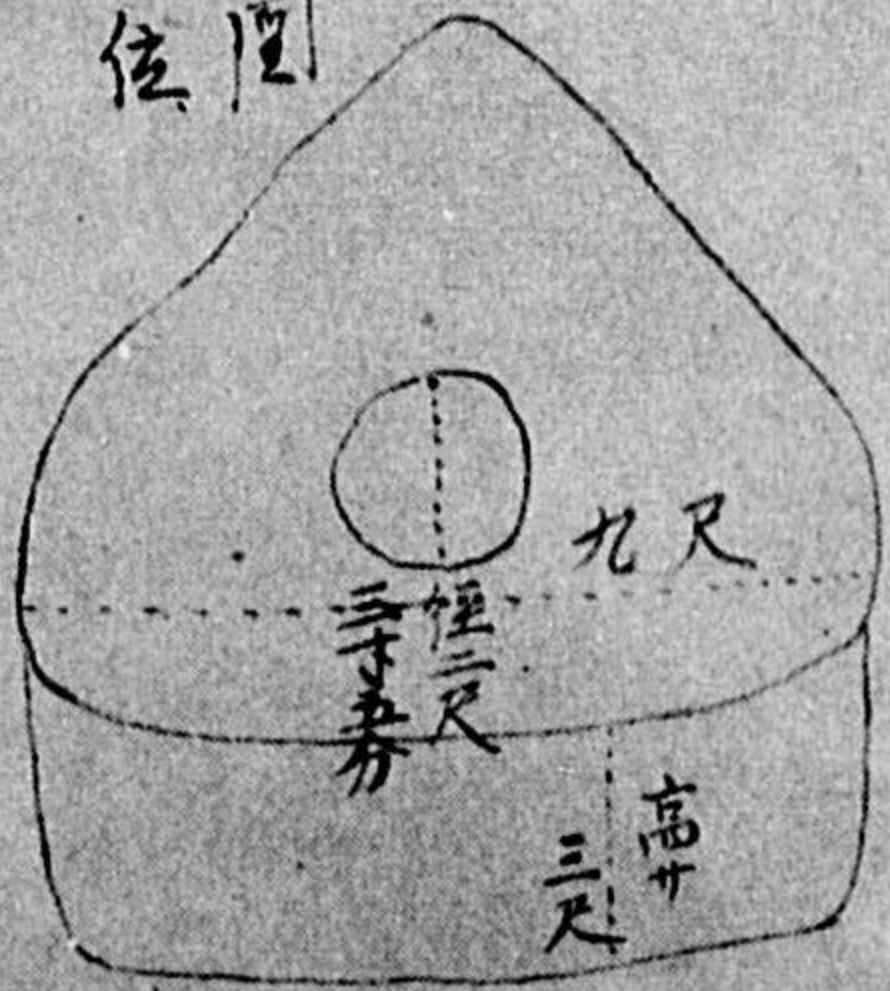


い圖

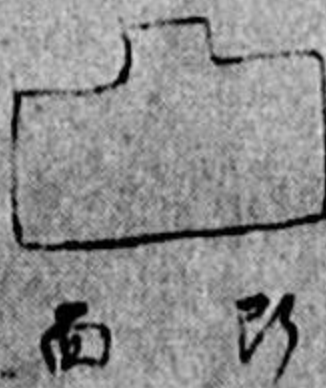
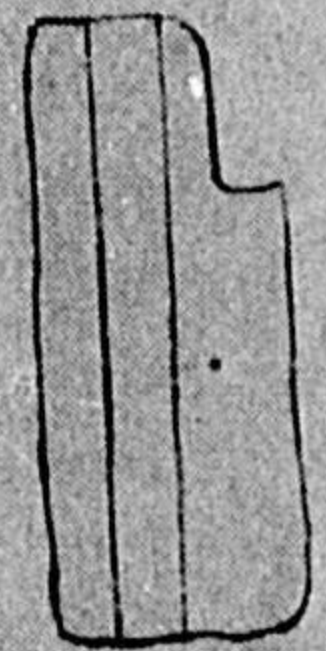
法隆寺西院塔中心より異位百計
 十三回半。所在。

ろ圖

比石の位置



い圖と石之下四隅より出ツル石



面

法隆寺若草塔礎(反鼻塚)石取見圖
 (明三十九年十月) 山村良月實測

たり下性と違ひ、當り二寺の別異、
 之を驗するに、之を遺跡と徹す、現法隆寺
 法隆寺の塔の中の中に入り、左側、善門院
 あり、右は、法隆寺、法隆寺と稱す、又、此處
 の法隆寺一帯の地を、伊賀山、法隆寺の地、
 又、若草、法隆寺とも言ひ、傳ふ、此の土、
 隆寺、支、或、尺、は、降、つ、方、支、下、高、四、尺、
 有、能、の、大、盤、石、あり、石、の、面、長、四、尺、中、二、尺、寸、
 深、三、寸、の、十、字、形、凹、鑿、の、痕、あり、是、れ、物、も
 多く、大、塔、の、中、心、柱、の、礎、石、也、又、し、り、西、北、の
 方、二、丈、と、降、つ、湯、柱、礎、石、と、も、や、三、角、
 形、の、礎、石、あり、伊、賀、山、下、小、堂、大、塔、傷、の、跡、
 あり、是、れ、法、隆、寺、十、年、時、の、懸、官、の、中、心、礎、石、
 の、下、小、埋、れ、の、物、や、り、ん、と、是、れ、法、隆、寺、の、中、心、
 礎、石、也、
 時、は、伊、賀、山、と、傳、し、る、を、以、て、新、法、隆、寺、
 あり、と、し、持、つ、伊、賀、山、と、し、り、る、と、傳、ふ、
 年、小、堂、と、し、り、る、と、し、り、る、と、し、り、る、と、し、り、る、

北畠男稿本(班鳩法隆二寺の辯)中に見え若草塔礎の條

隆寺よりは古いといふのに都合がよく。

さらに従つて、これを用明天皇勅願寺にしておいた方が、現法隆寺へ本尊を
 移轉し、釋迦像の脇立のやうに藥師像をおいたことと辻褄があふ。これによつ
 て觀念的な整理ができて、さらに遺構の説明、すなはち非再建論と歩調があふ。
 なほ足立氏の新非再建論では現法隆寺は、太子廟のやうな一堂であつたが、
 おひおひ附加されて今日の輪奐ができたと言ふ。實はさういうた方が工學的に
 都合がよいのか知らぬが、そこに素人の疑問がある。

若草伽藍が、現法隆寺よりはさらに巨大な伽藍であつたらしいことは、塔礎
 にのこる柱坐と、金堂址の發掘によつて明白であるとする、それはご大きな
 伽藍内に、釋迦像は祀つておけなかつたものか、現法隆寺が二佛を並存してゐ
 るが如くに、舊若草伽藍に二佛が祀られて、いつかうに差支へはあるまいでな
 いか。關野氏は一寺を、足立氏は一廟を、何故に若草伽藍以外にたてなければ

ならなかつたか。すでにあるものに根據して、さういう方が便宜であるといふのと、何故にさやうな具合になつてゐたかといふことは、全く別種の問題として考へられたい。盲人の塙視きといふことがあるが、私はせひとも、足立氏から、その一廟存在の理由が承はりたと思ふ。

私が尋ねまはつた大毎紙には若草伽藍址の發掘があつたから、それで再建論に止メをさしたとのみあつた。それだけでは止メどころか、せつかくの短刀は空をきつとる。土を突いとる。かへつて名刀の刃こぼれが氣になる。

(九)

何故に聖徳太子廟なるものが若草伽藍以外に存在したか。

關野氏のやうに、それが一寺といひ、殊に金堂塔婆、中門まで加へたほどの大規模な伽藍があつたとすると、せひとも文献的な論據がほしくなる。處がそれを小やかな廟、ただ一堂としておけば、文献はなくともゆるされうるといふ

便宜がある。足立氏がその便宜によつて立論されたとはいはぬが、何故に聖徳太子廟があつたかは、是非とも承はりたことに思ふ。

坐右に書物のない素人の書齋では、足立説に關する文献をもたぬが、何かの機會に、

「あれだけの聖徳太子の等身像なら、一堂一廟はなかるべからず」

といはれたやうに思ふ。當時の支配階級が、さうした意味から佛堂を作ることが慣習であつたにせよ、それらは外に佛寺をもたなかつたためだ。さばかりの若草伽藍があるのに、それへ釋迦像を納めないで、他に一堂を作らざるべからずといふのは、論據が薄弱である。

もし是非とも、一堂があつたとして、それへ後から後から附加物があつて現法隆寺ができたといふならば、足立氏の容認せらるる天智九年の火災以來、藥師佛は何故に一堂中の假住居のままで本日に及んでゐるか。此の點の説明が承

はりたい。あれだけの聖徳太子のための等身の釋迦像だからといふならば、若草伽藍の發祥であるあれだけの藥師佛が、宿かりのまままで久しい間、放任されてゐることの説明に行詰るぢやないか。あれだけの釋迦像のために一堂を作つた以上、あれだけの藥師佛のために、また一堂くらゐは作らねば義理がすむまい時の事情でさうなつたのだといはれるなら、時の事情で釋迦堂はできたともいはれ、出來てゐなかつたともいはれる。

あれだけの釋迦像だから、一堂があつても當然といはれるのは、話がまことにスルスルと進んでゐるやうで、實は全くの想像論なんだ。その想像論に立脚した新非再建論なるもの、いかに辻褄を合はせてみたとして、砂上の樓閣をセメントで堅めたやうなもので、やがて激しい傾斜をみせるのは必定であらう。

(十)

「貴國軍は何時、○本國へ上陸するか」

といふ疑問を、來日した△△要人に提供した日本人があるといふ。冗談ならどにかく、そんな最高國策、殊に國防上のことが豫言できる性質のものでなく、たとへ國策が決定してゐたにせよ、そんなことがベラベラ喋られる道理でない同盟國人である以上、いかなる秘密も洩らしてくれと思ふから、そんな出鱈目な質問ができる。そんな心得の日本人は、相手が同盟國人とみれば、いかなる自國の秘密でも洩らす奴だ。その出鱈目な質問提出が、却つて日本人の馬鹿正直を現はしてゐるのは情ないが、その要人は何と答へたか。

「○本國上陸なんか、いつでもやれるんだ。ただ他給目足の○國だから△△軍上陸で○軍艦が本國を見捨てる、××船舶が近よらぬとなると、四千萬の○國人に與へる食糧がなくなる。それで△軍はまだ上陸せぬのだ」

といふたさうだ。さすがは△△人だけに辻褄の合うた辨明と感心はするが、仔細に點檢すると、此の答へには少からずトリックがあるといふより、論理の大

飛躍があるんだ。

「○本國上陸は何でもない」

といふ、最も問題になる點を、何でもないことにして片付け、それから先きの論理を着々とはこんでゆく。後の方の論理に間然する處がないので、最初にある論理の大飛躍をウカウカと見逃すんだ。そこに一大危機がひそむ。ウツカリ感心をする、とんでもない陥穽に陥るんだ。

「あれだけ聖徳太子等身の釋迦像だから、一堂なるべからず」

と前提して、然る後に文献實物の論證をはこぶ足立氏の新非再建論には、△△要人の語るが如く、最初に一大論理の飛躍があるので、ウツカリ前方へ進むと途方もないことになるんだ。

大たい一の假説を設けて、それが合理的に説明されたら眞理ぢやといはれるのは、論證法上の一手ではあらう。私をして云はしむるなら、足立氏の假説は最初から存在せぬのだ。だからいくら力づくよく論證して下さつても、それは氷の天麩羅みたいなものにしかならないのだ。

(十一)

まづ足立氏が假設において

「あれだけの太子等身の釋迦像だから、一廟はなかるべからず」

と獨斷し、然る後に火難を認めて、従つて若草伽藍から用明天皇勅願の薬師佛を、その一廟へ安置し奉つたことにすると、現法隆寺に二佛が併存し、しかも釋迦像を正面に、薬師佛を東の間におくことの説明に役立つ。殊に薬師佛の背光にいささかの曲りがあることさへ、運搬途中でとり落したと解せられるに都合はよからう。さういふ具合に何から何まで都合よく運べるやうであるが、二佛併存や本尊位置問題などはしばらく云はない。私は足立氏の獨斷に加擔しながら、ここに新らしき獨斷論を提出する。二ツの獨斷論は大略、全等の假説

的價值ありと認めるから、その兩説を全時に承認せられるか、然らざれば兩假説は全時に解消せしめらるべきであると思ふ。
その私の獨斷論といふのは、

「あれだけの薬師佛のために、少くとも一堂はなかるべからず」

といふのである。薬師佛が實に用明天皇の勅願にかかり、推古天皇十五年に出來上つた。これが法隆寺の根本本尊であることは茲に説明を要せざることである。それほど本尊、實に法隆寺發祥の佛像のために、天智九年の罹災後、何故に一廟がなかつたのであらう。正になかるべからずの眞ン中であるといへやう。すなはち足立氏が釋迦像のために、一廟なかるべからずといはると全量全價值において、私の獨斷的假説は成立せざるべからざるものと心得る。

にも拘はらず、その一堂、一廟や一寺がなくて今日に及んでゐるのをどうするか、私は足立氏のやうに本尊位置問題を考へぬ一人であるが、かりに足立氏

に従へば現に薬師佛は太子のための一廟に宿借りのままで放任されること、實に千二百六十八年の永きにわたつてゐる。それをどう説明されるか。元より時代によつて追慕の情に厚薄があり、天智九年の罹災後は、太子御他界の折とは全一に考へられぬといへば云はれやう。然しながら一千二百余年を系續して存在してゐる法隆寺伽藍であり、實に國史上の一大奇蹟とみてよいほどの法隆寺であればあるだけ、伽藍發祥の根本本尊のために、一廟はなかるべからずと主張して憚らない。足立氏が

「あれだけの太子のために」

と假説されるならば、私は全時に

「あれだけの薬師佛のために」

と假説して、毫も憚る處はないと思ふ。然るにその根本本尊のためには一廟なく一寺なし。これは事實だから致法あるまい。のみならず、過去にあつたと

いふ記録でさへないのだから古往今來、無かつたものはなかつたとみる外はない。そこで根本本尊のために一廟がなかつた位だから、太子のための一廟があつたとは思はれない。即ち全價値の假説は、兩ながら承認せられるか、然らざれば兩ながら抹殺せらるべきものと認めるが故に、私は根本本尊の一廟がない以上、太子のための一廟もなかつたと論斷するのだ。

(十二)

なほまた反對側からいへば、一千二百六十余年を二佛併存して、いつかうに差支へなかつた法隆寺なら、さらにより大きかつたと思はれる若草伽藍にもまた二佛併存して、いつかうに差支へはなかつたと考へられる。その二佛たる、たとへば藥師寺の三尊のごとき巨大な佛像ならば、並べ据えるのに困つたといへやうが、實はそれほどではなく、火難にあつてとりいだしうる佛像なんだから、大きな金堂に並存することは、昔も今も問題にならなかつた。だから、いよいよ

太子のための一廟はなかつたといへる。足立氏のためにはお氣の毒な推論になるけれども。

極言すれば、足立氏の釋迦堂は危き想像上の産物で、従つて新非再建論なるものは、最初に論理の大飛躍を冒した獨斷論であるとみるのである。

なほこの序に語れば、藥師像の背光に曲りがあり、火中から避難の際の損傷であらうといふのは、あくまで「あらう」といふ想像に止まり、損傷はすべて火難に因づくといへず、火難は必ず損傷を伴うといへない。損傷はいかなる場合に加はらぬといへない上に、また双方が全時に火中から避難されたとして一が傷き他が損はぬ場合あり、云はゞ、そんなことは有力な證據には取上げられない。

また釋迦像が本尊になつてゐるのは、信仰の對照變化に伴うものと解釋したい。欽明天皇十三年十月、百濟王が佛像經卷を献じたのが、何佛であり何經で

あつたかは臆断を許されぬことであるが、紛然、雜然として流入したであらう佛教信仰で、かつまた日本佛教史の原始時代へ遡ると、山岳佛教にかくれるので、遂に摸索に困難を來す。だから欽明朝十三年を佛教史の第一頁におくべきや否やは疑問であるが、然しその當初において、日本には固有神道があり、外來の蕃神としてその繩張りを犯すのには、どうしても現世利益の靈驗が必要であること、現に今眼前に簇生する雜多の宗教らしいものに實證されうる。かつ過去五十年間に、おごろくべく教線を擴大した神道宗教によつてみるも、その信者獲得が一も二もなく、療病にあつたことに着眼するがよい。だから佛教がまた全様、教線を張る上において、かつ現に張りをはつた今日から考へてみて、日本佛教史の最初に藥師佛が信仰對照におかれたことは、決して不思議ではないのである。現に法隆寺の發祥がそれであつた。

が、現世利益が祈られた時代をへて、その中から更に高次的な信仰が生まれ

る。文化向上の一線と、及びあくまで低平をはる一線とがあつて、文化向上線に添う信仰は一方に、現世利益をいの一線の存在と全時に、國民の精神生活の豊かさに比例しつつ、種々の變化を來した。かくて藥師佛の信仰から釋迦像への憧憬がうまれてきた。そこで、ひとしく法隆寺に併存した二佛の位置に動搖を來したとは考へられぬことであらうか。もとよりそれに関する記録なく傳説なく、學的論斷には著しく缺ける處はあるが、信仰の内容と客體とに變遷があつたことが事實だから、それに伴う本尊の動搖は考へうることだと思ふ。これについて「法隆寺美術讀本」が、

「現在、金違佛壇の東間に安置されてゐる金銅藥師如來像が、實は法隆寺の根本本尊であつたのである如く、後にいつの時代かよく判らぬが、釋迦三尊と藥師像が本尊の位置と交替し、現在のやうに釋迦三尊が佛壇中央に安置されることとなつたのである」

といふてゐるが、最も妥當な説明と思ふ。

(十三)

新非再建論は、すでに釋迦像あり、そこへ藥師像を選したと説くのに都合よく組み立てられてゐるが、本尊の位置は、さやうに不動なものとして立論せねばならぬものかどうか、それこそ却つて危険ではないかと思ふ。一千二百六十年余を通じて、いつも佐伯貫主のやうな學徳兼備の名僧ばかりが、法隆寺を護持したとは考へられない。またこうした守舊保安のみがブツ通せるなら、法隆寺にはモットたくさんの國寶が残つてよいのだ。現代のやうにチャホヤ云はれる法隆寺でありながら、なほかつ伽藍の保存でさへ、自家の力ではやれないでないか。それを想ひ、これを考へ、永い年代の間に、寺門經營のためなら本尊の置きかへくらはひは、なかつたとは考へられぬ。

釋迦像といへども、やはり現世利益、療病手段として禱られたことは、太子

の御爲めの釋迦像によつて明らかであるが、それが次第に大恩教主としての人格的崇拜に變化し、むしろ與へられた法悦に對して報恩謝徳のために祀られる釋迦になつたことは、現代佛教が結論してゐる。さうした釋迦の偉さが、三寶興隆の先覺者であらせられた聖徳太子に轉嫁されたことは、養老五年に献本された日本書紀において、太子傳はすでに釋迦傳にまで近づいてゐるので知られる。その後、鎌倉期までに發達した太子信仰の興隆については、説くことを省く。再建法隆寺は和銅頃に形態を整へたと考へられるから、すればその時すでに太子信仰は獨立して相當に發達し、當初の現世利益は減少し、太子に報恩謝徳することは全時に釋迦を崇拜すること、釋迦像を拜するのは太子に報恩謝徳することといった風になり、ひたすら和國の大恩教主を崇め奉る意味で本尊が置きかへられたと、想像を放逸ならしめることもできると思ふ。さらに時代を下つて度々の修理があつたのだから、その機會に置換へられたと考へてもよい

が、何しろ文献的證據がないのだから、その時代を明確にすることが困難である。

有體に告白すれば、論者が重大なことに取扱はれる本尊問題に對して、筆者は輕侮した態度でのぞみたいのだ。何となれば崇敬の中心である本尊が、時代によつて變換せしめられることは、寧ろ當然であるからなんだ。その一例として私は天ツ神と菅原天神との變換をのべたい。謠曲の橋辨慶に現はれる五條天神の祭神が何であるかは、謠曲の文句から搾取できないけれども、神社の古傳では醫藥の祖神、大己貴命、少彦名命を祀るとあり、かつ徳川期まで御神體が黄金の舟であつたといふ。此の社の發行する寶船はかなり古拙で、小舟に粟の穂をつんだ圖柄だから、それが粟島明神の因縁をあらはし、少彦名に關係がある点から、少彦名の主神の地位にあるべきが當然と推知せられる。しかもその社では後年、菅原天神を主神として本殿に遷し、少彦名命を攝社にうつしたこ

とがある。近頃、再び少彦名命を本殿へうつしたやうであるが、かやうに天ツ神と天滿大自在天神との交渉はひとり、五條天神の場合にかぎらぬ。殆んど全國いたる處の天神社に菅原道真公が祀られざるなき盛況は、そもそも何から來つたか。少彦名命の別名が手間の天神で、それが天滿の天神と邦音相通し、そこに混淆されやすい危険がある處へ、天滿天神が學問の祖神と崇められ、徳川時代の民間教育者であつた手習のお師匠たち、さかんにこれが崇敬を鼓吹し、天神講をあみだしたのは、偏へに自家の職業の擁護、収入増加の方便であつた。神社もまた、さうした世間の風潮に乗じた方が、社入金増加をはかるに都合がよかつたから、手間の天神と天滿天神とが混合したり、入れ換つたり、全然、天滿天神の獨占をゆるしたのさへある。大阪天滿天神のごときも、淀川のデルタに祀られた農耕神としての少彦名命であつたのが、いつしか天滿大自在威徳天神となり、そのため今日の發達を見たやうである。京都から筑紫へ、菅公流竄コ

ースにある多くの天神社が、何れも管公との因縁を俗傳的にデッチあげるのには、デッチあげるのに都合のよい地理的關係によるもので、その本質的な祭神は、多く天ツ神であつたことを推定したい。古くは天ツ神を「テンシン」とよび、菅原天神を「テンジン」と區別して呼んだらしいが、今では両者が混和してよばれるから、いよいよ區別ができぬことになつた。

さてかやうに天神問題を喋々したのは、社寺ともに祭神本尊がつねに不變でないといふことの、一例として語つたのにすぎない。況んや法隆寺の場合では二佛が併存して今日にいたり、何れも一樣に祀られ玉ふ。ただ問題になるのは焦点になる位置だけなから、本尊の變化といふほどの問題でなく、ただ移動といふ程度の輕微なことにすぎないのだ。その輕微なことを、あまり大きく論じなくともよいと思ふ。

(十四)

この本尊問題は、かなり學者によつて細論され、喜田博士のごとき、善光寺の建築様式まで、もちだして説明にこれ努められたが、苟しくもあれだけの法隆寺の本尊であるからといふので、慎重に考へられすぎた嫌ひはないかと思ふ。かつては北畠男によつて、若草塔礎を構外へ運ばれて文句に及ばぬ法隆寺であつたことを思へば、一千二百六十年の間、本尊の位置が絶対不變のものと思ひ被る必要はないと思ふ。それにつけて想ひだす笑話がある。

食卓をかこんだ三五の理學者があつた。食卓の上、窓際の處に瑠璃球が飾つてあつた。たまたまその瑠璃球にふれた一理學者が驚ろいたのは、窓からの光線の直射する部分が冷たくて、反対側の蔭になる方が温いことであつた。そこで此の奇現象は忽ち理學者間の話題に上り、何れもその蘊蓄をかたむけて、これが解説にあつた。而して何等、満足な解決をみるこゝろができなかつた。

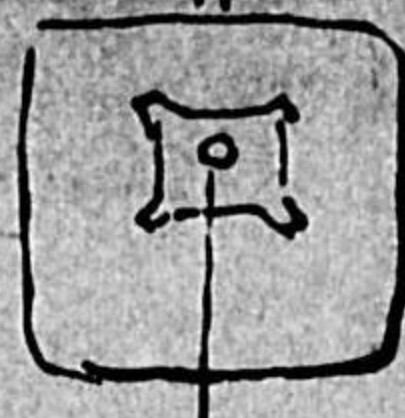
そこへ來たボーイが、激しい學者の論争をきいて一笑に附したのは、客來に

先だつて食卓を整へる際、あまり久しく瑠璃球の一面を光線に晒すことは危険を伴ひやすいと思つて、その球の向きをクルリとかへておいたといふのであつた。つまり理學者が光線の屈折や、熱の傳導について激論を闘はせたのは、ひつきやう無駄骨であつた。ボーイの機轉が奇現象の發因であつたといふことになつたんだ。法隆寺に關する論争にもまた、こんな笑話になりさうな部分が大いになからうかと思ふ。現に火難の有無に解決をあたへたのは、觀念の排列を嚴密にした學者の論争でなくて、全く若草塔礎の發見であつたことを思ふと、學者がならず、物ごと識らずの俗諺におもひあたる。

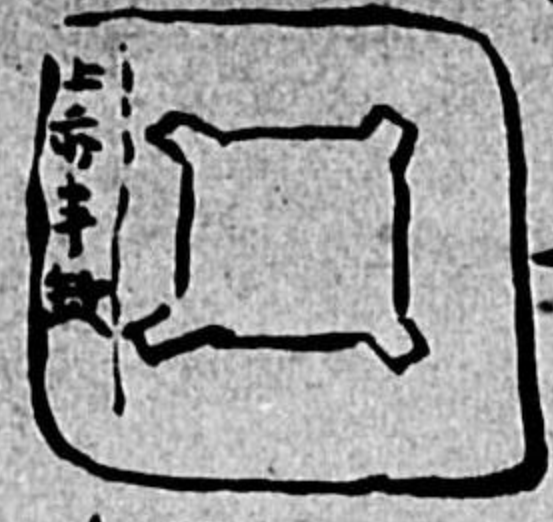
ここまで書いてから、某先覺に對して私は若草塔礎に關する質疑をささげ、いささか得る点があつたから重ねてかいておく。

北畠男が法隆寺の財政窮亡に際して、救濟の意味で塔礎を賣つたと書いたのは、いささか事實に遠いやうだ。右の塔礎は、男の居室の近くにあつた處から、い

法隆寺に班鳩寺の金石を借る魯魯の遺免をケキ大籍に依る千石の寺跡を考定せしむに抑浪多蓋しナシ止命濟幸之有り諸者先ツ之リ九塔シテ忘れ勿し古今一陽集疑著云一礎石觀音院表地之内當坤南有一盤石高三尺餘廣一丈餘石之面如盤又如圓形中畧具石之形如塔之心在礎石之傳記無傳也魯土俗傳云昔日有若竹之仙盤其若竹之盤(注)隔隔壁也是亦有寺跡乎



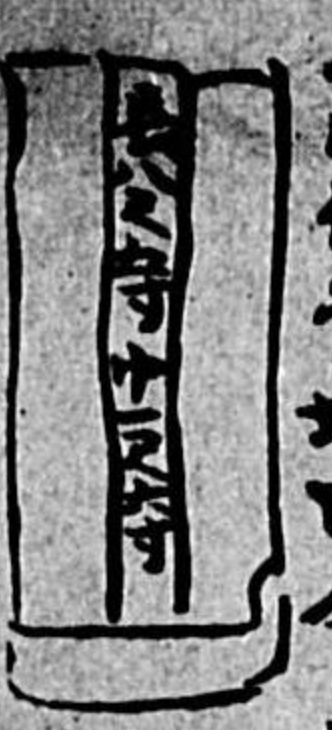
レ廣二尺 余此石ノ實測スルニ石高四尺巾南
深一尺五寸 九尺五寸但東ニ所一尺五寸也ノ北一尺五寸
ト注セリ 東西五尺五寸又柱ノ數ハ四尺深ニ寸



又此 他ニ 下圖

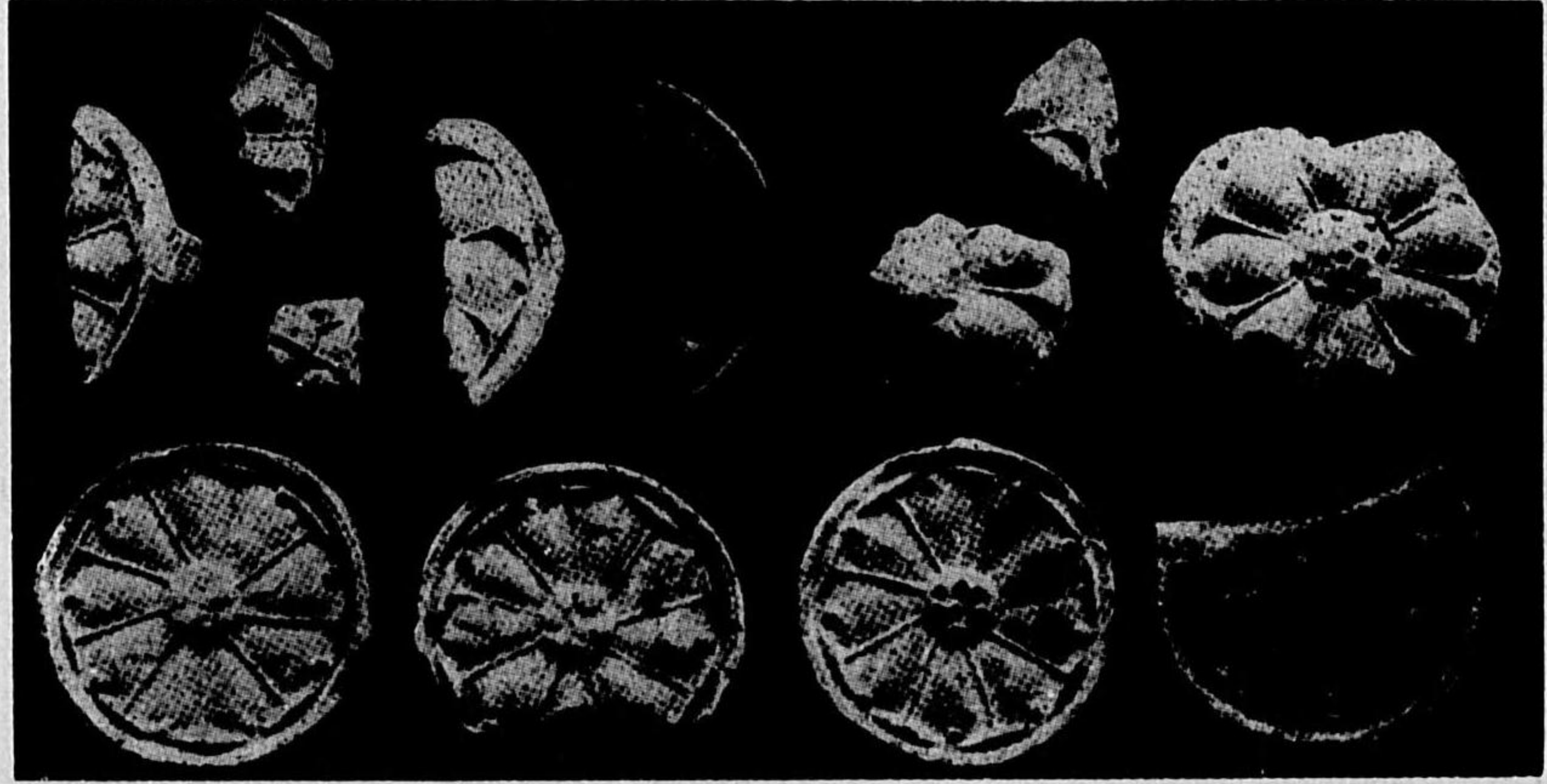


此石ハ礎石ノ乾ニ在リ重ノ中心ヲ距ルニ丈五尺二寸サリキ
柱高ニ寸五寸 柱高ニ寸五寸
惣高ニ尺九寸 惣高ニ尺九寸
見付左ニ尺四寸 見付左ニ尺四寸
セシ林藪ニ一者ノ 口語ニ由リ注セシラハ



他中九二尺五寸至二尺八寸也

北畠男稿本(法隆寺考證)原稿中の若草塔心礎見取圖三説



若草伽藍址發掘瓦鐙



同出土宇瓦の一部

つの間にか男爵邸内へはこびこまれ、男はその上に鐵製の五重塔を安置してゐた。後これを一括して久原氏に賣却した値が一萬五千圓とある。今日の貨幣價値なら十萬圓といふところだ。それが法隆寺の收入になつたか、どうかは問はぬことにして、北畠男の怪俄の功名であつたのは、その塔礎の上へ鐵製の塔をすえたいばかりに、一インチばかりの深さに塔坐を彫りさげ、そこへ塔の基壇をはめたことであつた。そのため若草塔礎にのこつてゐた本來の柱坐が、却つて保護されて残つたこと、これだけは後年の研究者に嬉しい資料を残してくれたことになつた。何となれば、此の礎石が、一塊の庭石として賣買されたこと、心なき人の手にかかつて、件の柱坐の處が深く抉られ、手洗鉢などになることは、極めて自然の成行であつたであらうからだ。

さてその若草塔礎が、今日まで所在不明のままに放任されてあつたのは何故であるか、さらに今更、この礎石が問題となつたのは何故か。此の点きりつめ

てくると、現佐伯貫主の記憶が問題になる。貫主の記憶によつて此の礎石は現代に甦へり、轉得者の野村銀行氏に無償返還の交渉にあつたのが佐伯貫主と奉賛會の江崎政忠氏とであつた。だから今まで問題にならなかつたのは、佐伯貫主の沈黙によると考へる外はないのだ。

然らば何故に佐伯貫主は、今日まで沈黙してゐたかといふと、此の人は再建非再建なぞの問題、つまり工藝美術について執着をもたぬ人であり、全く信仰一遍の人であるから、問題を問題としなかつたからといふ外はないのだ。だから恐らく寺傳によつて、寺は創建以來、火難のことなく今日に及んでゐると確信してゐる人なのであらう。

(十五)

その若草塔礎は、筆者の居村の舊久原邸内にあつたから、實物を拜見し、かつ撮影をしておいた。石は火にもろい花崗岩で、一大龜裂があり、部分的に剝落欠

損したものであつた。最も特異なのはその柱坐で、柱の基底には十字形の支へを作り、柱の基底面を力學的に擴げたものであつたが、ただ舍利孔と認めらるべきものがないことが、著しく論斷に躊躇せしめる。苟しくも塔婆として舍利を納めぬはずはないのだから、すれば若草塔の舍利はどこに納まつてゐたか。放漫にいへば此の礎石のさらにモ一ツ下の方に舍利孔のある礎石がおかれたか、想像は勝手ながら、あまりに放逸にすぎるやうだ。舒明天皇十三年に創建されたといふ淨土寺（山田寺）に關する古記録によれば、天武天皇二年十二月十六日に塔が建てられて、その柱坐に圓孔をうがち舍利八粒が安置されたとある。然しながら現在遺蹟に存する塔心礎には記されたやうな圓孔はない。そこで淨土寺と山田寺とは別寺であらうとする推定説さへ起つてゐる。然しさやうに古寺の塔心礎に舍利孔のないがあるとする、舍利をどこへ入れたかは一ツの疑問であつて、或は九輪の下の伏鉢へ入れたといふ想像説を容認する餘地があるやうに思へる

が建築上、そんなことがいへるか、どうかは素人の悲しさで断言をはばかる。

が一方には吾國最初の僧寺として有名な飛鳥寺、即ち法興寺にては佛舍利を礎石の中においたこと、正史に記載はあるが遺品がないから舍利孔の所在、形態はさぐれない。その他、まづ年代順にして四天王寺、高麗寺、法輪寺、法隆寺、三島廢寺、美濃山田寺、軍守里廢寺、傳崇福寺址を通じて舍利は心柱下にあつたり、抽出型にあつたり、全く所在が知れなかつたり、さまざまの様式がみだれ行はれたとみる外はない。なほ推定年度の比較的正確な塔礎がたくさん発見されるやうなことがあれば、その中に舍利孔のない礎石が數々あつて、それによつて一様式の系統的研究ができるか知らぬが、今日ではまづ覺束あるまい。ただ推古紀と認められる高麗寺の塔心礎に横穴の抽出形舍利孔あり、傳崇福寺の塔心礎にそれがあり、一方にはたとへいささかでも舍利孔のない塔心礎が発見されたとすると、抽象的な、あまりに放膽な論断ではあるけれども、塔

の原始形態としては、伏鉢内に舍利を納めた時代か、または一様式が日本國內にあつたのではないかと思ふ。

(十六)

放膽な論断を許されるなら、舍利は伏鉢から抽出形の舍利孔にうつり、それでは盗掘の惧れがあるので、遂に心柱下へ納まるやうになつたと申したいが、前述のごとくそれには時代の明確な廢寺の、多くの遺跡が発掘され、整然たる分類態系が整へられた曉でないこと、論断は不可能である。にも拘はらず、素人の放談を許されるなら、私は下の如く申したい。

そもそも塔婆の起源が佛骨奉祀にはじまり、それこそ伽藍發育の根源的なものとして、今日もなほ錫蘭島に塔の原始的な構築をみることが出来る。その伏鉢形の舍利奉安型の下に層ができて、三重五重塔婆になつたのだから、塔の伏鉢にこそ、舍利は安置せらるべきが約束といふてよい。それが全く正反對の柱

の下に安置せられるといふのは、それまでに時代の隔りと、舍利に對する崇敬度の弱化を考へなければならぬのだ。これを卑近にいへば、頭上にいただいてゐた帽子を足袋代りに履いたとして、物の取扱ひの重大な變化とみねばならず、またそれだけの變化が一朝一夕におこるものとは考へられない。だから疎漫に立論すれば、法輪寺や現法隆寺の塔婆は、その舍利孔を心柱下に所有する点から論じて、推古時代の建築にあらずといへる。どうしても天智九年以後のものであることを疑はない。さう考へることのために、なほ一ツの傍證がある。それは山城高麗寺の塔心礎に發見されたやうな、礎石の横に抽出形の舍利孔あり殊に傳崇福寺址からは甚だ貴重な舍利函が發見された。在來、發見された塔礎と舍利孔としては、全く劃期的な新形式で、私はこれを一ツの傍證として、舍利奉安様式の變化を考へてみたい。

まづ舍利が塔の天ツ違の伏鉢から心柱下の舍利孔へうつす大變化が、一朝一夕に起つたものでないとする、その中間に此の高麗寺の塔礎のやうに、抽出形に奉安された時代を挟みたい。やがてその抽出形の舍利孔では、外部から盜掘するなどの危険があるので、そこでやがて、より安全なる心柱下に納め、柱を動かさぬかきり、絶対に手の届かぬ安全地帯へ運ぶことになつたのではなからうか。つまり伏鉢から抽出孔へ、抽出孔から心柱下へ舍利が移動したと考へたいのである。だから、心柱下にある法隆寺様式はさらに新しいといへぬか。

まづ塔婆の最初は舍利奉安の構築で、それが崇敬の焦点であつたことはいふに及ばぬ。その塔婆を護持する、禮拜する、讀經する場所が金堂である。さらに講堂だ、大門だ、鐘樓だ、鼓樓だといふものが附加されて、いよいよ伽藍様式の發育があり、それとともに崇敬の焦点は移動をはじめ、合掌禮拜の對照は塔婆より舍利より、金堂安置の佛像といふことになつた。さうなると塔婆は金堂の附加物になり、寧ろ伽藍莊嚴にかくべからざる裝飾物といふにすぎなくなり

塔婆の位置さへ、最初の四天王寺式または若草伽藍式から、遂に法隆寺式になり、金堂と塔婆とは左右に並立し、中心点が分裂した。さらに下つて本薬師寺、薬師寺、當麻寺、百濟寺などの様式になると、塔婆は全く伽藍裝飾の附加物になり、金堂を主坐において左右に退坐することになった。塔婆が伽藍の主坐から裝飾物にまで成り下ると同時に、舍利よりは佛像の方が尊重されることになったのは申すに及ばぬ。その舍利に對する尊重度の下降に伴つて、舍利は伏鉢から塔礎に下り、遂には心柱下に伏藏せられることになった。仰ぎただかねばならぬ舍利が、遂に脚下に踏んで勿体なくないといふ程度に成り下つたことが舍利の所在を決定したと申したのである。だから法隆寺塔婆のやうに、心柱下に舍利孔のあるのは、舍利の成り下つた現状を現はすとみたい。そんな素人の放逸な獨斷論が、學界において物をいふとは考へてゐない、かへつて素人だけに勝手なことを云はせてもらへる仕合をおもふ。

要するに今日までの調査では、舍利奉安の心礎は、或は地上にあり、地下にあるあり、舍利孔は心礎の上面にあるあり、側面にあるあり、必ずしも一定せぬといふのが通説になつてはゐるが、若草塔礎が発見された今日では

「舍利孔が全然ないのがある」

一行を追加せねばならぬことになつた。従つて舍利は何處に奉安されたかの問題が將來、永き悩みをのこすのでないかと思ふ。

(十七)

なほまた恣にいへば、すでに若草塔礎から塔婆基壇と金堂基壇が発掘され、全體の伽藍様式が四天王寺式であることが明白となつたから、それだけを基点にして四天王寺の平面圖と對比し測量したら、若草伽藍の全貌が露出するのは將來にありうると思ふ。そこで伽藍配置からみた法隆寺は、金堂塔婆が並存してゐて、劃期的な變化をみせる。これについて古い書物には、それを太子の獨

創あそばされた様式と認め、太子様式などを勝手に命名してゐるのがある。御短い御一生の間に、四天王寺式から法隆寺式へ、そんな一大飛躍があるものか。私には不束ながら、あまり變化が大きすぎると思ふ。さう思ふことが、再建論に加擔したい素人の執着になるのであるが、此の伽藍配置様式は四天王寺式から薬師寺式になる過渡的様式として、それだけ飛鳥式との隔りを認めたい。だから足立氏は飛鳥式構築は太子のための一廟、現法隆寺の金堂にかぎり、塔婆その他は、後からポツポツ追加されたものと云はれる。がそれにしては、塔婆と金堂と中門とを、飛鳥式といはれる恩師關野博士の所説に對しては、弓をひくことになる。もとより恩師の所説に盲從せねばならぬといふのではない。ただそれまでにして金堂だけを飛鳥式といはねばならぬものか、さうか。さてさて學者の良心といふものは、執拗なものであると感心する外はないのだ。

さて建築様式となること、そこは工學者の繩張りになるので、精密なる數字的立論があるけれども、數字がいかに嚴密科學の表象であるにせよ、その數字を並べた立論なら、無條件で正確といふわけに參らぬ。名はしばらく預ることとして法隆寺建築について數度、有力なる論文を起草してゐらるる某工博は、最近奉贊會に委嘱して法隆寺塔婆の測定を試みんとした。そこで奉贊會では、すでに法隆寺建築に關する工學的權威たるその人が今更、實測でもあるまいでないかと一蹴したところ、その工博がいはいく。自分は塔婆の心柱が礎石の上に安定してゐるものご考へて調査研究を重ね、數度の論稿を發表した。豈計らんや、柱礎が土中に埋歿してゐたでは、これは根本的な大變化になるから、自分の研究は再出發の必要があり、扱こそ實測を委嘱したのだとあつたので、聞くもの、聞いた口がふさがらなかつたごある。嚴密科學によつて假裝された立論が、必ずしも正確といへぬ一例をあげておく。

さらに高麗尺、唐尺の問題であるが、關野博士の非再建論の骨子が、實にこの尺度問題であり、正史を無視した立論に對して、一世の耳目をひきつけたのは、全くその數學的な正確さにあつたといふてよい。史上の問題といへば、多く文献を資材として立論し、考察されるに對比して、あまりに科學的であることが、嶄新性を強化したのだ。處が今にしてこれを考へると、尺度が必ずしも時代性を現はさぬことは、四天王寺の調査によつて明白となつた。創建以來、枚舉に違ないほど改築された四天王寺を、奉賛會が某工學者によつて調査した結果によると、まことにピッタリと高麗尺に合致する。つまり地上物件の改築と關係なく、尺度だけは創建當時の高麗尺を使用したものであることが確實になつたのだ。何故に尺度だけが原状を維持して今日に到つたかは、棟染の金剛家の永續と併せ考へなければならぬ。傳へいふ、金剛家は太子御創建の當時から伽藍營造の任にあたり、脈々として今日につゞく名家だとのこと。そのこと

が舊尺度を嚴守して誤らざる重大原因とみて、たとへ營造は新しくとも、社寺において舊尺度を嚴守することは、斷じて珍らしいことでないこの一傍證に足ると思ふ。だから再建法隆寺が、たとへ高麗尺を使用してゐたからとて、その一点から金堂や中門や塔婆の非再建を論ずるはあまりに放膽にすぎた立論といへやう。然らばその法隆寺の金剛家にあたる名家は、何處にあるかときかれると、返答に困る。全く知らず存せざるものであるからだ。

(十八)

最後に私は、法隆寺に關する世間の注視が、今日ほど盛んになつたのば、ひとへに再建、非再建論争の結果であるといふ。その点、まことに有難いとは思ふが、三十有六年にわたつて論争すべき問題であるか、否かには疑惑をもつ。かつてそのことを發表すると、故人、喜田博士は大いに論駁して私の主張を素

人の一面観となし、此の論争によつて研究はいよいよ細緻になり、史學は著しく進歩した、といふやうに云はれた。元よりさうした副産物がなかつたとはいはぬが、ひつきやう兩者の論争が北畠男の若草塔礎で痛みわけになつたなどは、學者の名譽とは斷じていへまい。學者として觀念的な分析につとめらるるは勝手として、常識的に解決のつくことさへ、論争のため論争に終始すること、感心の罅をはみでる。

非再建として推古朝十五年から昭和十七年までが星霜一千三百三十五年、再建が和銅七年と假想して今日まで一千二百十八年、兩説の差を求めると百〇五年にしかならない。その百年たる、日本の文化向上線は急勾配の斜線を描いたとはいへ、現存法隆寺の壽命に比べると一割にあたらぬ短かさである。その一割にあたらぬ差のために、三十六年を論争せねばならぬものかだうか。而もすべての地上物件が當初の物と少しも變らぬといふならば兎に角、創建當時の木材

といへば、柱と扉くらいのもので、その他のすべてが、度々の改築で新しくなつてゐるから、現法隆寺の大部分は、再々の再々建といふを憚らない。それだけのものに對して、三十六年を論争すること、喧嘩すぎでの棒ちぎりといつたやうなことになるか。殊に國史尊重、舊物懷古が増長するにつれて、苟しくも法隆寺に關する知識といへば、再建非再建そのものであるが如き誤認をおこし、天下の恢々者流に間違つた法隆寺教育をしたこと、私だけは惜しむべしとする。最初から此の問題に一瞥をあたへぬ佐伯貫主の態度こそ、見上げたものと見上げる積りである。因みに若草塔礎の部分的發掘でさへ、實は大いに貢獻する處があつたのだから、あれを全掘したら、どんな發見があるかも知れない。文部省では、他日國家の力で發掘調査をするために、右の發掘に中止命令を下したのは妥當の處置と思ふ。いかに寺門の監視があるにしても、専門家が事にあたらるるにしても、恢々者派の取沙汰がうるさい。かくいふ筆者がま

た、その恢々者流の一人であるけれども。なほなほいふ、今日までの部分的發掘によつてさへ、若草伽藍と現法隆寺伽藍とは約三十度の開きがあるといふ。足立氏においては現法隆寺金堂は丘陵地に構築されたのだから、そんな開きはあつてよいやうにいはるる。然しながらそれが森林をへだてるか、或は懸崖絶壁の上に營造されるなら知らぬこと、殆んど若草伽藍の廻廊から手のごときさうな、單にあれだけの丘陵地へ、三十度の開きをもつて一廟が營造されるものかどうか。もし足立氏が設計主任者としてそのことをあへてせられるなら、私は足立氏が建築者としての藝術的良心に疑問をもつ。

このことを告白して、本稿をうちきることにした。い。（昭和拾六年極月末日）

本稿は主として足立博士の法隆寺新非再建論を批判した積りであるが、その足立博士が昭和十六年末日に逝去されたことを知つたのは脱稿後であつたから、文中、故の字を使用しなかつた。茲に改めて吊意を表す。

法隆寺参拜

法隆寺壁畫截取問題から、いよいよ模造の壁畫ができることまで、かつ折からの甲論乙駁を耳目にするので、久振りに法隆寺參拜を志さず。天王寺驛から行けばよいのに、わざわざ關急線の御厄介になつたおかげで、遠廻りの時間と手数を重ねて、法隆寺の門前へたどりついた。

私が最初に法隆寺へ參拜したのは、明治三十四年の春、汽車のない山陰道から草鞋ばきで陰陽山脈をこえ、中國鐵道で岡山へかけて、そこから文明開化に惠澤されて、日本歴史の精髓である處の奈良、京都の史蹟を訪れ、殊に奈良では猿澤池畔の、かぎやとかいふで一泊し、長くもない三條通の夜をさまよひあられ酒を呷つたのは、中學五年生にしては不良であつたと自認をする。猿澤池の采女柳は浅みごりの芽をふいて、花はさうたう咲いてゐた。人を怖れぬ鹿重なり合ふ池の鯉、すべてが畫圖であり、これを背景に生をうけた人々の仕合をおもつて、ウス暗い山陰の生活を咀つたものだ。

さうしたをりの法隆寺訪問で、引率者が前東京府立第一中学校長の西村房太郎氏であつた。柱のエンタシスが、ギリシヤ藝術に聯關することなどを教へられて、所有する日本歴史の範疇以外に、なほ大いなる研究の余地あるを知つた。その時、すでに再建、非再建の論争があつて、非再建論者では恐らく關野さんではなかつたかと思ふ。金堂地下の土を堀つて焦土なきことを立證したといふ話を、そのをり聞いた記憶がある。處で喜田博士の「六十年の回顧」を讀みその他「法隆寺の諸問題」などを閲讀して、問題の火の手が擧つたのは明治三十七八年頃とあるから、私の記憶とは步調があはない。私自身にとつては、それが不思議でかなはないのだ。それだけ深い印象をあたへられたをりの修學旅行中の記憶だから、私において間違ひないと思ふけれども、當の論傑がいはる處にまた時間の間違ひがある道理はない。結局は手前の毫碌として此の疑問、葬る外はあるまいと考へたが、私の記憶面には、この法隆寺内に校倉があつて

文化の遺品の恐ろしい數が並べてあつた。その校倉をかこむ練塀には丸瓦が塗りこめてあつたことが、歴歴、幻映として描きだされる。寺内の人にきくと、そんな校倉なんか昔からなかつたといはるので、扱はそのあまりに明白な幻映の存在が問題になる處から、そのさい正倉院を拜觀したのでなかつたかと思ふ。今でこそ吾等、平民においては拜觀を許されぬ正倉院ではあるが、明治三十四年頃には、願書さへ提出すれば比較的たやすく、中學生にすら拜觀を許されたのではなかつたか。これは西村氏にあうたをりに、聞いてみるより方法はない。

○
正しく三月十一日、法隆寺の門前にたつた。全く四十年ぶりの参拜である。寫真や記事で見倦き、讀みあきた法隆寺が必要以上に快感を興へるのは、さうした四十年前の私自身を回想せしめるからであらう。その時が私自身の生涯で一たう楽しい時代であつた。愛慾の廣海、名利の大山、迷執のかぎりを盡して

茲に一介の六十老を存する。面目なんかあつて耐らぬ今日あるのみ。

大勢の參拜客が、帽子に花簪をさして境内に溢れる。法隆寺から二十町の北にある松尾寺の國寶千手觀音立像の御開帳とかで、厄除祈願の御連中らしく、いつかうに法隆寺へ敬意を表する風情はなかつた。がそれらを心當に法隆寺境内に香具師が店をはるのだから、法隆寺にとつては迷惑な賽客といふ外はない。

まづ南大門から中門へたどり、阿吽の仁王像に敬意を表し、拜觀券をかつて境内へはいる。金堂も塔婆も風雨にたへぬ腐朽ではないが、修理期の迫つてゐることは一目に知れる。が古社寺拜觀の景觀本位にいへば、今がてうご見頃の古さといふてよい。これが修理を了へて、すべての線が硬直すると、そこには幾何學的な安心はあるが、想像の快感には割引がかかる。中をとつて頽廢味のこつた修理が、一たうよいといふことになるけれど、それでは罪なくして廢所の月を眺めたいほど吾儘な慾求におちる。處で私の狙ふ處は法隆寺金堂壁畫

である。肝腎のそれがスクリンで覆ひ、一面もみられぬのだから、殆んど何をしにきたのか判らぬことになつた。あのスクリンのおかげで、四十年ぶりに壁畫に當面すること叶はず、遙々ときぬる旅をしぞ思うて、わづかに模寫中の中年繪師の肩越しに、阿彌陀淨土の觀音菩薩を瞥見したのみ。まことに残り惜しいことであつた。

ただ案内者によつて、壁畫截取が修理不動の原則になつてゐるのではない。截るも、截らぬも佐伯貫主の方寸にあり、目下思案の最中ときいて安心をした。これが所謂、斯道の専門家に委ねられたら、とくの昔に破壊してゐたのであらうが、最後の鍵を佐伯貫主の信仰力にかけられてあるので、壁畫はなほ原狀を維持してゐることを知つたのは嬉しかつた。

問題は柱との接合點の腐朽で、放つておくと、極端にいへば、柱と壁畫とが分離することあるべき危険があるので、壁畫截取論はそこから起ることを知つ

た。何となれば壁畫截取が修理に必須のことであれば、それから以來、度々の修理に、必ず壁面は取外されてゐなければならぬ。そのことがなかつた以上、壁畫はそのまゝに修理可能といはねばなるまい。柱との接合點に腐れがいつたといふことが、問題を難透至極なものにし、修理と保存論が激突し、その間に種々な雜音を交流させることになつたのである。

壁は柱と柱との接合によつて外を仕切るものだから、ソレ自體に堅固なる獨立自存性はない。たとへば稼ぎ人に離れた未亡人みたいな、頗る覺束ない存在になるんだ。そう考へると截取論に論據がない譯でない。要はどの程度に腐朽してゐるか、もてる限りは持たせたいやうな希望が湧く。

截取不可避となつて、そこに保存手段が考へられ、原狀に回復論、別館保存論がおこる。

宗教的な敬虔性からは原狀回復論になるであらうし、技術万能論者からみれ

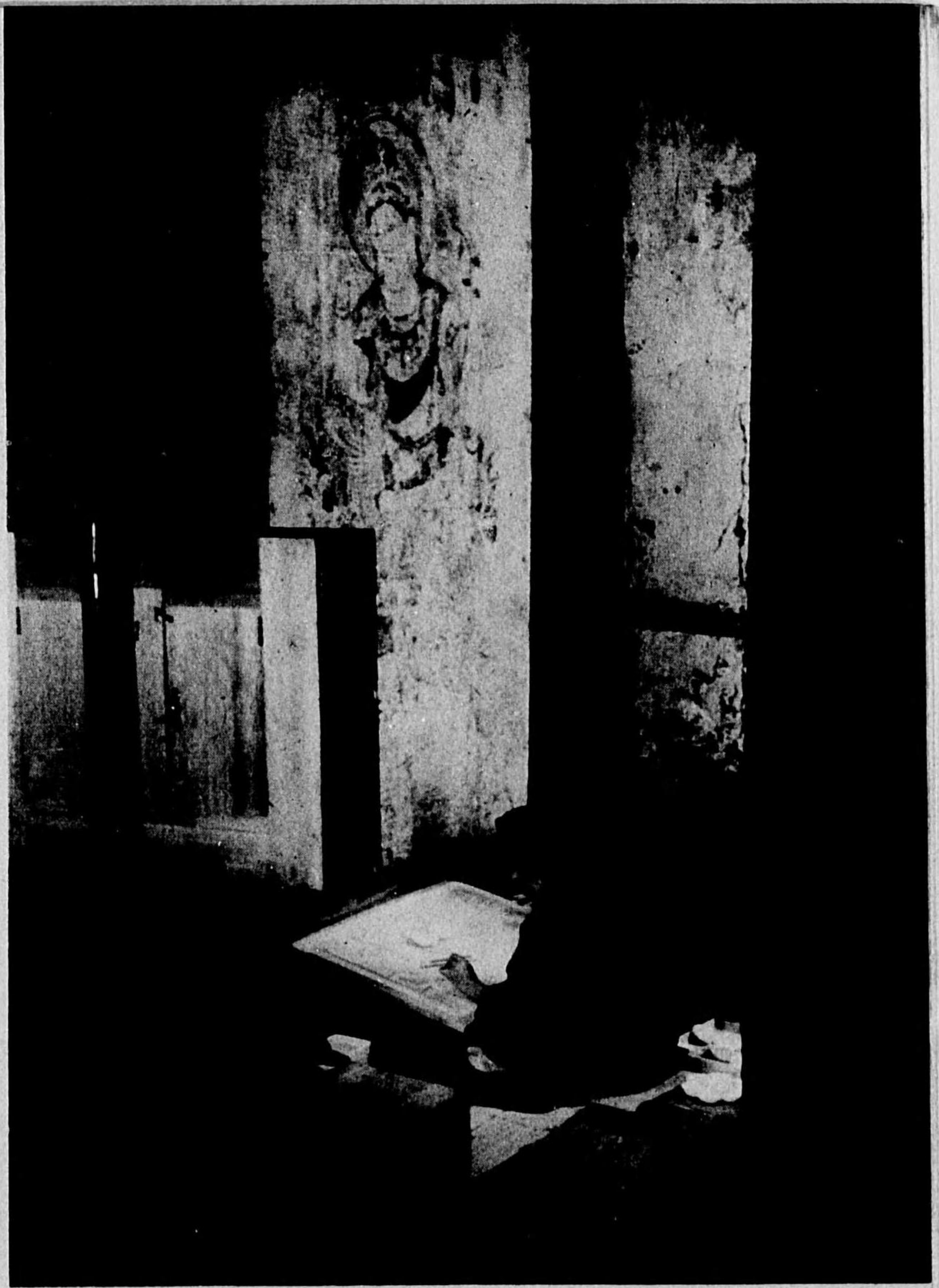


法隆寺壁畫藥師淨土變天人細部

ば保存目的と、宗教的慾求とは別箇のものとして、必ずしも原状回復を主張せぬものの如し。

○

截取より外ないのなら、蓋、截りとする外ないこと必然の論理になる。それを別箇に保存するのは日本美術界の至寶として當然のやうであるが、そもそも佛堂をはなれた壁畫ならば、その勿體なさに割引のかかることを、承知してゐなければならぬ。たとへば寶物館に納まつた推古佛のやうなもので、物としての保存では完璧であらうが、もはや信仰の對照としては受取れかねる。壁畫においてもまた同様といへやう。況んや現代畫家、荒井寛方畫伯麾下の腕達者が、いかに細緻に復寫したとて、原物の匂ひはとてもの沙汰、それはあくまでイミテーションの罅をいでない。だから最もよいのは原状のまま、それが徹底的に腐朽するまで放任しておく、この處、五年十年がもてないのだから、



法隆寺金堂壁畫摸寫始末

原状のまままで持てるまで持たせておく。甚だ不得要領の彌縫策のやうであるけれども、ひつきやう、その不得要領が最も要領をえたものと納得する。

かうした難問に當面すると、世人の多くは専門家の智慧をかりやうとする。元よりそれより外の思案はないけれども、ただ誤つて専門家を萬能とみてはならぬことだ。私は近頃になつて壁畫の缺損が甚しくなつたことをさき、それが専門家または専門的恢恢者流の増加した結果で、遂には堂内拜觀を許しがたい今日となつたのだと獨斷する。たとへば第十面の藥師淨土圖の黒ずんだのはクラドスポリウムといふ黒色黴菌の繁殖した結果であることは、専門學者によつて明白になつたことだ。これは學的研究の成果ではあるが、然らばその繁殖をだうして防ぐか、さらに壁面の黴菌をだうするかについては、解決策のあるを教へられない。少し極端な語ではあるが、その黴菌を研究するのには、壁面の何處かを掻き落さねばならなかつたと思ふ。斯の如く専門研究は少しづつ犠牲を要求する。

さらに今、眼前にみる壁面の復寫にせよ、いかに極度の注意を拂つたとて、畫家が壁面へ接觸せぬといふわけに參るまい。高いキャタツが壁面へあたらぬといへない。螢光電燈がいかなる作用をおこさぬとは誰がうけあう。それが如何に微弱な犠牲であるを問はず、人間の自稱保存行爲が、少しづつ破壊作用をはたらいてゐることは實正である。これをたとへば人間の老衰症を癒さうといふので、やたらに注射をするやうなもので、醫師としては正に當然の施術ではあらうけれども、結果において満全が望めないと同じくはなからうか。

五十ばかりの人躰で、羽織袴の金堂案内氏は、私がさまざまな質問を浴せるので「貴方は何といふ人か」と訊ねて下さつたが、元より御記憶を願うほどの代物にあらず、名乗らずに塔婆の基壇へのぼり、四面の塑像をのぞきみるに、これは昔の記憶そのものであつた。さらに歩廊をつたつて大講堂の基壇にたち、ふりかへつて金堂から塔婆へかけての展望を恣にする。そのをり糸をやうな春

雨がふつてくれる。境内に二三株の榮養不給な松があつて、それを点景にした伽藍の均整が實に、何ともいへぬ絶妙さを發揮してゐる。しばらく私は恍惚の境にいつた。その均整美といふやつ、數字であらはず、米突で語れず、云はば冷暖自知の埒内にあり、枯華微笑の諒得にまつ外はないのだ。かつて田村吉永氏が法隆寺移建論を提唱されたをり、その反對論の一ツに、箇々のものを他から移建したでは、凡そこれだけの均整はとれまいといふのがあつた。そのをりには、それは感じだけの立論で、學的な論據がないとばかり聞き流した。尤も田村氏の移建論そのものもまた、單なる想像論に止まるのだから、何れにしたつて正確な史料のカケラもない獨斷であるのに間違ひはない。然し今、かうして比類なき均整美に當面してみると、やはり移建論に反對したい心地になる。やはり箇々のものをもつてきたでは、これだけの均整美は保てまいと思ふ外はなかつた。停立ひさしくして私は動かたくなくなつた。中門からは距離が近すぎて展望に便ならず、願は

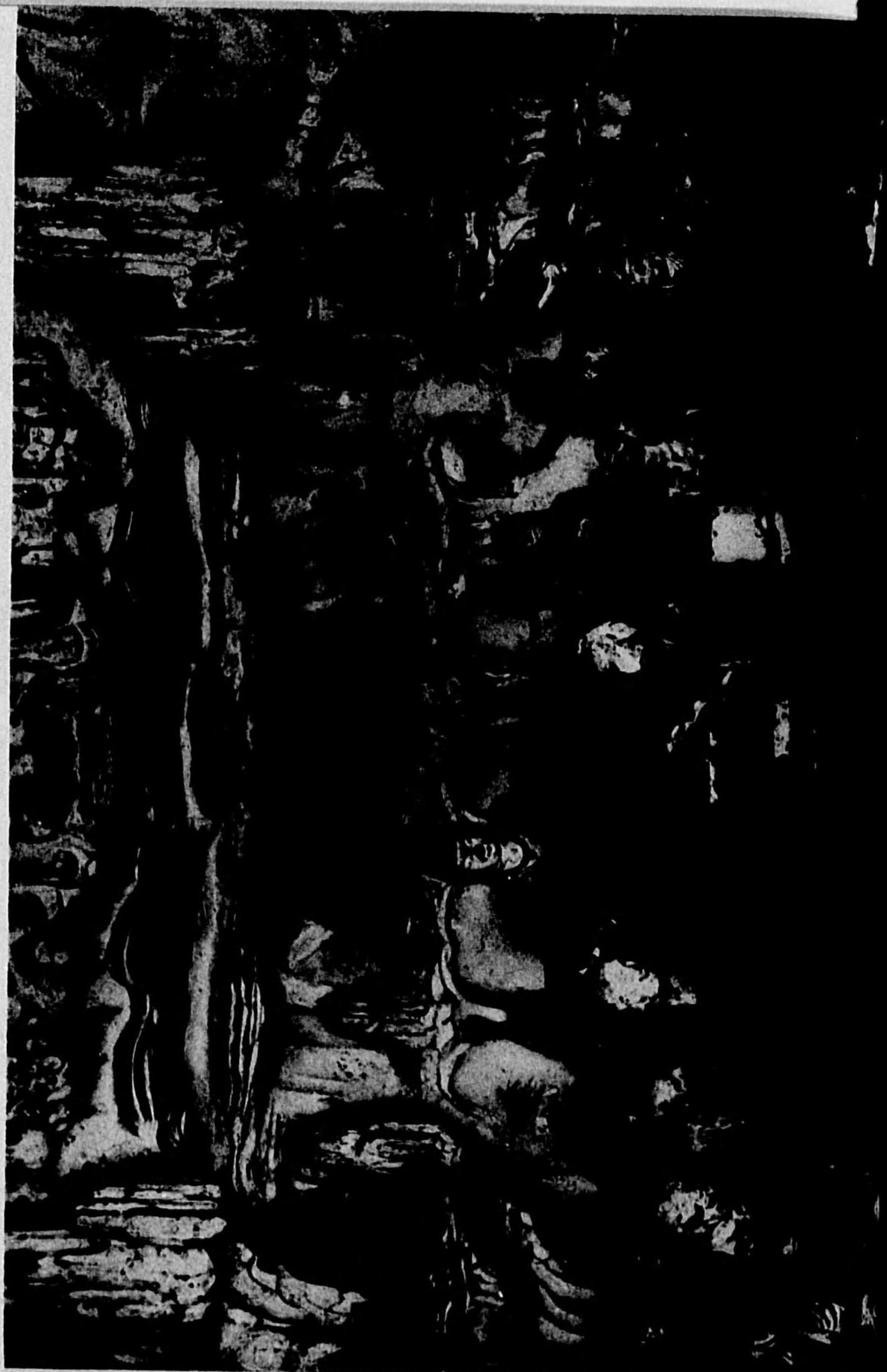
くはすべての參觀者が大講堂の基壇にたつて回頭し、この均整美に當面せられんことを切望する。

一條天皇、正暦年間、山城普明寺の建物を移して講堂としたこと、及びその際、少しく元の講堂址から後退させたことは明白であるが、多くはその理由を火難に求める。醍醐天皇延長三年、火難に罹つたので後年、普明寺から移建したほごだから、災害を再びせぬやう、かつは金堂塔婆に累を及ぼさぬ用心のためといはれるが、ただソレだけが理由の全部ではあるまい。そこで或は全伽藍との均整といふことを考へたのではなからうか。俗諺でいへば、つりあはぬのは不縁の因といつたわけで、移建した大講堂にはそれ自體にやや獨立性をもたせるため、後退せしめたのでなからうかと、金堂と塔婆との均整美を考へたついでに臆斷した。扱その大講堂は修理すでになり、輪奐は面目を新たにす。然るに此の日堂内の拜觀が許されず堂内安置の藥師三尊、四天王像に拜跪の違なく、ただ滿面を歴

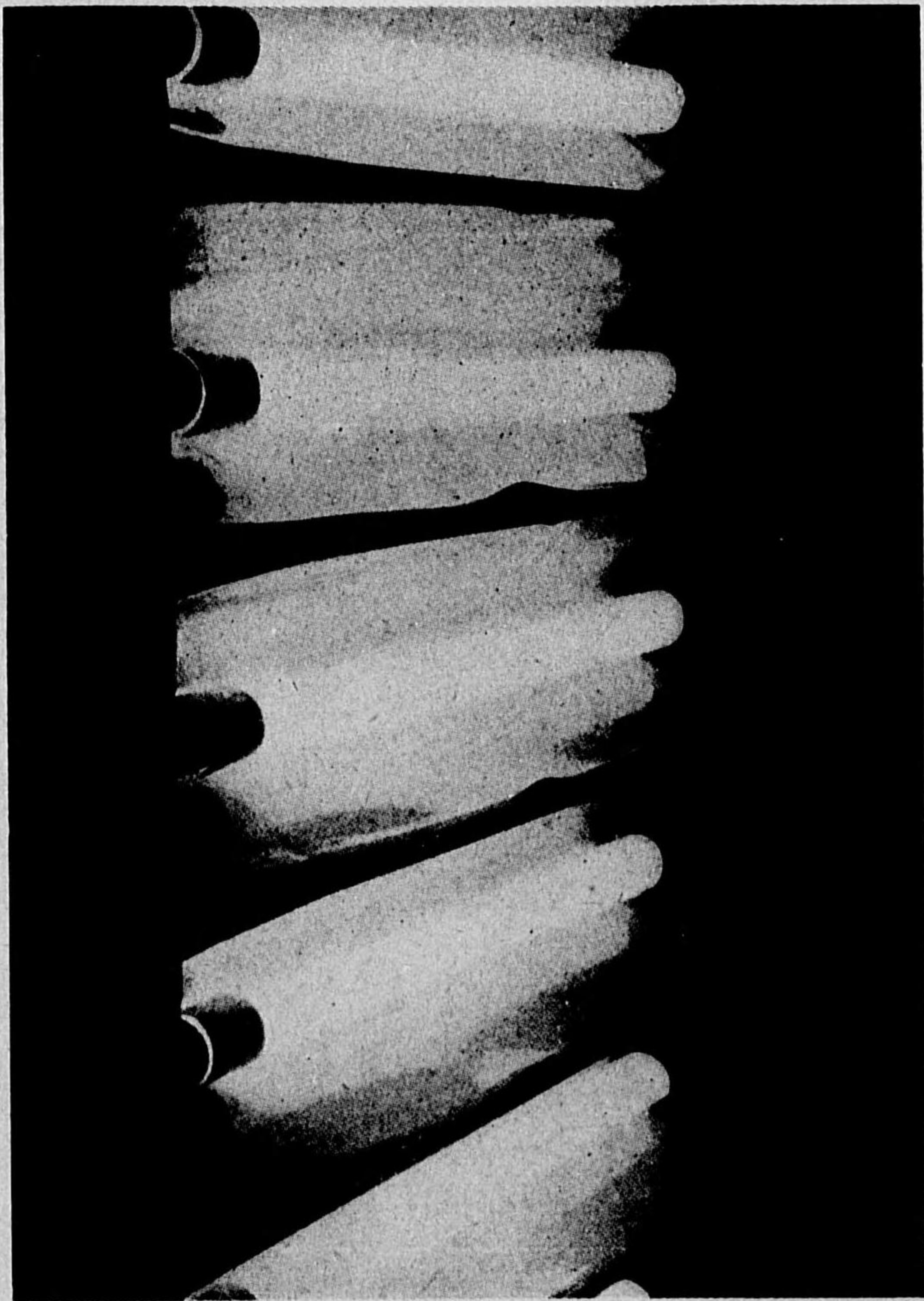
せられる涅槃圖に敬意を表するのみであつた堂守は半俗半僧の老躰であつたが「此の涅槃像の現はす意味は、すべて人間、死んだら鳥獸までがこれを悲しむといふ程度に、生前に慈悲善根をつまねばならぬことを教へた繪である」と説明して下さる。いささかピントは外れてゐるが、まんざら間違つてばかりはゐないのだから、學校の答案なら六十點といふ處であらう。

○

綱藏をのぞいて一たん門外へ脱出し、西圓堂へのぼる。この御堂も修理が成り、頽廢味は全くないが保存の目的は完全に達せられてゐる。本尊は脱活乾漆の丈六薬師如来、奈良朝の優作ではあるが、此の堂の堂守ときたら泥付の俗人としてゐる。まづ賽客が近づくと矢鱈に鉦をたたく。それから、その説明が揮つたもので、本尊は日本三薬師の一ツとあり、他の二ツは九州と下野の方にあるやうなことをいふのは、まだ許せるとして



法隆寺塔婆の泣か佛
(釋迦涅槃像)



法隆寺金堂壁畫摸寫陣に置設の畫光色瑩光板

「日本で一番古い薬師如来」

といふに到つては、法隆寺のために泣きたくなる。正しく金堂に安置し奉る用明天皇勅願の薬師佛こそ法隆寺發祥の尊像、日本で一番古い薬師如来でなくてはならぬ。その金堂と咫尺の間にある西圓堂で、こんな出鱈目をならべる堂守があつたでは、その出鱈目が法隆寺の權威をそこねると思つた。やがてその堂守は堂外へでかけてシャア、シャアと放尿をした。見れば近くに便所がないらしくいつも此の通り西圓堂附近で放尿をしてゐるらしかつた。國寶建造物を汚損せぬやう、萬年算の使用嚴禁、殊に境内では魚鳥をとつてはならぬ禁斷さへあるは周知の通りだ。西圓堂の實景に當面して、私は遺憾ながら

「附近において放尿、境内において脱糞すべからず」

の一項を在來の禁斷條項へ加へる必要のあることを痛感した。

堂守の無智と亂暴さに、法隆寺に對する敬意に割引をかけられ、歩を東院へ

うつすことにした。途中、新築の寶藏殿を拜觀し、久々振りに玉蟲厨子、橘夫人念持佛厨子、百濟觀音などを拜觀し、まざまざと舊時の記憶が甦へる。却つて説く。玉蟲厨子にせよ、その名の百濟觀音にせよ、これを國外から流入したものと説くことが、學的莊嚴を加へる上に都合がよいので、さやうな風に説く學者がある。が聞く處によれば兩者ともに樟材であり、すれば樟は半島や北支那には根本的に存在せぬのだから、やはり日本國內で製作彫刻されたものと考へる外はないのであるが、さうなつてしまうと、大陸輸入の論據がなくなるのでそこで輸入論者は、まづ日本から樟材の船舶が大陸へ漂着して、大陸沿岸で難破した。その破片を利用して大陸の工匠が玉蟲厨子を作つたのであると論斷する。ここにその立論の當否を云云せぬが、多くの工藝美術研究者には、こんな奇抜な立論に及ぶ人があるといふことを語つておけば足りると思ふ。再建非再建論が、三十六年に亘つて論争されるもまた理由ありと申してよからう。

事の序に考へる。古代の近畿が、いかに森林に富んでゐたかは、佛教流入このかた、法隆寺のやうな伽藍が矢鱈に建立されたのでお察しがつく。藤原宮や平城京の造營にしたつて、巨材を千里の遠さから運んだとは考へられないから檜や樟や杉の巨材が大和一圓の山野にあつたと臆斷してよからう。人文向上、人口増加とともに濫伐がはじまる。山林は荒廢する。その次ぎに起るのが水の問題、河川運輸の問題の外に、まづ密度の増加する人口が、最も不自由を窮めるのが飲料水といふことになつたのでなからうか。大和平野が一望の沼澤地であつたことは地質的に立證され、それが干拓されて出來た平野ならば、その上の都市計畫だから飲料に適する良質な水は噴出せぬ。それも四面の山野に森林のあつた時代はよかつたが、森林荒廢とともに水質は次第に悪くなる。そのために起つたのが恭仁、長岡への遷都計畫であると説くのが江崎政忠氏である。從來、遷都の理由を政治的に立論するに對して、林學的方面から水質に論及し

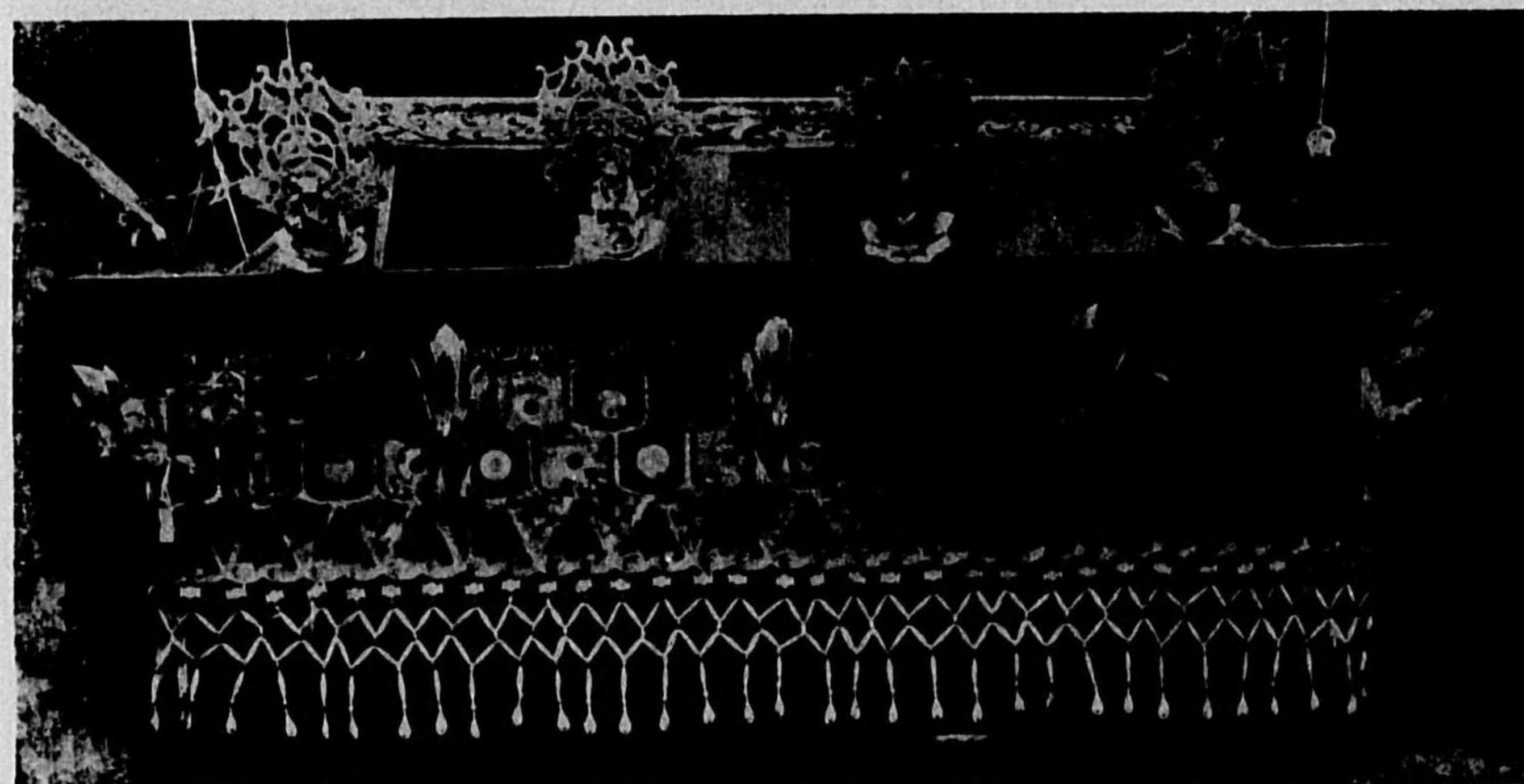
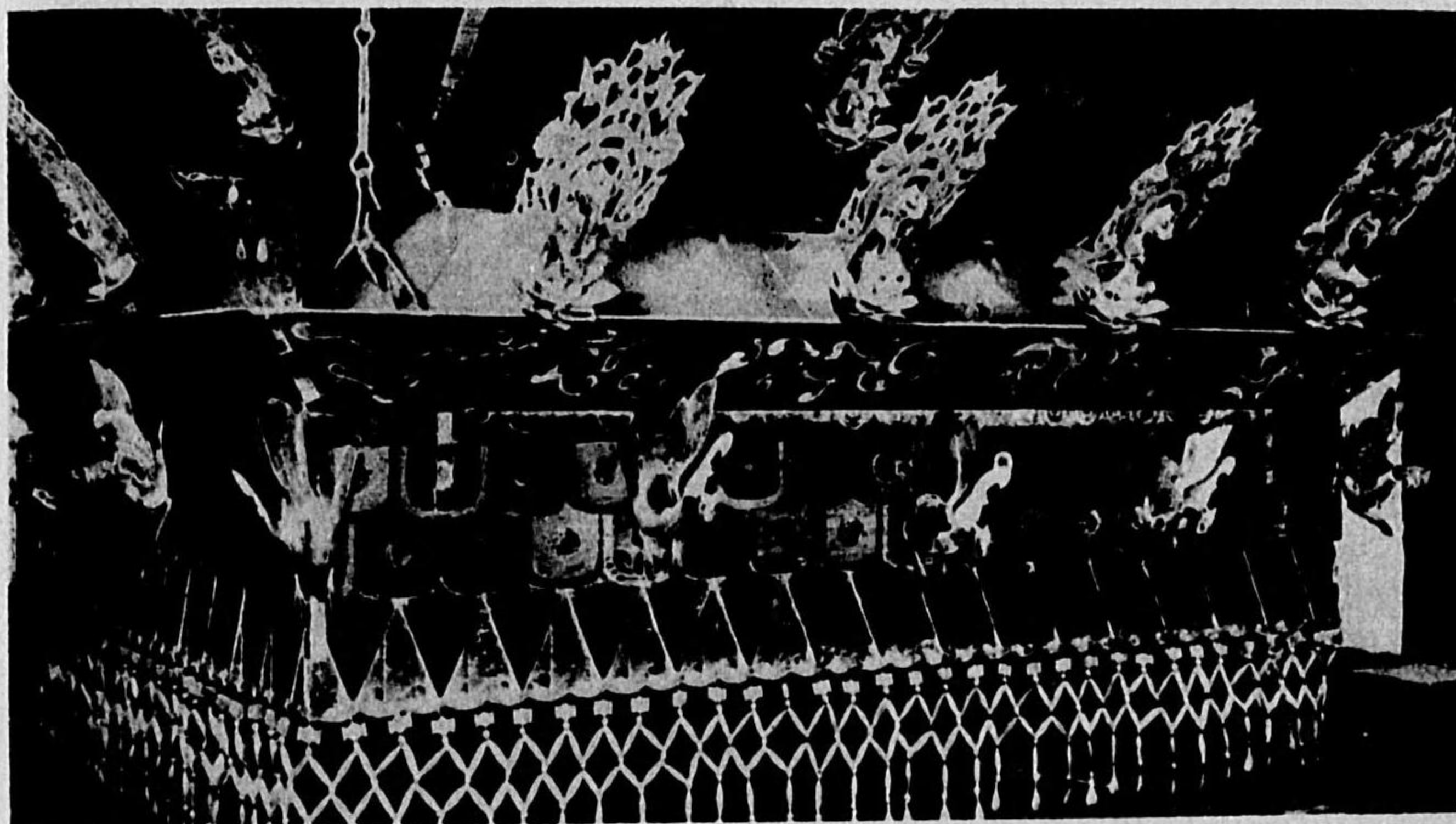
たのは江崎氏をもつて嚆矢とする。事の序に紹介しておく。

○

夢殿へたどりついた頃は、すでに暮近くて拜観がかなはず、わづかに基壇へ上つて行信僧都像をのぞきみたのに止まる。なほ修理の覆ひのかかつてゐる諸殿は、仔細に展観を許されず、門外へでかける外はなかつたが、總じて此の日の法隆寺参拜の感想を語れば、境内が徒らに廣く、殘存諸伽藍の配置が散漫で纏りなく、伽藍に生氣が求められなかつたのは止むないとして、修理中、または修理の成つた諸建築と環境との調和が全くされてゐない。現に此の夢殿にせよ、その輪奐だけはよいが、此の一劃でさへ、境内には雑草が生えてゐる。不潔感の發生を拒みがいほご掃除は不行届であり、塀外には厄除戻りを當てにしたのか、川蟹の戸板店が並んでゐる。キャラメル空箱だ、紙屑だといったものが捨ててある。テンから境内の清掃なんてことが、問題にされてゐないのが問



法隆寺西圓堂本尊藥師如來像



法隆寺金堂天盖二個

題であると思つた。いかに伽藍の内庭だけに箒目をつけてみたとして、それは顔ばかり白く塗つた娘さんが、襪履着物を身につけてゐると同様、テンから調和がとれる道理がない。一千三百年の誇りをかけやうとも、教團の榮養不給色は覆ふことができないのだ。

遂に境内を退却して南大門外の一茶亭に憩ひながら、バスをまつ間の空腹へ、茹卵を三ツたべて六十何錢を要求されたのは、此の茶店、この手で多くの賽客をボルのであらうと、古文化地帯の山林と人情と、相共に荒廢してゐることを痛感した。

法隆寺驛へついて、大阪行の列車をまつてゐると、そこへ雪崩れこむのが厄除観音で稼いだであらう香具師と、乞食業者と、不具者などで、虱は十分に所有してゐるらしいのに避易して、切符を青にかへてもらふ。虱の傳搬を防禦する積りなのだ。さて天王寺驛から地下鐵で阪急へ、そこから電車にのると、法隆

寺驛で回避した乞食業者の一群とバッタリ邂逅し、遂に同車の光榮を擔つた。こんな遠方から出稼ぎ、交通費を拂つてなほ立派に収入のある乞食業なるもの、統制の網をくぐつた結構な世渡りと感心し、なまなかに乞食が稼げぬ自分の存在を嘲笑したい氣になつた。(終)

訂改 法隆寺俗談

(一)

日本意識の興隆が國史教育の鼓吹になり、一方比較的かへりみられなかつた史蹟保存が叫ばれることは、大體において反對すべきでない。が、すぐれば民の嘆きなりで、その程度は依然、問題であらう。度にすぎた舊物尊重は古代妄想症狀として警戒すべきである。

破壊にかけてはトルコ人に負けなさいといはれるのが、斷じて日本人の名譽ではない。われらの祖先の残した尙い遺物は、心をこめて愛護したい。保存したい。が地積の廣くない國土で、増殖する人口を包容せねばならぬ結果、開拓や文化施設や、猛烈におしよせる攻撃力を、舊型保存の一點張では到底、防ぎきれまいと考へる。なほかつ古い物は原則として亡ぶべきものなのである。古い物が曠劫に亡びないから、新らしいものが、のびる餘地はなくなる道理である。そんなら舊物の滅亡は拱手したまゝ見送つてゐてよいか。さうばかりはいへな

い人間の愛着がある。どうせ亡びる舊物だから、できるだけ保存したい憐憫性が起らねばならぬ。そこに古物保存の道念があるのだ。しかし一切の舊物は悉く保存することは不可能であり、何れを保存し何れを放任してよいかのセレクションが必要になる。そこで大まかにいへば一國文化に關係の薄いものは放任されて致方はあるまいといふことになる。ところで過去の一切諸業は洩れなく現在につながるから直接間接、一切の舊物は現代文化と無關係でありえぬとの議論が成立する。そこは常識的な認定でゆくほかはなくなる。

ちかごろ發掘と出土品と、その他、考古學的な事象にニユース・ヴァリユーが盛られすぎる傾向はないか。たとひそれが數千年前の物であらうと、發掘そのことは完全なニユースとして取扱はるべき資格があるにはある。がその發掘された物はたとひそれが稀有の史前學的資料であつたにせよ、古さの感じがニユース・ヴァリユーを削除することは争はれぬ。ツタン・カーメンの墓の發掘

によつて埃及王朝の榮華が立證せられた考古學上の收穫よりは、發掘者カーナヴァン卿が罹病長逝した方にヨリ鋭いニユース・センスをむけるのが、通報機關の良心でなくてはなるまい。だからジャーナリストの立場からみた考古學的資料は、その新發見のあつたことだけをビツク・アツプすればよいので、その内容はゆゝしき學匠の研究對象として放任すれば足りるのだ。たとへていへば堅氷に閉ぢられたマンモスの死體が發見されたことにはニユース・ヴァリユーがある。がその肉は空氣に觸れると二時間ほどで腐敗するやうなもので、食用にならぬと同時にニユース・ヴァリユーもないと考へてよいのだ。阿武山で發掘された金絲を纏ふ貴人の毛髪と、體につけてゐた植物性の纖維とは空氣にふれると同時に速かに朽廢した。いかに「考古學上の大發見」なる文字で飾りたてたところで、發見なるニユースの直後に來るものは申分のない古さであることに留意せねばならぬ。新聞紙は考古學の機關雜誌のやうな内容であつてはなら

ぬこの非難は、正當な理由のあるものとして聞くべきである。

そこで問題は法隆寺だ。これは吾が國、古代文化の精髓その物であることを、詳しく説くのは考古學者、または史學者の領域である。それほどの貴重さを餘り多くの人が知らなすぎる點に、少しく通報の責任を感じるのと、それから目下、國費多端のをり、十ヶ年繼續事業として百七十五萬圓の巨費を計上し、修理に着手してゐるといふ現前の事實がある。工事の進行につれて、國史の上に疑問符をうたれてゐる數々の問題が、次第に解決されるか知らぬといふ前途の希望と興味とがつながる。古社寺保存法が布かれて三十餘年、修理そのことにも改良進歩がある。その全知識を傾けて、根本的な解體修理をするといふ空前の事業は、少しく世間の耳目を聳ててよい問題ではある。

(二)

法隆寺は 用明天皇の御發願にかかり當初、藥師像を作つて仕へんこの御誓

願であつたが行はれず、推古天皇十五年、天皇と聖德太子によつて御草創あらせられたことは本寺の金堂、藥師三尊の光背銘文によつて明白である。

再建にせよ、非再建にせよ、明らかに一千數百年を経過した世界最古の木造建造物として時代文化の遺跡であり、かつ貴重なる遺物貯藏所の名が法隆寺である。その何れもが一あつて二あるべからざるもの、飛鳥時代の最高文化をわれらの眼前に髣髴せしめる國史の精髓は茲に存する。のみならず奈良、平安、鎌倉、室町、江戸の各時代を通じて修理せられ、増補された建築や尊像、靈寶の集積そのものであつて、たとへば特別保護建造物に指定されたもの各時代を通じて二十九棟、國寶に指定されたもの二百餘點、かうなることむしろ、その凄じさに驚いてよいのだ。

かくの如く法隆寺は日本文化の大寶庫である。これを閑却して日本の古代文化を説くは「米をはなれて飯を語るもの」となすこと、至言である。

こゝに最も不思議なのは、寺は大和平野の中心にあり、少くとも平安遷都までは政争の中心地帯でありながら、それでゐて兵火に罹らなかつたことである。もとよりそれは「太子信仰」の餘勢と考へねばならぬが、それが本寺現存の理由の全部にはなるまい。たとひ兵火を免れる理由があつたにせよ、日本書紀にいふ天智天皇九年の災のやうなものが、何故にその一回に限つたであらう。享和元年、大阪四天王寺の五重塔に落雷して伽藍焼亡の近い例があるから、かりに天智紀九年の災が雷火であつたとして、それから以來、落雷しなかつたのはどう説明する。詮じつめると天佑といはぬことには説明の方法がない。眞に奇蹟的な存在でないか。尊重の念はいよゝますます加はるべきである。

が原型の久しく保存修理され來つた理由の主なる一つは、全く時代を通じて興隆し、完成した「太子信仰」のためであること勿論である。そもそも「太子信仰」は佛徒の鼓吹や、加工にまつは明白であるが、すでに書紀の文字にその備

はなからうか。後年の太子の靈格化、神祕化の醗酵素はなからうか。

用明紀において既に「耳總、聖德、豊耳聰、法大王、法主王」の註をいれ、推古紀の條にいたると、母后が禁中巡行のをり「勞み玉はずして生み玉ひ、生れながらにして能く語り玉ふ」とある。これは摩耶夫人が嵐毘尼 (Lumbini) の花園で釋尊を産み、釋尊は七歩にして天上天下唯我獨尊と叫んだのとよく似てゐる。「一時に十人の訴を聞いてあやまち玉はず」御聰明の御素質、推察し奉るべく「かつ未然のことを知り玉ふ」とあるので、後年の四天王寺所傳「日本一州未來記」になり、太平記には楠正成がそれを披見したことになつてゐる。片岡の飢人に御衣を賜ふ一項は、すでに少からず神祕的である處から、後年に及んで菩提達磨の示現説を胚胎した。勝鬘經を講じ了らせられて長さ二、三尺の天華が降つたとある太子傳曆の叙述は、必ずしも不似合な記述ではないやうに仰がる。

太子の御意思による國史編纂が日本書紀に結晶した時、太子はすでに相當、靈格化してあらせられたと推察し奉る。それからひいて平安朝期に入ると、もに、ますます御傳記は神祕色に塗り潰され「上宮聖德法王帝説」から「上宮皇太子菩薩傳」「上宮聖德太子傳補闕記」はまだよい、「聖德太子傳曆」あたりへ來ると、實録正傳を素晴らしく離れてくる。かうして加工された傳記による「太子信仰」の完成期は鎌倉期とみられる。その時、起り來つた淨土教が佛教移植の御功績を稱へまつり、太子を祀り奉るは當然の報恩德謝作用ではあるが、その教線を張る上において、在來存在する「太子信仰」に依存するところが、多分にあつたのではなからうか。つたへられる行基の本地垂迹説、空海の兩部神道、いづれも教線擴大の一方便とあつたと同様な意味でさう思はれる。

(三)

淨土教が「太子信仰」——いはば「聖德太子宗」といつた遺構に乗じて教線を張

るに都合がよかつたのは太子の御信仰「世間虚假、唯佛是真」の外に、それだけ聰明な御素質で内治外交に御焦心あそばされながら、東宮のまゝで永からぬ御生涯をこぢさせられ、かつ蘇成入鹿の大逆による御血統の斷絶は淨土教の厭離穢土、欣求淨土なる無常觀に一致する處あらせらるゝ。そのため神怪奇説的に存在する太子傳はいつの間にか淨土教の先驅をなしたものゝ如くに取扱はれなかつたか。私は現代にのこるその適例をあげてみたい。それは越中の井波町、瑞泉寺に行はるる毎年の太子傳會である。

寺は本願寺五世、綽如上人、後小松天皇の勅によつて創建するといはれる。賜ふ處の太子繪傳八幅を寺寶となし、太子靈像を祀る太子堂は本堂と並立し、形からみて太子信仰と淨土眞宗の並行である。然るにそれが京都兩本願寺の現形と比較すると、その太子堂が阿彌陀堂になり、太子堂の名は大師堂に、聖德太子が見眞大師に變つてゐる。これは淨土眞宗が時代とゞに太子信仰を壓倒し

た形を、すこぶる正直に現はしたものであるまいか。兩寺の形容を比較して太子信仰と浄土教の競合、かつは浄土真宗の壓倒的な教勢發展が知られる。この寺の行事の太子傳會は、毎年七月二十二日より二十八日まで一週間、傳會中の賽者十萬人を下らず、祠堂金やお賽錢の上りが農村不況ですら一萬圓に上る。町民の生計が、これによつて立つといはれる。元より真宗篤信地帯だから聖徳太子と親鸞上人とを、いつしよにして拜む結果とは思ふが、とにかく太子信仰の姿を現代にのこす顯著なものだ。讀みあげられる嘘だらけの本尊緣起を加工せられたる太子傳の一ツとして掲げておく。

「正面御厨子の内に敬ひ奉るは聖徳太子、二歳の御壽像にて在す。そもそも其の濫觴を尋ね奉れば人皇三十一代、敏達天皇（筆者註——人皇三十一代は用明天皇にてまします）元年正月朔日に御誕生あらせられ、二歳二月十五日の曉に、玉照姫の懷より這出させられ、雪の御肌に緋の袴を召し玉ひ、東方に向は

せ玉ひて南無佛、南無佛と三遍まで唱へましましけり、これが本朝において佛法弘通、念佛の稱へ始まりなり。云々」

南無佛とはあるが南無阿彌陀佛とないところに少し容赦がある。南無阿彌陀佛が念佛、念佛とは南無阿彌陀佛のことと觀念の固定した頭で言えば、「念佛の稱へ始まりなり」とあるので、直に聖徳太子が盡十方無碍光如來に歸命頂禮せられたことになり、久遠實成阿彌陀本願寺は聖徳太子の御遺命によつて存在するやうな錯覺をよぶ。此の緣起がいつごろの作か知らぬが、推敲の苦心は十二分に偲べるといふものだ。「太子信仰」がいかにかに佛徒によつて神怪に誇張されたかは、前記の緣起によつて明白であるが、そのことは直に實在の眞言宗にみらる。信者の多くは大日如來を拜するよりは、ヨリつよい熱力をもつて奥の院の弘法大師入定地を拜む。即身成佛の大儀はかへりみないが、ひたすら御詠歌の餘嫻に陶醉する。金堂再建、法燈系續に働くものはこれら一文不知の徒で

つて、黄卷赤軸を説く學僧の力とは考へられぬ。瓢型古墳の河内瓢箪山が保存されてゐるのは考古學者の力でない。史蹟保存の法令力でもない。全く俗信仰のおかげである。大阪四天王寺への賽者は四天王を拜むのでない。弘法大師、六時の鐘、龜の井へ敬意を表せんがためである。なほソレの如く、本尊、藥師如来はかへりみられぬまま「太子信仰」は、法隆寺をあげて太子遺徳の結晶として崇拜し、保存し來つたのであると斷じたい。

とにかく、さうして時代を通ずる太子信仰のあつたおかげに、法隆寺はよく保存された。保存力の發源はヤハリ信仰であつた。

(四)

「太子信仰」が、聖德太子を生身の如來と崇め奉つたあまり、その攝政として内治外交にわたる御苦心を偲び奉らぬ認識の不足が、面白からぬ某參與官の誹議事件を起す。事の序に略述しておく。

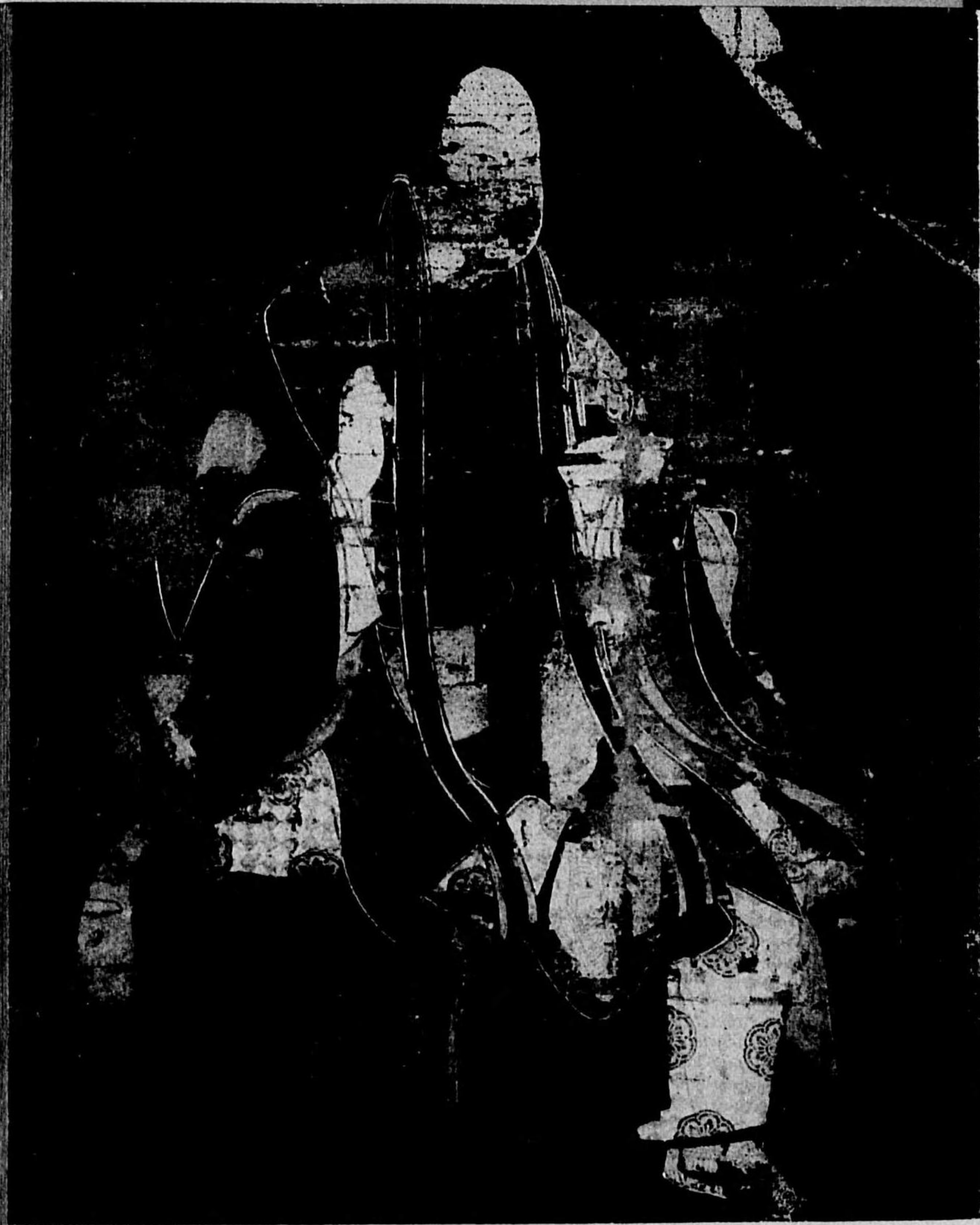
當時の日本は族長政治の規をでなかつた。國初以來の強族に大伴氏、物部氏あり、齋部、中臣は祭政の分離で勢力を失ひ、大伴、物部の二族のみが政治に關與した。大伴金村が任那問題に失敗してから大伴氏の勢力が衰へ、物部氏と武内氏との對立に代つた。蘇我氏は武内氏より分派して聖德太子御在世の前後は物部、蘇我の抗爭時代であつたのである。物部氏は強大なる武力をはさみ、内治において缺くべからざる兵權の所有者であつたらうが、蘇我氏は武内氏以來、對半島政策の衝にあたり、大陸文化にタッチしてゐる。だから信仰問題になると、いつも物部氏が國神を守つて排佛にいでるのは當然な思想の外發であり、蘇我氏が佛教信仰を鼓吹するのは反對に外來文化の招來を主張するもので、何時の時代にもある新舊思潮の衝突であつた。聖德太子は、明らかに蘇我氏に御協力になり、物部氏のいふところの蕃神に額づかせられたのは、統治の局にあらせれる御身分として、極めて當然であつたと思ふべきである。何故となら

ば、

(イ)當時の佛教は信仰であると同時に、文化その物であつたことを考へねばならぬ。現代佛寺と、僧侶とを基礎觀念にして考へること當らず。

(ロ)高度文化國と、低度文化國とが比隣した時、低文化國が壓倒され、又は征服される人文上の約束を顧みねばならぬ。十七八世紀に發達した科學力の勝利で現在、有色人種が、いかなる状態に沈淪してゐるかと思へ。

以上、二點を考慮して聖德太子の御時代を偲べ。内は族長の横暴で庶民は元より未開の域を脱しない。上古の遺習はただ、あるが儘の状態でなかつたか。外には隋の煬帝が長城を築き西域を經略してゐる。推古天皇二十六年、高麗は隋の煬帝の軍三十萬を破つたといふので貢物を齎してゐるが、その勝利といふのは四五年前のことであつたらしい。何れにせよ、辛じて大兵の南下は半島において食ひ止められた形であるが、反復つねなき新羅がある。半島統治に來目



(色著本絹)像畫子太德聖



聖德太子南無佛御二歲像

皇子、當麻皇子がたたれたほど油断のできぬ時代である。半島の向背如何で隋の勢力は直に壹岐、對馬に迫ること元兵襲來と同じいことにならなかつたとは限るまい。日露戦前の強露の南下と併せ考へ、國際的な危機は十二分に察せられる。海外事情に明白な蘇我族が文化輸入に焦慮したこと、遂に兵力に訴へて物部氏を亡ぼし、太子が三寶の尊崇を説かせられ、造寺造塔の事が起つたのを單なる佞佛とばかり考へてはなるまい。

かやうな内外事情を考へて、隋の煬帝に「日出處天子、致書日沒處天子、無恙云云」の國書を贈らせられたことは、異常の御決心と偲び奉るべきである。無常感で弱められたる太子傳からは到底、うかがはれぬ御壯心であるまいか。小野妹子が同伴した斐世清ら十二人の外客は日本視察團である。露出したスバイである。日清戦前に長崎へ來訪した北洋水師提督丁汝昌を思へ。日露戦前に來日したクロバトキンを想ふがよい。

飭船三十艘をもつて難波津の江口に迎へ、客の京に入るや七十騎の飭馬をもつて迎へる。着到より入京まで、二ヶ月を費してゐるのは、迎客用意の緊張を察すべきで、單なる儀禮のためとのみは合點されない。

徳川期の朝鮮使節の應接でさへ、いかに日本が弱らされたか。琵琶湖東に朝鮮人街道が残つてゐる。狭い國土を大きくみせるために故意と曲りくねらせて作つたいはれる。眞偽のほどは計りかねるが、鎖國時代とはいへ徳川期でさへ眇乎たる半島國にそれだけの戒心を拂つた。國際關係を顧慮する時、聖徳太子の對隋國策にヨリ甚だしい御焦慮のあつたことを察せねばならぬ。その他、詳しく語らぬが、當時の日本は、内外にわたる非常時であつた。人によつて日本の三大危機の一ツに數へるのがこの時代だ。誹議者と及び、誹議者を攻撃する者と、雙方ともにこの點の諒得があるのか。

(五)

日本の古美術を語るもの法隆寺の名をいはずなく、法隆寺の名を口にすもの必ず再建、非再建の問題にふれざるはない。そこでこゝに問題の梗概をのべて一般の諒得に便し、併せて私見を述べたいとおもふ。

法隆寺金堂、藥師光背の銘文により、當寺を推古天皇十五年の建立とみる。それから六四年をへて 天智天皇九年、夏四月、法隆寺焼亡して一屋をあまさずと、日本書紀に明記してゐる。従つて現在法隆寺は、ソレ以後の復興であつて伽藍縁起、流記資財帳、七大寺年表、色葉字類抄などの古書によつて和銅年代の建立とみる説あり。かりに和銅元年の再建として天智天皇九年をさること三九年、推古天皇十五年をさること一〇二年であり、草創から優に一世紀を下ることになる。

そこに形態と遺物に根據した愛着が起り、書紀記載の眞實性を疑つた非再建論が擡頭し、それに呼應して國史尊重の再建論がおこる。前説は多く建築學者

古美術愛好者によつて支持せられ、後説は文献本位の考證學者によつて主張せらるる。

この論争の近代的發展の端緒は明治三十八年、國華百七十七號に故平子尙氏が「法隆寺草創考」を、關野貞氏が同年の史學雜誌二月號において「法隆寺堂塔非再建論」を發表されたのに始まると視てよい。

ここに阿波出身の小杉温邨氏がある。早く本居翁の學統をつたへ、勤王の志あり。維新の志士で後年、東京大學古典科の教師となり、鬱然たる奈良學の大家であつたが、堯の子は必ずしも堯にあらず、舜の弟は舜に似ずで、學者の子が學者になるとは限らない。小杉氏が生涯の研究を子孫につたへ難きを嘆かる折から、その爐竈に入つたのは同郷出身の喜田貞吉氏であつた。

この人、阿波國那賀郡櫛淵村の産、幼にして神童の稱あり。長ずるに及んで數學の天才に恵まれ、志は理工科にあつた。しかるに三高在學中、現京大名譽

教授河合十太郎氏の薰陶をうけ、たまく出缺簿をつけらるるにあたり、名をよばれて阿波の方言で「へイ」と答へた。その「へイ」の返事をきくと河合教授は怫然として怒り、教師を侮辱するものであるとなし、大いに喜田氏の油をしぼつた。喜田氏の意、甚だよろこばず、それから以來、數學研究の志を古草履のごとくに捨てて翻然、國史の研究に向つたといふ變つた學歷の所有者である。その數學的天才があるばかりに後年「平城京の四至」で關野氏と衝突したり「京間、江戸間」の研究で前人未發の學説をたてたり、問題の法隆寺では關野氏の工學的研究を一蹴して再建論を叫ぶ等、かかる主張のベースを作つたのはその數學的天才にまつ。觀じ來ればへイの一言がソレに拍車をかけて、國史界の大波瀾を産んだのである。

その喜田氏である。小杉温邨氏が氏をもつて學統の繼承者とみなし、遇すること子のごとく、多年の蒐集にかかる史料は惜しみなく與へたものである。こ

こにおいて奈良學の正法眼藏はなほ一器の水を一器にうつすが如く、喜田貞吉氏によつて系承された。これ喜田氏が多く奈良の地を踏まずして平城の四至を論じ、法隆寺再建論を主張しえた裏面の消息である。

ある夜、恩師を訪れた喜田氏は小杉先生が平子、關野兩氏の論文を示して痛憤の涙を落されたその悄然たる姿を仰ぐや、壯心は勃然として奮ひ起つた。今こそ報恩謝徳の一戦に、わが身命を擲つべきであると決心し、それから一切の關係書類を熟讀し、非再建論據の不備を發見すると同時に猛然として反駁の烽火をあげた。その勢ひがいかに猛然であつたかは一ヶ月にわたり、殆ど不眠不休で大小通計百四十頁にわたる論文を書きあげ、遂に健康を損ずるに至つたので知られる。爾來、再建非再建の問題といへば關野對喜田兩雄が論戰の別名のやうに思はるるに至つた。

ちなみにこの論敵兩氏は後日、平城京趾の研究でも正面衝突した。關野工學

士が法隆寺非再建、平城京趾の研究によつて工學博士の學位をうけた時に、喜田文學士はその反對論文を一括してこれを同じく工科大学に提出し、工學博士の學位を請求したが、この敵本手段は塚本博士の回避するところとなつてモノにならず、文科大学へ提出して改めて喜田文學博士が出現した。

それから悠々三十餘年の歳月が流れてゐる。問題の法隆寺は再建非再建の板挟みになり、向ふところを知らず。論争方法だけは複雑多岐、考證嚴密、殆ど一指を觸れがたい程度に發達し分化した。今日では殆ど一巻の論争史を作りあげる程度に至つてゐる。

(六)

殆ど一部の學をなすことまでいはれる法隆寺論争も、今これを試みに分類すれば

(イ)再建論——推古天皇十五年建立、天智天皇九年に焼亡した。或は現存の

法隆寺は和銅年間の建立ならんとする説。

(ロ)非再建論——金堂、塔婆及び中門、歩廊の一部は推古天皇十五年、草建のままである。書紀にいふ一屋を餘すなしとは文飾にすぎたもの。該記事は錯簡か、誤謬か、誤寫か、三者その一ツであるといふ説。

(ハ)中間説——焼亡を認めるけれども、それは書紀の編纂者が干支の置所を誤つたものと看做す説、焼亡を認める點で再建論であり、現存建築を和銅年代の物にあらずとする點で非再建に近い。いはば一種の中間説である。

およそ以上、三種とみて、雙方の嚴密な學的論争の内容は、限りある紙面で紹介はできない。この論争の結末が今度の解體修理でつけばよい。恐らく解決はすまいとおもはれる。何となれば、おのおの自説に對する執着があるから第三者がみて不動の物的證據と思はれるものでさへ、これを否認するために全力を揮ふであらうし、かかる有力な物的證據の出現が、今日までにならないのだから

將來もまたありさうにない。だから論争を止めやうとするならば、國法によつて論争を中止し、違反者には嚴刑を課するか、或は法隆寺金堂内の伏藏を發いて有力な證據物件を探るか、の二法しかない。前者もとより學的研究の自由が許さず、後者は信仰が斷じて承知せぬ。従つて論争はなほ百代を貫ぬく可能性がある。

喜田博士の主張のごとくに、日本書紀は官選の歴史であり、献本されたのが元正天皇養老四年だから、天智天皇九年の法隆寺焼亡をさる五〇年にすぎない。それ位に新しく、かつ近距離にある大官寺の火災が、官選の歴史に間違つて記載される筈がないといふ説は、かなり重要に考へるべきであらう。が、それと同時に、しからは書紀の全的な記載には文飾がないか、間違ひはないかといはれると、強ちさうだといひ切れぬ事情があるにはある。そこに關係研究者の人間的な迷ひが起つてゐるやうである。

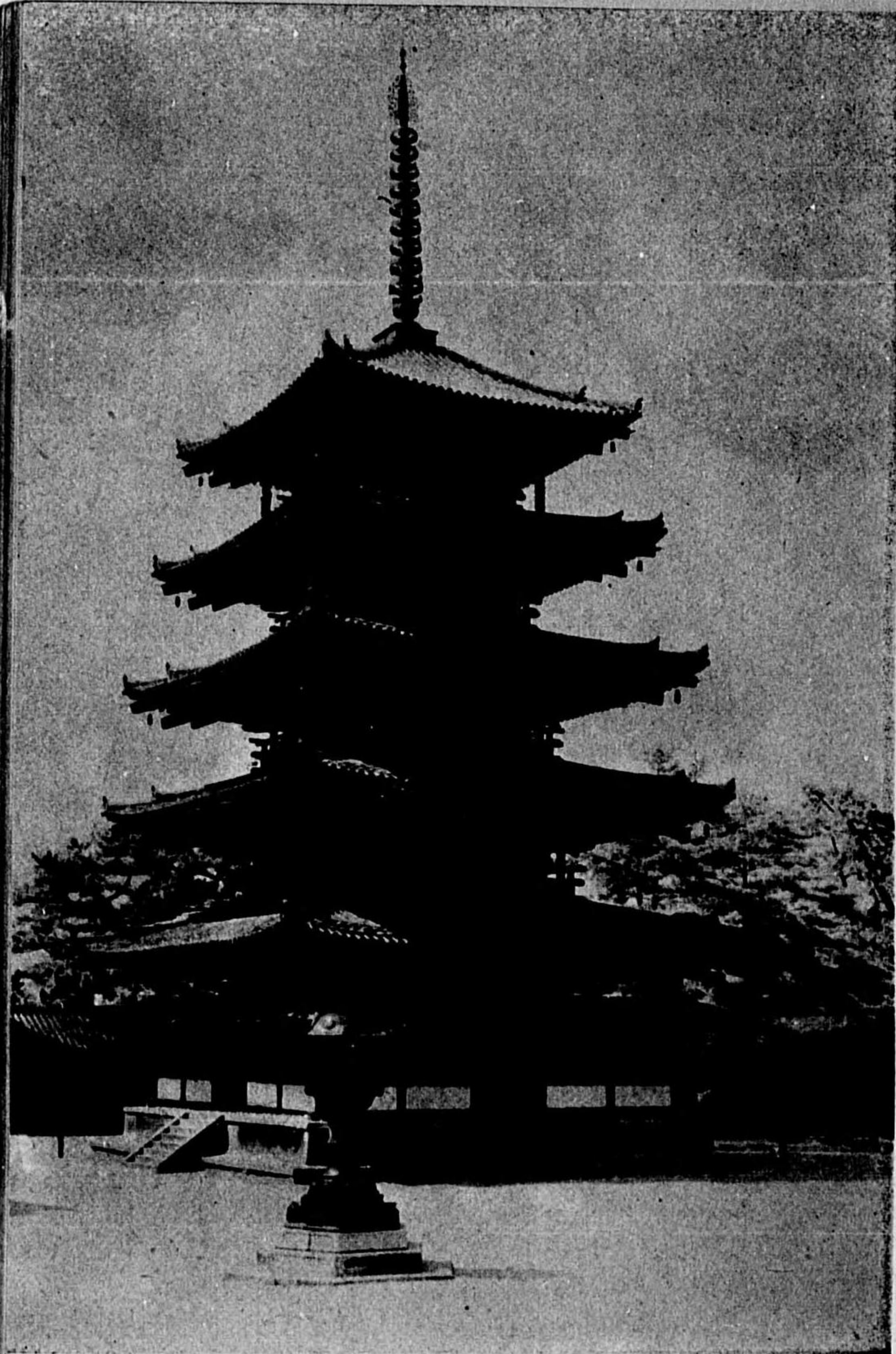
筆者は一介の操觚業者に止まる。が芻蕘の言もまた聽くべきあり。研究諸家

が多く語られざる文字の解釋について、私のいづく一考を述べたい。それは書紀記載の天智天皇九年の焼亡の記事で、試みにその全文を掲げるとかうだ。

「夏四月癸卯朔壬申。夜半之後。災法隆寺。一屋無餘。大雨雷震」

とある。まづこの一項中、注目すべきは「災」の一字であるまいか。「災」は通釋によれば「ヒツケリ」と讀ませせてある。「災」は「天災」であり「天火」は天の與へた火であるから幾分、懲罰的な意味がある。それが次第に變轉して出火原因の不明な場合、近代的な文字では「怪火」の意味に使用される。だから本質的な天火、すなはち雷火の場合と、原因不明の怪火の場合と兩様に解釋される。それで書紀の執筆者がその「災」の字を何れの意味に使用したかは不明なのだから、天火と怪火と、二ツの場合を構想して分析的に考へてみやう。

(イ)夏四月の眞夜中すぎ法隆寺より出火し、伽藍僧坊、悉く焼亡した。その夜は大變な雷雨であつた、



塔重五寺隆法の理修體解々愈りよ月二年本



法隆寺五重塔空洞底面より心柱を見上だけ状態

といふことにして考へると、文勢の上から大雨雷震が下の方にあるので、前の方にある災は、必らずしも雷火とはいへぬことになる。單なる失火であつたと思はれぬでない。

(ロ)夏四月の夜半すぎに法隆寺へ落雷し、伽藍僧坊が悉く焼亡した。中々の大雷雨であつた。

災を雷火と解釋すると、短文の中に雷が二ツ重なることになつて、文勢上の瑕症になる。

そこでイの場合からは法隆寺放火説が産れぬでない。アンチ蘇我派といふよりは物部派の排佛思想漢が放火したと考へられぬでないが、すれば放火の手口として、まづ伽藍へ火を點するのが順序のやうである。

放火でなく失火とすれば、伽藍内の献燈が火元ともいへるが、六十餘坊もあつたといふ僧坊から發火せぬとも限らぬ。すれば「一屋」とあつて「一字」とはな

い。い。のだから伽藍は焼けなかつた。焼けたのは僧坊だけだこの説がたためではない。

ちなみに書紀では、この項の直後にすこぶる難解な童謡が載録されてある。編纂の體裁から論じて前後に聯絡のない童謡が、忽ちこんなところへくる道理がないやうに思はれる。だから守部の説くやうに、これを法隆寺の火難を豫言した童謡と解すれば、まんざら放火の疑ひがないとはいへない。次に雷火によつて焼けた場合を考へる。

(七)

天智天皇九年の法隆寺焼亡を書紀記載の「災」字により、自然的な「天火」と解すれば、失火原因は雷火であるの外はない。ソレを雷火とみるならば、雷はごこへ落ちるであらうか。いふまでもなく落雷箇所は塔婆でなくてはならぬはずだ。最も高くして最も感電しやすい金屬の九輪をささげる塔婆をもつて落雷

箇所と認定し、塔婆が發火點と考へるのはあへてフランクリンの加擔をまたず、物理的な原則である。

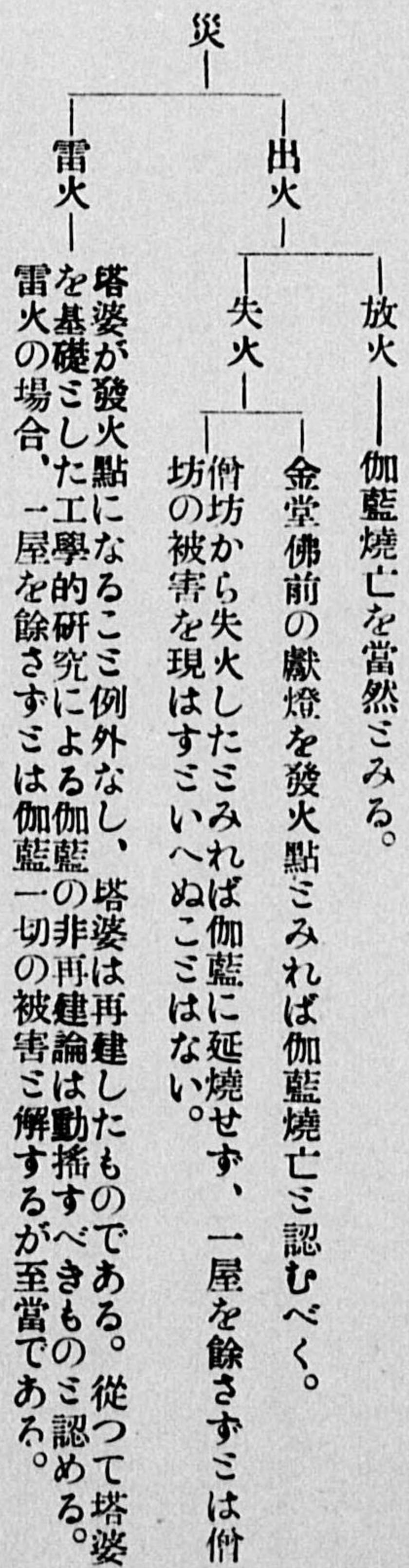
享和元年、大阪四天王寺の五重塔に落雷し、疾風とともに火焰猛烈、さしもの大伽藍が、今の東大門の西門の井戸屋形を除いて、悉く灰燼になつた例がある。附近に喬木を所有してゐる高野山金剛峰寺でさへ、天保十四年の焼亡は落雷のためで、まづ大塔を焼亡し、伽藍は悉く灰燼に歸した。それを考へると法隆寺が雷火によつて焼けたとすれば、塔婆が發火點と認定すること、極めて當然であつて、伽藍が従つて灰燼に歸して不思議ではあるまい。「一屋」とあるからそれは僧坊であつた。伽藍の焼亡ならば「一字」となければならぬなど細かい議論は顧みる必要がなくならぬか。

更に關野博士の非再建論中、どう狭く考へても「塔婆の非再建」は、落雷の定則から根本的に否認さるべきであるまいか。すでに塔婆が草創の物にあらず、

再建された物とすれば、同じい論據によつて非再建を主張される金堂、中門、廻廊の一部もまた再建色に塗抹さるべき運命にたたぬか。

再建論を強硬に主張し、八方の異説に應酬せざるなき喜田博士でさへ、この「災」字の研究を等閑に附せらるるは、手ぬかりでなからうか。が、關野博士のごとく、文献を極度に排斥せらるる人は「災」そのことでさへ、念頭に往來を許されまいから、焼亡原因が雷火か、失火か、放火か、そんなことは閑葛藤にすぎないであらう。とにかく諸家の研究成績を讀むと「災」を雷火と解しながらなほかつ非再建を稱へる人がある。遺憾ながらその見解は沒常識の露出であるまいか。災を雷火とみる以上、塔婆は焼失したと考へるのが至當であり、非再建論の工學的基礎の建替建直しが必要になりさう。

今、筆者の素人觀を諒解に便するため、圖解すると左の如くなる。



さて、もし再建であつたとすれば、現存の法隆寺は推古式建築の様式を傳へるものでなくなると嘆くに及ばぬ。前代の遺形を傳統するは社寺において普通のことであつて、たとへ鐵骨になつても板貼りの伽藍形式を保存する金剛峯寺について考へるがよい。ただ諸佛像を猛火の中より、ごうして運びだしたか、夜半の大雷雨中に搬出は不可能でないかといふ點は、かなり難點といはれた時代もあるが、ソレとて當時、數百人がゐたであらう僧たちの力で、運搬不能であつたとは云へない。大天蓋その他の可燃性なものは、再建論では後日他所か

ら搬入したものとするか、百年後の摸造品か、新作物といはねばならぬ難點に
ブツつかるので、ここに實物派と文献派、非建再と再建論とが正面衝突はやむ
なく、この論争の難透至極な一關とされた如く、今では妥協の途はついてゐる
やうだ。

因みに本稿改輯に當り、喜田、關野兩博士の長逝をみるは、洵に哀悼の至りに堪へず。兩
博士の御冥福を祈つて擱筆する。(終)

法隆寺隨想

○
どうせ廢滅するであらう形象物を、人間のはからひで壽命終焉の促進をやらぬやう、もう一度法隆寺問題について一言させて貰ひたい。われらの申す處、耳を傾けて下さる當事者ありとは思はぬけれども、金堂解體、壁書切取の主張者たちは、凡そまづ技術の可能について確信があるであらうか、而してまたその經驗があるといふのか、ただ理論的に可能ならざるべからずで、あの壁書を切斷するなら、それは無謀以上の罪惡といふものだ。われらは、高度國防の完成に天下の視聽を集中せしめなければならぬ今日、大和法隆寺が黙黙として解體修理されつつあることに滿腔の敬意を表する。變革期においては、凡そ一切の舊物虐待され勝ちなもので、明治維新に文明開化の流入壓迫があつたとはいへ、重要美術品の數々が二東三文で賣拂はれ、滔々、海外へ流出したことを想ふと甚だしき遺憾さを禁じえない。しかも固有の藝術保存を勸告してくれたのが、

肝腎、日本人でなくて外國人であつたなどは、ますます感心を拂ひかねる。さうした意味から、法隆寺修理の現代的價値をヨリ以上に尊敬してゐるんだ。國史は民族の性格を決定する。その國史に對する情操哺育の上から、法隆寺金堂や壁畫に對して、相當、焦心せしめらるるはやむをえない。一體、關係保存論者、技術家諸君は肝腎、法隆寺に對して眞實宗教的な敬虔性をもつてゐるだらうか、單なる古代藝術品としてののみ、いはゆる學者の冷靜な態度でのみこれに臨むは、法隆寺の場合、特に不足を感じられてならぬ。醫師の立場としては最善をつくすといふので大手術が行はれる。それには行爲の當然性が認められるけれども、行爲の當然性は、必ずしも結果の良好を保證するものではない。結果から逆論すれば、大手術が結局、寂滅を促進する場合は大いにあるんだから、寧ろ大手術はやらないで、自然死を待つた方が賢明といふことになる。實は壁畫の紋様がどうの、形式がどうのと喧しく騒ぐ癖に、壁畫の全體的合成につい

ては、研究未完とみる外なく、數醫者のメスは、必ず命終促進となるに違ひないと思ふ。三嘆すべき也。「倚る壁の土がこぼれる余寒かな」

○
いつまでも法隆寺を問題とすること紙面の變化をかき、ジャーナリズムの素志に反くは千萬承知でかいてみる。再建論が小杉温邨博士の所説を延長したものであるは、喜田博士の告白によつて明白であるが、足立博士の新非再建論が、これまた先師、關野博士の遺説を捏ねかへしたものなる事明白なるに拘はらず、それを告白せぬのは、局外者には想像のつかぬ學的良心と受取られる。關野博士が晩年において、法隆寺焼亡を認めて、焼亡の絶對否認から改論した上「焼けた若草伽藍は太子寺、現法隆寺は用明寺」との新考を發表した。足立博士の新非再建論の根幹をなす點は、關野博士の變節された改論と大差なく、ただ「若草塔址が用明寺、現法隆寺が太子寺」と、關野説と比較して、それが入れ變つ

てゐるだけのものでしかない。それを自家の新説となし「かほご見やすき道理を、これまで何人も思へなかつたのは不思議」とは、少しいひすぎでないか。先師が、それを考へてゐたのだから變なことになる。その所説をきき、やつと氣のついた新非再建の方が、よほど不思議以上の不思議になる。足立氏は「あれほどの太子のために、一字がなかつたとは、受取れかねる」といつて、現法隆寺金堂を、その一字と認めてゐるが、これよりさき、奈良の田村吉永氏が「法隆寺移建論」を發表したのが昭和二年だ。筆者が薬師寺で一杯のみながら、その新説を某氏から承り、構想の天來的なのに敬意を表したため、記憶に明らかである。田村君の移建論は、本尊の問題なり、太子のために寺がなければならぬといふ理由なり、また若草伽藍を用明寺となし、現法隆寺を太子寺とする點まで、足立説に同じく、ただ異なる處は、足立氏の太子寺は若草伽藍境内の一佛堂であるといひ、田村氏は若草伽藍とは別々の寺であつたのを、若草伽藍の焼



法隆寺壁畫(南側東小壁)觀音菩薩像



法隆寺壁畫阿彌陀淨土脇侍勢至菩薩像

亡後、今の地點へ移したといふだけのものだ。その移建論を、足立博士が讀まなかつた、知らなかつたとはいはれた義理であるまい。かう考へてくると自家創見の如くいはるる足立氏の新非再建説なるもの、他家の流材で、自分の新宅を建てたやうなことになる、學的良心を問題にしたいのは、そのためである。

「覆はれぬ脛の太さや清涼着」

○

中外日報紙上、齊東野人の名で史論に及ばれた喜田貞吉博士が長逝された。新聞に「最近では法隆寺再建論で知られてゐた」とあつたのには、その最近が眼に際だつ。いかにも門外漢の筆らしくて長大息した。その最近が三十年來の事だから、久しいかな再建論、知るも知らぬも法隆寺といへば此の人を想ひだす。論敵、關野貞博士すでに逝き、今また喜田博士の長逝をきく、悼ましい哉。これで一等安心したのが法隆寺であらう。太子御草創以來の伽藍として、百年ば

かり古くなれる。關野博士は最初は焼亡の絶対否認を固執してゐたが、やがて焼瓦や焦土がでてきたので、それから焼亡は是認のやむなきに到り、二寺併存の新説をたてた。論争の形式からは喜田博士に團扇があがる。が事實、國定教科書にさへ焼亡したとはかいてないし、多くの技術家たちは、みんな非再建と信じてゐるから、天下の大勢からいふと四面楚歌の喜田博士であつた。君、靈あらば化けて出られよ。南北朝正閏問題が此の人の法難であつた。事が政治問題になつたため、とつて以つて利用するのが出てくるから耐らん。喜田貞吉の名は足利尊氏と同架におかれた事もあり、性格の猪突性から出發した研究の失敗であつた。とにかく、古色蒼然たりやすい國史界へ、常に突風を起したがる名物男に亡くなられて、後日の寂寞がないでない。直腸癌の切開後、旅行講演を憚からず動かれたやうで、中外日報社の琵琶湖周遊にお供したのが最後の見參になつた。途中、故障が起り、井川定慶クンの臂押しで安土城を下られた光景、

眼裏にあり。その時「喜田君はヤハリ國寶級の學者だよ、君」と背をたたいたのが谷本梨庵大師だ。猩々は猩々を知り、國寶は國寶を識る。今弘法の健在を祈る。君、死に玉ふこと勿れた。そこで問題は法隆寺論争の後日物語になるが、足立工博のひとり舞臺で、これから他人の流木で茶室を建てたやうな二寺併存説がきけるであらうと楽しみにしてゐる。近頃、發見された若草塔礎を、新聞では論争解決の有力な證據品のやうに書いてあるが、あれは再建、新非再建の何れへも利用のできるもの、安心にたらず。「商標のいがむ麥酒や冷蔵庫」

○
法隆寺村の佐伯啓造クンといへば佐伯貫主と同姓な處から、その血脈のやうに錯覺されるが、さうでない。法隆寺の寺侍の北畠姓が、必ずしも親房卿の苗裔でないのに同じい。論誌「夢殿」やら、「南都七大寺叢書」やら古文化研究の善本好著を矢繼早に出版する。事業の性質上あまり儲かりさうはないが赤字の出ない

のは御時世の潮に乗つたのであらう。近刊に「薬師寺の新研究」あり、篤學者の研究を網羅して末代好學に便する事、神妙に論せらるる。憾むらくは弘文天皇御一代を、産み奉つた東塔露盤銘について一論のない事が不足を感ずる。あれは是非共、喜田博士を煩し、天智皇后御在位説の一論を戴せられたかつた。厄介なことにはまた法隆寺が新史料を發掘した。喜田貞吉博士が現在なら、あの扁平な鼻をいよいよ低平にし、碎れたポイラーのやうに湯氣を吹く處であつた。工學者諸君が偶像のやうに仰いでゐる關野博士は最初、焼亡の絶對否認論者であつたことを追想するがよい。形勢怪しくなつて新非再建のやうなことをいひ、法脈を系承して足立工博が觀念的な裝飾に努めてゐる。若草塔址であらうと前からうと、そこら一面掘つてみたら、可なり大規模な基壇が現はれるであらうし、とにかく法隆寺が焼けなかつたとは、いへぬやうになること必定である。一部を掘つてさへ基礎がでる。況んや全部をやこの推論が産れてよい。法隆寺

方面で喜田博士を口を極めて悪口することを聞いてゐる。いくら悪口したつて焼けたものは、焼けたんだから致方あるまい。焼けた物なら致方はないし、これから、焼けないやうにすればよいのだ。焼けたけれども焼けなかつた火葬場の火が消えたやうな足立説が、これからごんなにデチ上がるか、刮目して拜見する。「槽の火に通らぬ煮えや蕪汁」

○
「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」その柿が熟柿になる頃、鶺鴒故郷舎から、夢殿論誌の特輯として「綜合古瓦研究、第二分冊」二巻がとどく。あの僻陬にて、これだけの印刷をなすこと、實は仲々御苦勞と察し、まづ佐伯啓造君の犠牲心に敬意を表する。たかが物數奇のゲテ道樂とばかり思はれた古瓦研究が、次第に精密科學の領へ侵入し、今や日本古代史研究の一翼として不動の地位を占め來つたこと、當事者の勞力、疎かにできぬのみならず、前途の啓蒙、怖る

べきものあるべし。天狗の爪といはれた石鏃、行基焼の名に甘んじた蠅紋土器、鬼の俎で納まつてゐた石棺など、それが史上、いかなる地位を占めるかは贅説を要せぬ。従つてまた、古瓦がおひおひ、古代史研究の上に巾をとる將來といふより、現在が等閑の會を許さぬものあり。本分冊二巻において、所論數十篇いづれも斯道の猛者によつて遺憾なく盡すところあるとともに、出土古瓦の寫真と實測とを添附したのは、研究の至便、茲に極まるといふも過言であるまい。われら素人においては、研究着手に好箇の手引と歡喜せしめられる。少しくいふ、古瓦研究の精緻甚だ喜ぶべしといへども、そこに實物偏重がうまれ、獨斷的な實年代が創造される。苟しくも、その獨斷的系統に外れた場合、一片の古瓦が、さらに怖るべき獨斷的史論を發生すること喜田博士をまつて知らず。殊に遺憾ながら、大陸流入の文化を拒みがたい古代史においては、形式發達の次第を小楯に、史的な前後を斷定し難い場合あるべく、文化舶載の前後が、食

ひ違ひを生ずること、なしといへない。さらに文献の疎漫は、それをのみ絶對とは頼めぬ場合あり、欽明朝以前に佛教なしといへないなら、四天王寺以前に伽藍建立がなかつたとは斷言できない。悉く書を信すれば書なきに如かざるが如く、なほかつ悉く古瓦を信すれば古瓦なきに均しかるべし。故にたとへ系統的に前後があるにせよ、その前後の物が同時代に並び存したことを是認する雅量はありたい。これをたとへば洋服に下駄、陣羽織にダン袋をはいたのは、明治十年頃とのみ限るべからず、田舎の中學校生たる筆者の如く、小倉の洋服に赤毛布をかぶり、下駄をはいたのが明治三十五年であつた。昭和十四年にして洋服下駄ばきが復活してゐる。觀念の精密な排列は、學的研究に缺くべからざる態度ではあるが、過ぎては及ばず、柱に膠して瑟を彈ずるに到つては賛成し難く。實はその膠柱者流の甚だ多い今日を呪ひたくなる。少しく附贅して此の好著を紹介す、なほ詳しくは考へる積りである。「思ひだす悔の多さよ古曆」

喜田、足立兩博士の「法隆寺論争」一卷、通讀せしめられ了る。これに對する批判は、門外漢の發言すべきでなく、容赦するのが當然とは存するが、希望をいへば萬人に異存なからしめる程度の確證が出てもらひたい。喜田博士の再建論が篤學温厚の長者、小杉温邨先生の素志を嗣がれたものであるのは告白の通り、そこで再建論は二代を繼承してゐる。足立博士の二寺併存説の發因を模索するに、これまた故關野博士の遺説を相承されたものの如くである。關野博士が「用明寺は現法隆寺西院にあたり、太子寺は若草塔址の附近にあり、焼けたのは太子寺である」と發表されたのは昭和三年史學雜誌三九の四にある。「これ從來の先生のお説を一步、進められたもので其の間、重大な意味がある」と足立博士が書いて居らるるのが昭和十年十一月三十日鶴故郷舎發行の「續法隆寺研究」一六〇頁である。然るに足立博士の新説は、「若草塔址にあつたのが

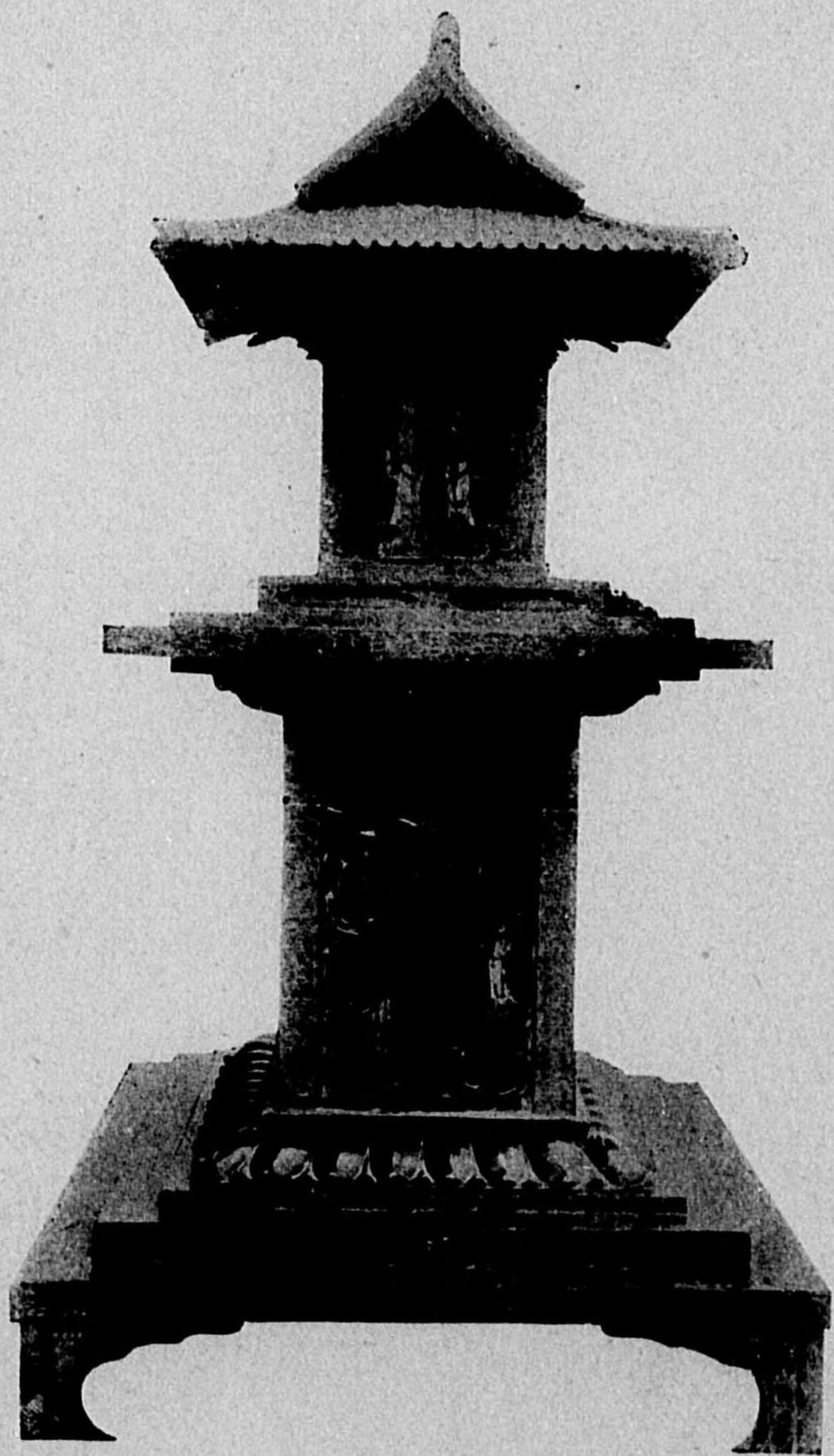
用明寺、現法隆寺にあたるのが太子寺」と彼我を置換へただけのことになつてゐるから、とにかく二寺併存説は大體において關野博士の法脈を繼承されたことみてよからう。つまり再建が師資相承なら非再建が師資相承、二代續きの論争といふことになつて、せめてモウ一代續いたら論争は信仰化するに充分の見込みがある。「夕立や法華かけこむ阿彌陀堂」で、一夕立せぬことには、とても兩者の和解は見込みがない。喜田博士が息子のやうなのを向ふに廻して、持説を守るに急なのは鬢髪の白さをいとはぬ點で、別當實盛をしのご、意氣の壯なのと、學に忠なる態度を仰ぐ。筆者が史學者であつたとして、此の模倣は到底できなない、法隆寺よりはその方が偉觀だ。尤も褒めておかぬと後日が蒼蠅いけれども、そのため、特に褒めたくなくなる。喜田博士もヒビのいつた身體なら、早く後繼者を作ること、故穂積八束博士が故上杉愼吉博士におけるが如くありたいもの。建武の昔、正成は肌の守りをとりいだし、これを汝に譲るなり、吾とも

かくも、なるならば、世は尊氏の世とならん、といったやうな歌をうたつた少年時代を回想する。世が非再建にならぬためには肌の守りをとりいだし、それを誰かに譲つとかにや不可ん。後世を怖れとく必要がありさう。

「背の子に一ッ持たせて夏蜜柑」

○

「唐招提寺の新研究」を贈られて敬讀したと申したいが、まだ半分も讀まぬ前に、卷末別輯の小場恒吉氏の「法隆寺再建論を賛して喜田博士の靈に献す」と佐伯啓造君の「喜田貞吉博士略傳」を魅讀せしめられた。法隆寺の再建、非再建を聞き倦きたやうなことを中外日報にかいたので、喜田博士から抗議されたのは、ツイ四五日前のやうに思つてゐる。机の抽出をさがしたら、手紙がまだ残つてゐるかも知れない。怪しからぬのは法隆寺をとり巻く一群の盲従者ども、再建論を蛇蝎のごとく嫌ひよる。寺の歴史が一百年減するのが、それほど残念なら、喜田博



法隆寺大實藏殿玉蟲御厨子側面



法隆寺寶藏殿安置橋人厨子本尊

士を咀ふまでに、日本書紀を焼かずばなるまい。それとも法隆寺は神武東征の刹
那に、地中から湧き上つたやうな珍説をデッチあげたらごんなものか。關野博士
の人格學識に敬意を表するに吝でないが、さりとて其の立論が不可侵とまでは
考へられぬ。殊に御當人が末期に及んで「法隆寺に二ツあつた」などと苦しい陳
辨に及んでは、明らかに非再建論の自爆といふもんだ。それをまた後生大事に、
太子のために別殿なかるべからずなどと、無理な構想に基礎を置いて、新非再
建論を唱導する人の師恩奉持の道念には感心するが、社會的な信用は零に近い。
世間が黙つてゐるのは、其の説に感心してゐるなどは思はぬがよい、感心せ
ぬ一人が小場恒吉氏の一論である。こんな論争は裁判所の判決をまつわけにゆ
かず、大審院の最終審をうける譯にゆかぬので、各人各箇に、嚴密科學の外装
をかり來つて、勝手に熱を吹くし、それをまた一知半解の徒がヤイヤイ騒ぐも
のだから法隆寺の研究價值が、その一點に集約されたやうになつて了つた。そ

の罪は非再建論者の負擔すべきものだ。寢た兒を起したのは非再建論者なんだ。關野博士を發頭人とする處の一群の盲從者の責任なんだ。そこでききたいのは關野氏以前の法隆寺の諸僧は日本書紀をどう讀んでゐたか、寺傳を信じて、日本書紀を錯簡とみてゐたか、虚偽の記載と讀んでゐたか、その點を訊きたい。

「街中に残る在所や蕪汁」

○

「法隆寺の壁畫」は夢殿の選書として發行され、元より諸學者の論究を連ねたのは内容豊富の一語につきよう。讀むべきは金堂解體、壁畫保存に関する江湖の論評である。大量觀察の上の正鵠を失はぬやう、賛否兩論を掲載したのは、編者の立場上、實は止むをえまいが、敢然、筆を鋭くして自稱保存論者の腦天へメスを打込んで貰ひたかつた。何と論じようとも、法隆寺を破壊し、壁畫を台なしにする者があつたら、彼の保存論者の一群であると思つてゐたら好いの

だ。金堂は今日只今、雨漏りがするのでない、今、直ちに修理の急が迫つてゐるのではないのだ。ただ此の機を外したらといふので、關係者が意氣込んでゐるといふ状態だ。解體すれば當然、壁畫にふれないでをれない、そこで此の壁畫をどう始末するか、切り取つて後で接合する、外した壁面は別館へ安置すると勝手な熱をあげてゐる。利休いでて茶道が亡び、芭蕉いでて俳諧滅ぶといふ通り、況んやこの連中が結局、壁畫を毀すのであるまいか。生半可に法律を嚙つてゐる者ほど辯護士に嫌はれる、少しばかりの醫學的知識のあるのが、生兵法な手療法で生命を捨てることがあるやうに、専門知識を全智全能と錯覺してゐる連中が揃つてゐるから、壁畫破壊には申分のない道具立である。千三百年の遺構といつてチャホヤするのは、單に建築や美術的見地からいふことで、信仰についての主觀的諒得のあるのが一人でもあることか。それらが壁畫を切取るといふのだから耐らぬ、小野小町の美貌にはれこみ、その首をチョン切つて

酒精漬にするといった議論だ。鐵筋混凝土の別館へ保存するといふが、その別館を誰が作るか、作らうにも鐵筋があるまい。模寫した壁畫を、その代りに簞めようといふ寸法らしい。まるで手脚を截つて、義肢義足でラチをあげようといふのだ、恐れいつた保存である。「湯豆腐や首がガタつく貝杓子」

○
喜田博士より著者への書簡 (一) 昭和十四、六、十一

お葉書き並びに「聲前句後」を同時に拜見、おかげで故關野氏に、そんな説がすでに昭和二年にあつたことを始めて知りました。迂濶千萬なことですが、それで大いに關野君を見直すことの出來たのを喜ばしく存じます。關野君はごこまでも文献を無視するんだと、いささか氣の毒にも思ひまた齒がゆくも思つてゐたのでしたが、やはり足立君同様、私の罹災説を認めてゐたのでした。足立君の今回の説は、ただ本尊位置問題と、焼けた瓦の方は法隆寺瓦よりも古いとの鑑

定から、兩者を置きかへた以外、何もなかつたので、今更おもへば、足立君の新説として聯か提灯を持ちすぎた感があります。これは是非、關野君のために一言せざるべからざるものです。御注意多謝。

喜田博士より著者への書簡 (二) 昭和十四、六、十四

法隆寺に關する御通知有難く拜見仕りました。近頃胃を損じて居り、靜養を命じられましたので、代筆を以て取りあへず御挨拶申上げます。昭和三年の關野君の講演は、私も聞いて居つて、その際、一矢酬ゐたのでしたが、その後すっかり忘れて居ましたのです。關野君が、その前年からすでに、日本紀の記事を認めて居られましたことは、變説改論とはいへ、大いに見上げたことと賞讃すべき次第です。それを紹介して居る足立君が、私同様忘れてしまつて、今回の新非再建論を全く獨創の如く、「かほごの見やすき道理を、これまで何人も考へなかつたのは不思議だ」と、くりかへし云つて居られるのは、妙なものでせ

う。關野君のと足立君のとは、只、寺をとりかへただけのちがひ、また昭和二年に奈良の田村吉永君の發表した法隆寺移建論は、本尊の問題なり、太子のため、寺がなければならぬと云ふ理由なり、又、若草伽藍を用明寺とし、今の伽藍を太子寺とする點まで、すべて足立君と同一で、ただちがふところは、足立君は太子寺を法隆寺境内の一佛堂となし、田村君のは法隆寺とは別の寺であつたのを、火災後今のところに移して之を法隆寺としたといふ點だけです。これも足立君は見てゐない筈はないのですが、やはり私同様、忘れてしまつて居たと見えます。いづれ之については「見損なつてゐた關野博士と法隆寺二寺説」といふ問題で、歴史地理誌上に關野君の變説を賞讃し、ついでに、田村君の所説を學界に紹介して見たいと思つて居ります。

法隆寺論爭文献

會津八一

法起寺塔婆露盤銘文考

東洋學報第十九卷第一號

昭和六年

法起寺塔婆露盤銘

東洋美術第九號

昭和六年

法輪寺創建年代考

東洋學報第十九卷第二號

昭和六年

法隆寺建立年代私考

「法隆寺・法起寺・建立年代の研究」

昭和八年

「法起寺塔婆露盤銘文考」の筆者として

夢殿第九冊「太子遺蹟研究」

昭和八年

秋山義一

喜田博士の「神社及寺院建築と住宅建築」に就て歴史地理第四十六卷第五號

大正十四年

斑鳩寺法隆學問寺別寺説に就ての一考察

史學雜誌第三十八卷第十一號

昭和二年

法輪寺建立論に就いて

歴史と地理第二十五卷第三號

昭和五年

足立康

法隆寺講堂に關する諸問題

東洋美術第十八號

昭和八年

法起寺三重塔平面に關する疑

史蹟と美術第三十六號

昭和八年

池後寺即法輪寺論の誤謬

考古學雜誌第二十四卷第二號

昭和九年

法隆寺五重塔の高さに就いて

夢殿第十冊「塔婆研究」所收

昭和八年

- 法輪寺推古天皇十五年創立説の疑 寶雲第九册 昭和九年
- 法起寺塔婆露盤銘の原位置に關する疑 史蹟と美術十一月號 昭和九年
- 法隆寺推古天皇十五年焼失説の疑 夢殿第十二册「法隆寺の諸問題」 昭和九年
- 法隆寺大講堂の平面に就て 夢殿十四册「續隆寺研究」 昭和十年
- 法隆寺に關する關野先生の業績 夢殿第十四册 昭和十年
- 法隆寺堂塔に關する古今目錄抄の一記事 東洋美術二四號 昭和十二年
- 今の法隆寺伽藍は飛鳥時代の創建 歴史地理七四號 昭和十三年
- 喜田博士の法隆寺再建論の根據 以我留我九號 昭和十四年
- 法隆寺建築の様式に就て 建築史一卷五號 昭和十四年
- 法隆寺再建論と非再建論 建築史一卷三號 昭和十四年
- 法隆寺持統天皇七年再建説に就いて 史蹟と美術十卷九號 昭和十四年
- 法隆寺新非再建論 史蹟と美術十卷五號 昭和十四年
- 法隆寺論争講演補遺四則 「法隆寺論争」 昭和十四年

- 法隆寺問題に就きて石田茂作氏に答ふ 「法隆寺論争」 昭和十四年
- 法隆寺新非再建論の新證據 建築史三卷四號 昭和十五年
- 法隆寺再建非再建論争史 「單行本龍吟社版」 昭和十六年

天沼俊一

- 法隆寺金堂復舊圖説明 建築雜誌第二十八卷第一號 明治四十三年
- 飛鳥奈良時代の佛寺建築 「奈良時代史論」 大正三年

伊東忠太

- 法隆寺建築論 建築雜誌第八十三號 明治二十六年
- 法隆寺建築論 考古學雜誌第一卷 明治二十九年
- 元祿年間に於ける法隆寺伽藍修繕の真相 建築雜誌第百三十二號 明治三十年
- 法隆寺建築論 「東京帝國大學紀要第一册」 明治三十一年
- 聖德太子と建築 南婁文庫講演集 大正八年
- 法隆寺五重塔に關する新發見 史學雜誌第三十七編第六號 大正十五年
- 古代の建築 雄山閣「考古學講座」 一二五

石田茂作
喜田・足立兩博士の法隆寺論に就いて
伊藤清造
法隆寺の再建設と非再建設

「東京日日新聞並法隆寺論争」 昭和十四年
建築世界第二十卷第七號 大正十五年

池田谷久吉

法隆寺五重塔と空洞調査研究

同人著「パンフレット」 大正十五年

法隆寺五重塔空洞に就きて

寧樂第六號 大正十五年

再び法隆寺五重塔心柱下空洞に就いて

夢殿第十冊「塔婆之研究」 昭和八年

法隆寺瓦と四天王寺瓦の比較に就て

夢殿十八卷 昭和十三年

上田三平

法隆寺境内に於ける古瓦包含状態に關する調査「法隆寺出土古瓦の研究」

大正十五年

法隆寺防火水道工事の副産物

史蹟名勝天然紀念物第一卷第三號 大正十五年

法隆寺の考古學的研究

寧樂第六號 大正十五年

法隆寺伽藍の礎石に就いて

史學雜誌第三十八卷第八號 昭和二年

法隆寺再検討の考古學的資料

夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」 昭和九年

小野玄妙

法隆寺堂塔造建年代私考

佛書研究卅一・卅三・卅七・四十四・四十七號 大正六年

法隆寺堂塔造建年代考

寧樂第六號 大正七年

夢殿と法隆寺

同人著「大乘佛教藝術史の研究」 昭和二年

大脇正一

四天王寺の移建設より大阪府下三大百濟寺に及び法隆寺の現在飛鳥時代建造物は創建當時のものに考察す

史蹟と美術三十八號

小場恒吉

法隆寺再建論を替して喜田博士の靈に献す

以可留我十號 昭和十五年

大屋徳城

法隆寺が焼けなかつた

中外日報 大正十四年

文化史上に於ける法隆寺の地位

寧樂第六號 大正十五年

大口理夫

喜田・足立兩博士の法隆寺論

畫說第二十九號 昭和十四年

川田剛

寶物取調に就きて(特に法隆寺の遺寶に就て)

皇典研究所講演 明治二十二年

香取秀眞

法隆寺罹災の童謡と玉蟲厨子の製作年代

讀賣新聞 明治三十八年

再び法隆寺罹災の童謡に就いて

日本美術第八號

明治三十八年

岸熊吉

法隆寺出土文様瓦に就て

「法隆寺出土古瓦の研究」

大正十五年

飛鳥時代の寺院建築

建築と社會第九卷第三號

大正十五年

夢殿の建築

夢殿第一冊「夢殿之研究」

昭和五年

法隆寺五重塔の實狀と一部復原的考察

夢殿第十冊「塔婆之研究」

昭和八年

喜田貞吉

關野平子二氏の法隆寺非再建論を駁す

史學雜誌第十六卷第四號

明治三十八年

法隆寺再建非再建に關する審判判決書

歴史地理第七卷第四號

明治三十八年

記録上より藥師寺金堂三尊の年代を論ず

史學雜誌第十六卷五號

明治三十八年

法隆寺の罹災を立證して一部藝術史家の研究方法を疑ふ

歴史地理第七卷第五號

明治三十八年

法隆寺建築論の沿革附論文年表

歴史地理第七卷第五號

明治三十八年

法起寺及法輪寺塔婆建築年代考(附法隆寺論)

歴史地理第七卷第五號

明治三十八年

藥師寺東塔建築年代考(附法隆寺再建論)

歴史地理第七卷第五號

明治三十八年

藝築史上飛鳥時代といふ名稱に就いて

歴史地理第七卷第五號

明治三十八年

法隆寺建築論に關する諸大家の意見

歴史地理第七卷第六號七號

明治三十八年

所謂推古式とは何ぞや

歴史地理第七卷第七號

明治三十八年

所謂法隆寺建築論とは何ぞや

歴史地理第七卷第七號

明治三十八年

法隆寺罹災論等に對する諸種の駁論に就て

歴史地理第七卷第七號

明治三十八年

關野君の法起寺塔婆年代考を駁す

歴史地理第七卷第十一號

明治三十八年

平子君の法隆寺非再建論を駁して其單に妄想に過ぎざるを明かにす

歴史地理第七卷第十二號

明治三十八年

法隆寺再建論を主張して反對論者に告ぐ

歴史地理第七卷第十二號

明治三十八年

法隆寺非再建論を駁す

宗教界第一卷第四號

明治三十八年

最近の法隆寺非再建論を評す

歴史地理第八卷第一號

明治三十九年

奈良朝寺院史(法隆寺建築の條)

「奈良時代史論」

大正三年

法隆寺の古建築は果して推古式か

歴史地理第二十六卷第二號

大正四年

- 法隆寺が焼けなかつた云ふ論に就いて
「中外日報」
大正 十四年
- 神社及寺院建築と住宅建築(法隆寺の條)
歴史地理第四十五卷第五一七號
大正 十四年
- 法隆寺五重塔心柱の空洞
大阪毎日新聞
大正 十四年
- 法隆寺の最近調査の結果に就きて
史學雜誌第三十八卷第六號
昭和 二年
- 斑鳩宮と斑鳩寺に關する雜考
夢殿第二冊「夢殿研究下」
昭和 六年
- 法隆寺五重塔に關する幾多の疑問
歴史地理第六十卷第七號
昭和 八年
- 其の後の法隆寺に關する諸問題
東北帝大「文化」第一卷第五號
昭和 九年
- 法隆寺の諸問題
大和國史會夏期講演
昭和 九年
- 法隆寺再建非再建論の回顧
夢殿第十二冊「法隆寺の諸問題」
昭和 九年
- 法隆寺建築年代論の回顧
「六十年の回顧」
昭和 八年
- 法隆寺講堂の謎
歴史地理六十九號
昭和 十二年
- 實物調査から得た法隆寺再建論
以可留我八號
昭和 十三年
- 足立博士の法隆寺新非再建論
以可留我九號
昭和 十四年

- 法隆寺論争講演補遺四則
「法隆寺論争」
昭和 十四年
- 石田博士の「法隆寺問題批判」を讀みて
「法隆寺論争」
昭和 十四年
- 法隆寺再建の辯
科學知識十九卷五號
昭和 十四年
- 今の法隆寺伽藍は焼失後の再建
歴史地理七四卷一號
昭和 十四年
- 見損つてゐた關野博士と法隆寺二寺説
歴史地理七四卷二號
昭和 十四年
- 歴史家の見たる古瓦の研究(法隆寺瓦の條)
夢殿論誌十九卷
昭和 十四年
- 久米邦武
歴史地理第七卷第六號
明治三十八年
- 法隆寺再建非再建論を讀む
大阪毎日新聞所載
大正 十五年
- 黒板勝美
塔下の空洞と發見品では再建非再建は判らぬ
皇典研究所講演
明治二十二年
- 黒川眞頼
東大寺法隆寺の話(法隆寺建築の條)
國華第九號第十號
明治二十二年
- 法隆寺建築説
如蘭社二十九號
明治二十五年
- 法隆寺東大寺の話(法隆寺建築の條)
夢殿第十二冊「法隆寺の諸問題」
昭和 九年
- 小酒井儀三
國史上に於ける法隆寺の地位
昭和 九年

小杉 温郎

美術と歴史との関係(法隆寺の條)

皇典研究所講演

明治二十二年

法隆寺金堂に置く所の玉蟲厨子

國華第七十八號

明治二十九年

法隆寺金堂壁畫の説に就きて

國華第七十九號

明治二十九年

法隆寺五重塔中に置く所の塑像佛像又人物

國華第八十號

明治二十九年

美術と歴史との關係(法隆寺の條)

日本美術第七十四號

明治三十八年

國華記者

法隆寺焼失非焼失論

國華第八十二號

明治三十八年

法隆寺論(再建論批判)

國華第八十三號

明治三十八年

佐藤 佐

法隆寺防火設備と空洞調査に據る非再建説

夢殿第三冊「太子と法隆寺研究」

昭和 六年

法隆寺建築

同人著「日本建築史」

大正 十四年

法隆寺再建非再建論争の推移

同人著「大日本建築全史」

昭和 八年

菅野 眞澄

法隆寺再建論を主張して反對論者に告ぐ

夢殿第十二冊「法隆寺の諸問題」

昭和 九年

歴史地理第七卷第八號第十一號

明治二十八年

推 玉蟲 厨子(附法隆寺の建築)

菅田登美雄

國華第八十二號

明治三十八年

法隆寺雜感(附法隆寺建築論)

建築と社會第八卷第十二號

大正 十四年

菅原 明朗

法起寺の塔と藥師寺東塔との比較

佛教美術第一冊

大正 十三年

關野 貞

法隆寺金堂塔婆及中門非再建論

建築雜誌二百十八號

明治三十八年

法隆寺金堂塔婆及中門非再建論

史學雜誌第十六卷第二號

明治三十八年

飛鳥時代と謂へる名稱に就いて

歴史地理第七卷第七號

明治三十八年

法起寺法輪寺兩三重塔の建築年代を論ず

歴史地理第七卷第七號

明治三十八年

法隆寺堂塔の建立年代に就いて

宗教界第一卷第三號

明治三十八年

美術史上に於ける法隆寺の地位

太子一千三百年紀念祭講演

明治四十四年

美術史上の法隆寺

美術の日本第三卷第六號

明治四十四年

飛鳥及奈良時代の美術(法隆寺の條)

「奈良時代史論」

大正 三年

聖德太子と法隆寺(法隆寺建築の條)

南藝文庫講演

大正 四年

- 建築史上より見たる法隆寺
- 建築史上より見たる法隆寺
- 法隆寺堂塔非再建の新證據
- 日本文化を世界に代表する法隆寺伽藍
- 飛鳥時代の瓦當文様に關する疑問
- 法隆寺堂塔の基壇に使用せられたる凝岩様の石材に就いて
- 法隆寺再建の誤謬
- 田村吉永
法隆寺移建論
- 法隆寺五重塔下の空洞に法輪寺所藏の「三重塔より出現の佛舍利記」について
- 高山林次郎
法隆寺(法隆寺建築年代の條)
- 田中重久
「池後寺考」會津博士法隆寺外二寺建立年代の研究に不足資料の補遺
- 美術之日本第十三卷五號
- 東京朝日新聞
- 建築雜誌第四百二十七號
- 大陽第三十一卷第八號
- 中央建築號
- 考古學雜誌第十五卷第七號
- 東京日日新聞
- 現代佛教第五卷四五―四六
- 考古學雜誌第二十一卷第七號
- 日本美術史
- 歴史地理第六十三卷第二號三號
- 昭和十年
- 大正十年
- 大正十一年
- 大正十四年
- 大正十三年
- 大正十四年
- 大正十五年
- 昭和三年
- 昭和六年
- 明治三十七年
- 昭和九年

膳三穂娘考

法隆寺建立年代論の再吟味

歴史と國學第十卷第六號

昭和九年

法隆寺新非再建論の誤謬

夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」

昭和九年

法隆寺新非再建論駁論

歴史と國文學二十一卷二號

昭和十四年

法隆寺二寺併存説の誤謬

史蹟と美術第十卷八號

昭和十四年

法隆寺創立年代の研究

大和志六卷六號

昭和十四年

法隆寺再建の研究

考古學十卷九號

昭和十四年

高橋健自

飛鳥京古刹の堂宇配置の三様式(法隆寺論傍證)

宗教界第一卷號一號

明治三十八年

高橋勝利

法隆寺金堂藥師像脇土ミ盜難の阿彌陀像

古代文化研究第三號

大正十四年

坪井九馬三

法隆寺再建非再建の論争に就いて

歴史地理第七卷第六號

明治三十八年

塚本靖

法隆寺建築裝飾論

建築雜誌九十四號

明治二十七年

法隆寺は果して元祿の再建なりや

建築雜誌百二十九號

明治三十年

長井 行

飛鳥の遺物は何なりや(法隆寺の條)

史學雜誌第十五卷第十號

明治三十七年

長野宇平治

法隆寺伽藍の建築は元祿の再建になりしものなり建築雜誌第二百二十七號

明治三十年

再び法隆寺建築に就いて

建築雜誌第三百三十一號

明治三十年

永井 颯

法隆寺俗談

大阪朝日新聞所載

昭和十年

中尾 保

建築論の將來(法隆寺建築の條)

「サンデー毎日」

大正十五年

研究すべき法隆寺論

建築と社會第九號第四號

大正十五年

内藤藤一郎

法隆寺研究(金堂篇)

同人著「法隆寺研究」

昭和八年

日本美術

法隆寺非再建の新事實

日本美術第七十九號

昭和三十八年

濱田 青陵

法隆寺の建築様式と支那漢六朝の建築様式

「内藤博士還曆紀念支那學論叢」

大正十五年

「法隆寺論争」我觀

夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」

昭和九年

春山 武松

問題の法隆寺再建非再建に就いて

大阪毎日新聞

大正十五年

長谷川輝雄

法隆寺東院創立當時の計劃

建築雜誌第四百六十五號

大正十四年

法隆寺伽藍特に伽藍配置と塔婆の關係に就いて寧樂第五號

大正十五年

服部 勝吉

法隆寺建築年代の論争

同人著「日本古建築史」

大正十五年

法隆寺再建説と非再建説中に與へられたる

建築世界第二十卷第十號

大正十五年

伊藤清造氏の言に答ふ

建築世界第二十卷第十號

大正十五年

法隆寺夢殿を中心とする東院伽藍の由緒に就て夢殿第二冊「夢殿研究下」

昭和六年

平子 鐸嶺

大和法隆寺再造説についての疑

新佛教第二卷第十一號

明治三十四年

法隆寺草創考

國華百七十七號

明治三十八年

法隆寺草創考

歴史地理第七卷第四號五號

明治三十八年

「天智紀」法隆寺焼失説の誤謬

史學界第七卷第六號

明治三十八年

法隆寺伽藍主要建築物の非再建に關する

建築雜誌第二百二十二號

明治三十八年

記録的論證

讀賣新聞

明治三十八年

匿名氏の法隆寺説批評に就きて

讀賣新聞

明治三十八年

- 法隆寺論につきて久米先生の再喝を仰ぐ
喜田氏の法隆寺罹災説を駁して實物研究の辯に及ぶ
法隆寺伽藍主要建造物の非再建論證
天智紀九年童謡の誤解と玉蟲厨子に就て
再び天智紀の童謡に就いて
法隆寺法起寺建造年代の考證
ふたら
法隆寺建築の論争に就いて
藤澤一夫
法隆寺瓦一組の年代に就いて
藤田元春
法隆寺草創時代の日支交渉(法隆寺論傍證)
福山敏男
法隆寺問題管見
法輪寺建立に關する疑問(法隆寺論傍證)
法隆寺流記資財帳の研究(法隆寺論傍證)
- 讀賣新聞
歴史地理第七卷第六號八號
東洋哲學第十二卷第七號八號
歴史地理第七卷第八號
考古界第五卷第四號
考古界第五卷第九號
讀賣新聞
夢殿十八冊
夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」
東洋美術第十九號
夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」
夢殿十二冊「法隆寺の諸問題」
- 明治三十八年
明治三十八年
明治三十八年
明治三十八年
明治三十九年
明治三十八年
昭和十三年
昭和九年
昭和八年
昭和九年
昭和九年

- 堀井卯之助
大和の法隆寺(法隆寺建築の條)
- 時事新報
明治三十年

- 溝口禎次郎
法隆寺建築裝飾の年代に就いて
- 建築雜誌第百三十號
明治三十年

- 三宅米吉
探古考證雜抄(法隆寺の條)
- 考古學雜誌第一卷第一號第三號
明治四十三年

- 三浦周行
高麗尺と唐尺に就いて(法隆寺論傍證)
- 歴史地理第七卷第七號
明治三十八年

- 源 豊宗
法隆寺建築様式の年代に就て
- 大阪毎日新聞
昭和十四年

- 法隆寺建築様式の時代に就て
- 考古學十卷九號
昭和十四年

- 水木要太郎
再建の時何故奉告書なきや
- 法隆寺講演筆記
大正十三年

- 岩崎重三
法隆寺金堂の基礎は人造石にあらず(法隆寺論傍證)
- 歴史地理第四卷第八號
明治三十五年

法隆寺の横顔 終 (以上)

本册圖版目次

野村邸内の若草塔心礎と筆者……………	口繪	北島男稿本中の若草塔礎見取圖と説明……………	本文挿繪
隣の法隆寺伽藍……………	同	若草伽藍址發掘鏡瓦……………	同
法隆寺金堂藥師如來……………	同	同 發掘の字瓦の一部……………	同
法隆寺金堂藥師如來光背銘文……………	同	法隆寺壁畫東小壁觀音菩薩……………	同
藥師像光背表面……………	同	同 西大壁阿彌陀淨土勢至菩薩……………	同
藥師像光背裏面……………	同	同 藥師淨土變天人一部……………	同
法隆寺金堂釋迦三尊……………	同	法隆寺金堂壁畫摸寫始まる……………	同
釋迦三尊像光背銘文……………	同	壁畫摸寫陣に設置の畫光色螢光板……………	同
元の位置に納つた若草塔址礎石……………	同	法隆寺塔婆の泣き佛……………	同
法隆寺若草伽藍址發掘現場……………	同	聖德太子畫像……………	同
明治二十年頃の法隆寺伽藍太子殿附近……………	同	聖德太子南無佛御二才像……………	同
現在の法隆寺伽藍中樞部俯瞰……………	同	法隆寺西圓堂藥師如來像……………	同
現存法隆寺伽藍配置と若草塔址方位圖……………	同	法隆寺金堂天蓋二個……………	同
法隆寺論争に關する四ツの顔……………	同	解體の法隆寺五重塔……………	同
法隆寺夢殿の行信大僧都横顔……………	同	五重塔空洞底部詳細圖……………	同
若草塔礎(反鼻塚)礎石見取圖……………	本文挿繪	大寶藏殿玉蟲厨子側面……………	同
北島男稿本中に見える若草塔礎の條……………	本文挿繪	大寶藏殿橋夫人厨子本尊……………	同

[有所權版]



發行所

奈良縣生駒郡
法隆寺二六八

日本出版文化協會

會員番號

一〇二〇三二番

鳥居郷舎出版部

電話法隆寺四番
振替大阪六二六七三番

昭和十七年二月十五日印刷
昭和十七年二月二十五日發行

(法隆寺の横顔)
● 壹圓六拾錢

著者

釋 瓢

齋

發行者

奈良縣法隆寺二六八
佐伯 啓造

印刷所

奈良市西寺林町
近東印刷部

電話奈良二六四一

稱讚滔滔五版出版來

法隆寺見學必携の三部作

法隆寺美術讀本

法隆寺見學の無二の寶典
法隆寺研究の最高指針書
A型5號七拾頁 圖版六拾圖
定價九〇錢 送料六錢
紙使用

法隆寺建築讀本

法隆寺飛鳥建築の研究書
精緻なる内容と豊富な圖版
A型5號六拾頁 圖版四拾圖
定價八〇錢 送料六錢
紙使用

法隆寺の壁畫

壁畫研究の決定版
A型5號百四拾頁 挿圖多數
定價一三〇錢 送料十錢
紙使用

近刊古寫經綜鑑・新編南都七大寺の行事

發行所 奈良縣法隆寺二六八

振替大阪六二六七三番

鷦 故 郷 舎

待望の古寫經寶典完成迫る

近刊

古寫經綜鑑

四月上旬
出來豫定

石田茂作博士序文
大犀徳城先生序文

田中塊堂先生著

A型5號九ボ一段組、總頁三百餘頁、挿繪寫經圖版二百數十葉、
口繪コロタイプ數葉、表紙紺紙銀泥使用、洋本箱入豪華本 【定價五圓 豫定】

本書内容

- 第一編 總説(上) 一、佛教傳來と上代の寫經、二、天平時代と寫經所、三、圓仁と如法經、四、藤原時代と裝飾經、五、時代思想と寫經の種々相、六、衰微時代
- 第二編 總説(下) 一、經典と譯出、二、書風と書體、三、天平時代の寫經生人名
- 第三編 解 説……(約二百点の寫經を挿入圖版により説明す解説は平易懇切を極む)
- 第四編 現在古寫經年表 (約五十頁の豫定)

寫經研究の入門書はこれ

平易なる解説と豊富な圖版

發行所 奈良縣法隆寺

鷦 故 郷 舎

振替大阪六二六七三番
電話法隆寺 四 番

鶴舎の近刊と重版

七大寺叢書	南都七大寺の行事	重版 出来
七大寺叢書	東大寺新研究	近刊
夢殿別巻	法隆寺素描	近刊
中川善教著	隨筆 ゆきぼこけ	近刊
喜田貞吉著	法隆寺の東院	近刊
夢殿特輯	塔婆の研究	重版 近々
夢殿特輯	法隆寺の諸問題	重版 近々
夢殿特輯	弘仁文化の研究	重版 近々
夢殿十七冊	推古美術諸問題	重版 近々
夢殿廿一冊	佛畫の新研究	近刊
青木茂作著	天壽國曼荼羅の新研究	近刊

920
226

終